若澤寺を探るⅡ

若澤寺跡

～若澤寺跡調査報告書～

長野県波田町教育委員会

若澤寺跡

～若澤寺跡調査報告書～

目　次

はじめに …… 3
調査目的 …… 4
若澤寺通説 ……教育委員会 … 6
遺跡調査からわかったこと ……原　　明芳 …10
若澤寺跡から出土した遺物 ……市川　隆之 …62
文書に見る若澤寺 ……百瀬　光信 …84
若澤寺絵図比較 ……波多腰英文 …88
若澤寺に見られる様々な信仰 ……牛山　佳幸 …98
若澤寺構築物の現在の状況 ……教育委員会 …110
元寺場遺跡出土　古瀬戸瓶子・四耳壷 ……教育委員会 …112
火葬骨の鑑定結果報告について
若澤寺年表 ……教育委員会 …114
若澤寺を知るための活動 ……教育委員会 …122

はじめに

若澤寺遺跡の中堂救世殿の平場を、トレンチ状に掘り下げた何層かの土の壁を観ていますと、平場を造成するために、汗水流して働いていたであろう往時の人々の様子が思い浮かんで参ります。

波田町教育委員会では、第２次若澤寺総合調査を実施するにあたり、発掘場所について、方丈・護摩堂跡下の手付かずの平場跡を選びました。しかし、「埋蔵文化財は、発掘等をしないで、地中に埋もれたままにしておくのが最善の保護だ。」という言葉に首肯しながらも、「遺跡の中心を成す平場も掘ってみたらどうか。」という案が出されました。有識者のご意見を伺う中で、このような発掘調査を行う機会は何回も訪れない、ということから、中堂救世殿跡にもトレンチを入れることになりました。今回の調査の成果や今後の課題につきましては、この冊子をご覧いただければと思います。

平成11年度から、第１次第２次と進めて参りました若澤寺遺跡の学術総合調査が、多くの皆様方の若澤寺に寄せる愛情と熱意と献身的なご協力とによりまして、波田町のルーツを解き明かす貴重な資料としてまとまりました。ここに、関係者の皆様方に心より感謝申し上げます。

平成17年３月

教育長　関　　義弘

調査目的

第１次若澤寺遺跡総合調査・元寺場遺跡調査（平成11～13年度実施）に引き続き、今回の第２次若澤寺遺跡総合調査が実施された。波田町の歴史・文化財を語る上で、若澤寺の歴史的な価値というものは、最も重要な遺物であり、地域のシンボル的なものでもある。将来にわたって、保存・保護・活用を検討することは町の責務であり、教育委員会では、寺跡の遺構調査を中心とした学術調査をここに実施した。第２次調査までは、基礎的なデータの取得と集積であり、今後、調査を続ける中で『信濃日光』とまで称えられた若澤寺の謎とロマンに迫りたい。

調査関係者

○調査指導者　笹本　正治（信州大学人文学部教授）
牛山　佳幸（信州大学教育学部教授）
宮島　佳敬（長野県文化財保護協会）
樋口　昇一（長野県文化財審議委員）
中川　治雄（松本市文化財審議委員）
宮川　清治（長野県文化財保護協会）
茂原　信生（京都大学教授）
後藤　芳孝（松本教育事務所）
原　　明芳（松本市立菅野小学校教諭）
市川　隆之（長野県埋蔵文化財センター調査研究員）

○調査協力者　百瀬　光信、波多腰忠行、古畑　繁實、百瀬くに江、
藤澤　道子、麻田　明英（以上、文化財保護委員）
浅田信一郎、古田　咲美（以上、前文化財保護委員）
中嶋平次郎、中嶋　禮子、山口　琴三、田中　昭三、
大月　康雄、蒲生　　銕、柳澤　泰夫、上條　道代、
波多腰英文、丸山　観司、永塚　　博、山本　信雄、
山下　京子、株式会社 写真測図研究所（委託業者）

○教育委員会事務局

教 育 長	関　　義弘	
次長心得	古波田　守	
生涯学習課長	麻田　仁郎	(平成15年10月まで)
生涯学習係長	中野喜志子	(平成16年３月まで)
生涯学習係長	平林　　建	(平成16年４月から)
主　任	山本　政己	
主　事	岩崎　寛子	
主　事	百瀬　耕司	(平成16年４月から)

その他、ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

若澤寺通説

教育委員会

若澤寺の成立にはいろいろの説が有るが、原始的山岳信仰としての白山信仰が有力説となっている。古代、白山信仰は天台・真言の二宗の教義に取り入れられ、特に天台宗とともに広まった。若澤寺は古くは天台宗であったらしいが、永徳３年（1383）以前に宗論があって天台宗、真言宗が分かれ真言宗の寺となった特異な例として位置付けられている。

水沢を登りつめ、そこから尾根伝いに西に登ると白山（標高1,386m）がある。その頂上には石造りの白山祠があり、「菊理姫命」が祀られている。そこから南へ尾根を降った所に、若澤寺の草創縁起にある「大堂ヶ原」があり、また山頂から北東側の1,250mの所に「元寺場」と呼ばれる寺跡がある。ここが大同年間に坂上田村麻呂によって、若澤寺が再興されたところであるという伝承の地である。

平成11年～13年に行われた調査によって、堂跡と思われる礎石や建物が建てられたと思われる平場が確認され、平安時代の陶器や鎌倉時代の古瀬戸、五輪塔の一部、古銭などが発見され、この地で宗教活動が行われていたことが確認された。

水沢山中に造営された若澤寺は、鎌倉時代末の元亨２年（1322）に源重久が若澤寺の塔頭西光寺に金剛力士像を寄進しており、源姓波田氏一門の祈願所として栄え、南北朝から室町時代以降、真言密教の寺として発展、水沢山内に数多くの堂塔を建立してきた。その跡や場所が未確認の地名などが、今も山中に数多く残されている。

若澤寺風景

信濃奇勝録、信府統記、善光寺道名所図絵などには、次のようなことが記されている。

信濃国水沢山は松本より三里程西にあって飛騨への途中の上波田村より十八丁谷の流れに添ってさかのぼった所に有る。

若澤寺は、天平勝宝年中（749～757）、行基菩薩の開基とされ、大同年中（806～810）、田村将軍中興建立と言われている。古くは三十余丁山頂の元寺場にあったといわれているが、長禄２年（1458）今の地に移し、慈眼山若澤寺と号する。当山のまたの号を水沢山若澤寺といい、若澤は（水）の草字に誤って一点加え（若）澤寺となったとも言われている。

しかし、寺が元寺場から現在の若澤寺跡へ移った時期について、確実に示す史料・史実などはないが、長禄２年以前に現在の地で寺として活動した形跡も多く見られる。

若澤寺は、延宝４年（1676）京都智積院末寺となり、領主より寺領10石が寄進され、周囲約13Kmの壮大さで、末寺は「上波田村・西光寺」、「下波田村・法久寺」、「神林村・福応寺」、「小坂・定楽寺」、「竹田・明清寺」の５ヶ寺を数える寺であった。

また、寛政11年（1799）には京都の稲荷本山である愛染寺から、稲荷大明神安鎮の証書が与えられ、稲を象徴する神である稲荷社が造られていた。

近世末の嘉永５年（1852）の史料によると、檀家が80軒と少なく、さらに近世になってから、延宝元年（1673）の火災をはじめ、文政５年（1822）の阿弥陀堂の焼失など、寺の一部が焼失することがしばしばあった。このような状況で、若澤寺が寺院を経営していくためには、御朱印地及びその他の田畑の収入だけでは限界があった。そのため、御朱印寺としての面目を保つために、現世利益的な講を作って寄付金を募り、堂塔伽藍を美しく修復して、不特定多数の信者の喜捨に頼り、観光寺としての性格を持たせた。

そして信濃25番札所がある御朱印寺としての面目を誇示するため、御開帳〔延享元年（1744）〕、〔安永２年（1773）〕や法談会〔宝暦４年（1754）〕を行った。そのため、この寺は江戸時代には「信濃日光」ともいわれ、その景観や壮大さは、近在はもとより遠く江戸まで知れわたっていた。この時代のころまでは、仏供料その他の寄進も多く、寺院の経営も円滑に行われたようである。

古くからの言い伝えで、中堂救世殿の千手観音は田村将軍の兜の鉢の守り本尊、講堂の阿修羅王は弘法大使の作佛であり、金堂瑠璃殿の正観音は行基

元寺場での調査風景

菩薩の作で、疫病を除き、夫婦の親愛と尊敬の願ひ、その他すべての事に効き目があり、何事も祈ることによってかなえられると言われていた。

中堂救世殿の側に「忍杉」という大木があり、この杉は、男女の恋忍ぶ願いを聴いてくれるとの言い伝えがあった。また、境内には「雄鳥羽の滝」があり、ここに入浴すれば「色黒き者純白となり、醜き者も容貌麗わしくなる」という言い伝えがあった。

このようなご利益にあやかる為に、善男善女の参詣はもとより、文人墨客も数多く訪れた。中でも文化11年（1814）7月に、「東海道中膝栗毛」を著した十辺舎一九も、松本町の文人高見常庸の案内でこの寺を訪れた。

若澤寺の住持は世襲でなく、若澤寺で養成した弟子か近隣の同宗の寺院の僧侶が住持となったため、時には個性的な住持が就任し、天明（1781～1789）から寛政（1789～1801）にかけて、経営状況も思わしくなく種々の矛盾が表面化した。近隣の同宗の寺院との折り合いが悪かった事も非難反発をつのらせ、住持と檀家との間でしばしば紛争が生じた。檀家より住持の不行跡に対する京都本山への陳情と処分、江戸役寺真福寺あてに訴状提出など問題が山積した。

江戸時代末期、住持は檀家はじめ各方面との関係もよく、嘉永6年（1853）、若澤寺は多年の念願であった談林所として認められた。また、大規模な寄附を募り、各地から浄財を集め本堂、田村堂の屋根を銅瓦葺きとしたり、伽藍を修理し、観音信仰の寺、厄除けの寺として盛えた。このように寺の経営も軌道に乗ってきた時期に、明治時代を迎えたのである。

明治維新政府は、慶応4年（1868）神社に奉仕する社僧・別当の復帰・還俗を命じ、仏像を神体とすることを禁ずる神仏判然令を出した。松本藩は、戊辰戦争に朝廷側として参加することに遅れ、藩主戸田光則が謹慎処分を受

けたこともあり、政府の信頼回復のため積極的に取り組み、明治３年（1870）「廃仏毀釈」の藩令を出すに及んだ。

領内で廃寺となった寺は140余を数え、存続した寺院は15寺であり、全国で最も激しい地域の一つであった。波田の地域では、盛泉寺（曹洞宗）と安養寺（浄土真宗）の二寺のみが存続したが、若澤寺（上波多村）は無檀帰俗、真光寺（三溝村）、西光寺（上波多村）、法久寺（下波田村）が破却となり、いずれも真言宗の４寺が、明治初年に行われた廃仏毀釈には抗し難く、廃寺となってしまった。

現在では、当時の若澤寺の全形を知る資料としては、臼田町の神官井出道貞著「信濃奇勝録」、豊田利忠著「善光寺道名所図会」と版木に残された版画「若澤寺一山之略絵図」などわずか数点が残っているだけである。

このような有名寺院の若澤寺が廃寺となった原因として、松本藩の強い廃仏毀釈の方針のほかに、第一に檀家が少なく寺と檀家の間に円滑を欠いた、第二に同宗寺院と紛争し孤立した、第三に住持が世襲でなく地域と密接な関係がつくれなかった、第四に有力な檀家が明治初年に神道に改宗し、支持基盤が弱くなった事などがあげられている。

廃仏毀釈後、明治６年（1873）上波多村戸長・副戸長・学校世話役が連名で、主な仏像・仏具を盛泉寺へ預け、庫裏・勝手は帰農僧侶に居所として与える事、諸堂宇・門・鐘・建具類・諸道具その他売却物代金13貫612匁２分５厘を、学校の建築資金としたい事を願い出て認可されている。

しかし、庫裏・勝手を与えられた帰農僧侶は、観音堂と田村堂の銅瓦を勝手に処分していたため、旧檀中の抗議を受け庫裏・客殿共に檀中に返却し、観音堂が明治８年（1875）今井村扱所へ売却される事になった。他の建物・家屋の一部は明治11年（1878）波多村の６人に売却された。また、若澤寺の４町１反17歩のうち、田畑は筑摩県士族９人に、屋敷は波多村の５人に払い下げられている。

明治８年には、盛泉寺住職真木恵光から筑摩県に対し、若澤寺の観音堂を盛泉寺境内へ移築したい旨願い書が出され、許可されている。

町の歴史を振り返るとき、若澤寺の歴史は大変重要であるが、わずか数百年前の多くの事が謎につつまれてしまっている。史実に基づき、地域の人々が、地域の文化や歴史を知り、それを確実に解明し、未来に伝えることが、今の世に生きる我々の責任である。

遺跡調査からわかったこと

原　明芳

1．若澤寺とはこんなお寺です

若澤寺は、山号を慈眼山あるいは水沢山といい、江戸時代には「信濃日光」とまで呼ばれた、真言宗の名刹で、本尊は千手観音である。行基により奈良時代に開基され、坂上田村麻呂が再建したという伝承をもつ。当初は白山の南の大堂ヶ原にあり、いつの頃か元寺場に移り、江戸時代には間違いなく現在の場所に移ったとされている。時期等は諸説があり、はっきりしない。その解明が今回の調査の大きな課題である。中世には地元の豪族の庇護を受け、戦国時代には武田勝頼から寺領の寄進を受ける。江戸時代には、京都智積院の末になり、松本藩主から手厚く保護され寺領10石が寄進され、上波田の西光寺を含めて、５つの寺を末寺としている。それに加えて、信濃三十三所観音二十五番の霊場で、十返舎一九をはじめ多くの参拝客を集めるとともに、30年ごとの御開帳を行い松本平一帯から寄進を集めている。その、最も盛んであった江戸時代後期の伽藍の様子は、「若澤寺一山之略絵図」に描かれている。

しかし、明治４年（1972）の未曾有の松本藩の廃仏毀釈によって廃寺となり、仏像等の什物は散逸し、いくつかの建物は移され、今は石垣を残すのみである。

旧若澤寺銅像菩薩半跏像

現在若澤寺跡は、昭和59年３月10日に町指定文化財に指定された。隣接する波田山城跡（町指定文化財）とあわせて、歴史の散歩道として、看板・案内板等を設置し整備している。指定された面積は10,885m²で、約40人の地主の方が所有する民有地で、大半がカラマツ林となっている。

若澤寺に関係した建物・仏具として現存あるいは伝わっているのは、以下の通りで

ある。鎌倉時代以降の多くの建物や仏具が残されており、中世に寺として整備が進んだ様子がよくわかる。このほか、数多くの石造物が残る。

建　物

●田村堂（厨子）	室町時代後期	上波田	重要文化財
●中堂救世殿	江戸時代？	盛泉寺	既に無し
●金堂・方丈玄関	〃	松本市今井正覚院観音堂	
●鐘楼	〃	梓川村恭倹寺	
●宝篋印塔	江戸時代	山形村穴観音	
（西光寺関係）			
●仁王門	室町時代		
●阿弥陀堂	江戸時代？		

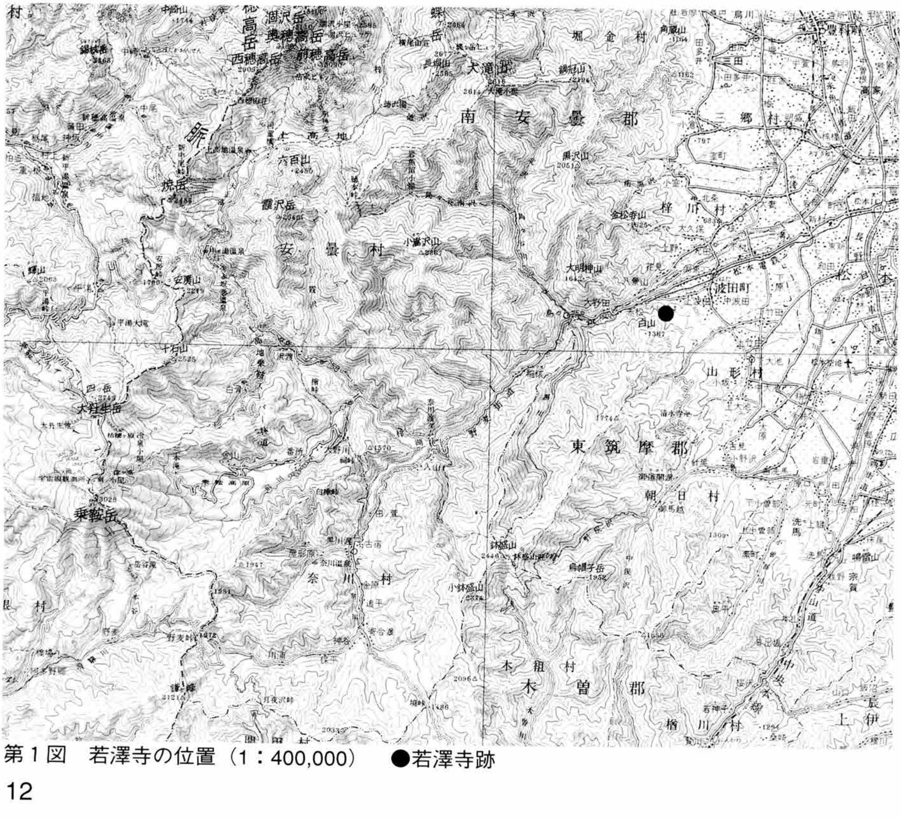
仏具等

●銅像菩薩半跏像	白鳳時代？	盛泉寺	県宝	
●銅像伝薬師如来坐像御正体残闕		鎌倉時代	盛泉寺	県宝
●木造弘法大師坐像・興教大師坐像		室町時代	盛泉寺	町指定
●銅像菩薩立像	室町時代	盛泉寺	町指定	
●木造不動明王立像	鎌倉時代末	盛泉寺	町指定	
●金亀多宝塔	江戸時代	盛泉寺	町指定	
●絹本不動明王掛軸	室町時代	上波田	町指定	
（西光寺関係）				
●木造金剛力士像（善光寺妙海作 胎内墨書名 元享２年（1322））		上波田	県宝	
●木造阿弥陀如来坐像	江戸時代	上波田	町指定	

2．地形と歴史的環境

①　地　形

東筑摩郡、木曽郡、南安曇郡の３郡にまたがる標高2446ｍの鉢盛山は、飛騨山脈からは東に独立した前山的な存在である。東の鉢伏山と西の鉢盛山と対比して呼ばれる松本平では著名な山で、両者の頂上からは北アルプス、南アルプス、八ヶ岳などを一望にできる。鉢盛山からは、四方に向かって尾根が張り出しているが、波田方面には唐沢山（標高1774ｍ）に向かって尾根が延び、そこで唐沢川を挟んで分かれるが荒倉山（標高1495ｍ）と白山（標高1387ｍ）と続いている。それらの山腹は急勾配であり、いくつもの急流の沢が流れ下っている。白山からも水沢、男女沢などが北へ向かって流れ、最終的には梓川に合流している。



第１図　若澤寺の位置（1：400,000）　●若澤寺跡

若澤寺跡は、その水沢に沿った標高940m前後の谷部に存在する。寺を造る際に大きく造成はされているが、北側に続く斜面には人手が加わっていない。なお、両側に山が迫っており、寺跡からの視界は狭い。麓の仁王門辺りとの比高差は300mほどである。

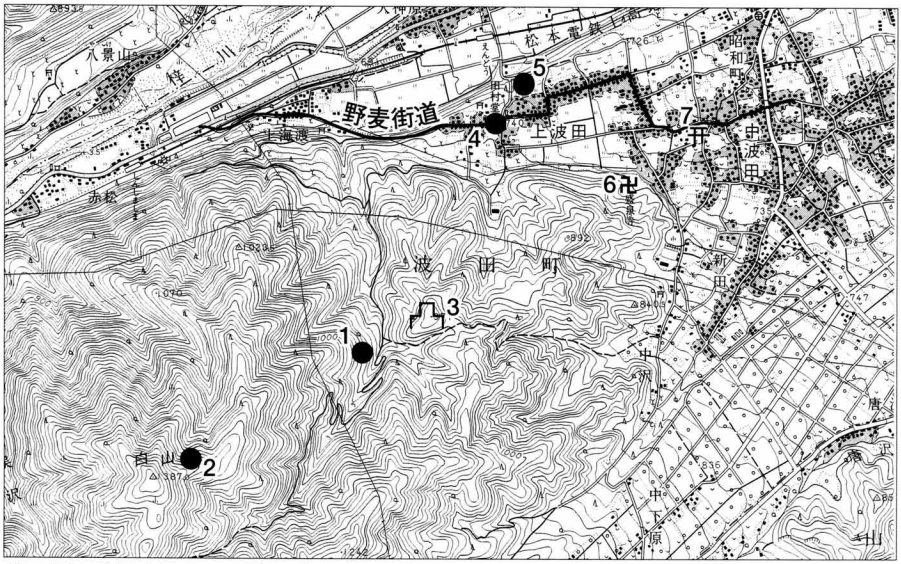
② 歴史的環境

ア 白山から山腹部分

白山は、松本市方面から見ると、西の梓川が流れ出してくる島々谷の入り口にそびえ立つ独立峰で姿がいい三角形の山である。その名の通り白山信仰と結びついた山と考えられ、頂上には祠が祀られ、若澤寺の絵図にも描かれている。白山社は、近世には白山権現とも呼ばれ、日照りの際に波田町ばかりではなく、梓川から水田に水を引いている松本藩の島立組が雨乞いを祈願する場所として、信仰が厚かった。白山へ向かう道は、元寺場跡の中央部を通っている。なお、白山から鉢盛山へ向かう平坦地には「大堂ヶ原」と呼ばれる場所があり、最初に若澤寺があったという伝承がある。白山から標高で100mほど下がった場所に元寺場跡がある。その調査成果は「元寺場跡報告書」に詳しい。北東には、規模が大きい波田山城跡があり、そこからは松本平から島々谷を一望できる。

若澤寺へ上る道は、現在林道が使われているが、近世の参道は水沢沿いを登ったらしいが、現在は水沢の急流による侵食などによって、ほとんどわからない。ただ参道に一丁ごとに置かれた丁石はいくつか残されている。また上波田から上がるこの表参道のほかに、中波田方面から上がる裏参道があったらしい。大正年間の国土地理院作成

仁王門（上波田）



第２図　若澤寺跡とその周辺（1：35,000）
1　若澤寺跡　　2　元寺場　　3　波田山城跡　　4　仁王門　　5　西光寺跡
6　盛泉寺　　7　諏訪神社

の１／25,000の地図には２本の道が記されており、辺り一帯には、「大木戸」「堂平」などの地名が残っている。

イ　麓の上波田地区

波田神社付近

上波田には、仁王門と阿弥陀堂が残るほか、若澤寺にあった田村堂（重要文化財）が移築されている。また、若澤寺に関係した多くの石造文化財が集められている。

仁王門と阿弥陀堂は、若澤寺の塔頭であった西光寺の建物といわれ、元禄年間（16世紀末）に廃寺になった際に、現地に移されたとされる。仁王門は若澤寺の山門ともなっており、仁王尊は胎内銘が「元享２年（1322）大旦那源重久仏師善光寺妙海」とある。現在４月に行われる股くぐりの行事が有名である。集められた石造文化財の中には、閻魔王の碑（天正２年（1574）年銘）、若澤道供養碑（天正３年（1575）年銘）があるほか、参道にあった丁石も集められている。

西光寺は、天正年間に「西行（光）寺　五石」と記されており、戦国時代

白山をひばりケ丘から望む

は独立寺院であった可能性が高いが、元禄年間の絵図では仁王門だけとなっていることから、そのころには廃寺となり、若澤寺の一部となっていた可能性が強い。西光寺は、現在の上波田集落の北側、現在は畑地となっている部分にあったとされる。上波田神社は、熊野三所権現で、戦国期に勧請されたといわれる。なお寺社として近隣には、下波田に諏訪神社、中波田には盛泉寺がある。盛泉寺は中世からの名刹で、若澤寺に関連した仏像・仏具などを保管している。

周辺の発掘調査はあまり行われていないが、村道の建設に伴って上波田の西光寺跡の南端が調査され、中世の遺構・遺物が発見された。しかし範囲が狭いため、遺跡の性格ははっきりしない。一帯からは、これまで縄文時代の遺物が多く採集されているほか、平安時代の灰釉陶器も採集されている。

波田町全体をみると、著名な葦原遺跡に代表される縄文時代の遺跡が数多く存在するが、弥生・古墳時代の遺跡はほとんどみられない。古墳も今までのところ確認されていない。平安時代になると遺跡の数は急増するので、この辺り一帯の開発は、平安時代に本格化した可能性が強い。

また、「延喜式」の左馬寮の御牧として、大野牧が記載されており、「吾妻鏡」にも大野牧がある。それ以前に、筑摩郡に初期荘園の大野庄が存在

していたことが仁和寺文書からわかる。これらの範囲を、波田町から山形村にかけて想定する考えもある。特に牧と若澤寺の結びつきを考える向きも多いが、裏付ける資料はない。

ウ　交通路

戦国末期、飛騨国領主三木秀綱が、豊臣方との戦いに破れ、信濃国へ逃れようと、中尾峠から大野川に出たが、奈川角の平で殺されてしまい、奥方も波田まで逃げようとしたときに、島々谷で殺されたという伝説がある。それよりやや前、まだ南飛騨しか押さえていなかった三木秀綱の父自綱は、飛騨国北部（現飛騨市神岡町付近）の有力豪族江間氏と戦い、その勝利によって飛騨一国を支配するようになる。滅ぼされた江間氏は、武田信玄と結びついて、越中国まで勢力を伸ばしていたことが知られる。当然、連絡に使う信濃と飛騨を結ぶ交通路が必要である。中世鎌倉時代において、北陸諸国と政治の中心地鎌倉を結ぶ鎌倉街道と呼ばれる道があったとされ、その有力ルートとして、神通川沿いに越中国から飛騨国に入り（越中街道）、高原川沿いの有峰街道が候補にあげられ、中尾峠あるいは安房峠を越えて、信濃国にはいる。それとは別に、飛騨国府所在地の高山から、益田川沿いに野麦峠を越える道も当然存在していたと考えられる。中尾峠や安房峠を通過して松本平にはいるときには、波田を通ることになる。このように、この地は信濃国と飛騨国とを結ぶ交通の要衝で、波田山城が造られた理由もわかる。

明治初年に作成された「筑摩郡図」では、野麦（飛騨）街道が、島々谷を抜けて梓川を雑炊橋で渡り、赤松を通過し、仁王門の南を東へ通過している。この街道は、当初、飛騨国高山から野麦峠を越えて、奈川村寄合渡を通り、境峠を越えて木曽の薮原にでたものであった。しかし寛政２年（1790）に飛騨国領平湯番所が廃されるとともに、黒川渡から入山を経て、梓川沿いに松本に至る道が開かれる。この街道は、幕府天領飛騨国代官所のあった高山と江戸とを結ぶ重要なルートであっ

道　標

た。明治時代には廃藩置県によって飛騨国が中南信とともに筑摩県となるが、その県庁（松本）と支庁（高山）を結ぶ幹線道路となる。また、生活用品が運ばれる道でもあり、松本平で年取魚とされるブリをはじめ、海産物や木製品が運ばれた。上波田から中波田は、この街道が島々宿から下り松本平へ入り、松本市街地方面、山形村を通り塩尻方面、梓川を渡って安曇郡方面へ向かう重要な分岐点であった。波田神社から上波田、中波田方面へ向かう道沿いは、若澤寺の門前とされ、寺家町、上町、中町、下町、横町という地名が残っている。いずれにしても、上波田から中波田にかけては、交通上の重要な場所であったことは間違いない。

3．調査の目的及び経過

（1）調査の目的

平成12年度に元寺場遺跡の調査報告書が刊行され、その成果から今までの通説に対していくつかの疑問が生まれた。そこで、若澤寺の全貌を明らかにするために、次の５つを目的に、平成13～16年度に調査を実施した。

① 若澤寺は、長禄年間には、現在の位置に伽藍があったのではないかと推定されていた。そこで、現在に残る若澤寺跡に、いつ頃寺院が築かれたかを発掘調査によって確認する。
② 「若澤寺絵図」によって江戸時代後期の伽藍配置を知ることができる。それと比較する意味を込めて、落ち葉等を除去して、礎石の位置を確認し、今後の活用のため、遺構の残存状況や範囲を測量して、図面に残す。
③ 若澤寺跡周辺には、「堂平」などの寺院に関連した地名が残されている。それらの存在を踏査によって確認する。
④ 若澤寺には、丁石をはじめ多くの関連した石造文化財が存在しており、現在では不明となっているものも多いので、それらの所在確認や新たな発見に努める。
⑤ 江戸時代後期の若澤寺の伽藍を描いた絵図がいくつか存在している。それらを分析し、発掘調査や確認された遺構と比較検討をする。

（2） 事前調査

① 平成14年度

全体測量をするための範囲、発掘調査場所を決めるために、全体の木の除去などの清掃作業を進める中で、絵図と照らしあわせながら、一帯の踏査を実施する。

現地での確認風景

最初に、絵図に描かれた伽藍と現在残っている平場を比較するが、ほぼ一致することが確認され、現在に残っている平場が江戸時代後期の可能性が高いことがわかる。しかし、中堂救世殿の存在する面は後世大きく改変されていることがわかる。ただ、絵図にない、護摩堂が建てられた面の一段下に造成されたと思われる平場を確認する。位置的にみて、若澤寺跡との関係が考えられた。絵図に描かれていないことは、それが描かれる以前、あるいはそれ以後の可能性があると考えられた。「寺が上がる」という伝承があり、この場所が江戸時代以前の寺跡が存在した可能性も考えられた。さらにその西側の護摩堂面との中間に小規模な平場を確認する。その南側部分に緩やかな斜面が続くが、人工的に造成した部分は見つからなかった。

また、除木をする中でそれぞれの平場の状況が明らかになった。ほとんどの平場で礎石などは残っていなかったが、護摩堂部分では大きな礎石がそのまま残っていることが確認された。

この事前調査の結果から、新たに確認された護摩堂の下の平らな面の試掘調査と、護摩堂面の礎石の確認調査を実施することにする。それに伴い若澤寺全体の現状を図化を進める。

② 平成16年度

前年度の発掘調査によって、江戸時代後半の遺物しか見つからず、近世中期以前の遺物は見つからなかった。そのため、現在の若澤寺跡とされる場所以外に「若澤寺」に関係した遺構がないか、「堂平」と呼ばれる地名があったとされる場所の特定に重点をおいて、範囲を広げて踏査を実施した。

結果的には、いくつかの平場が確認できたが、寺院と関係するような造成された場所などを発見することはなかった。そこでわかったことは、波田山城の規模の大きさであった。

「堂平」調査の風景

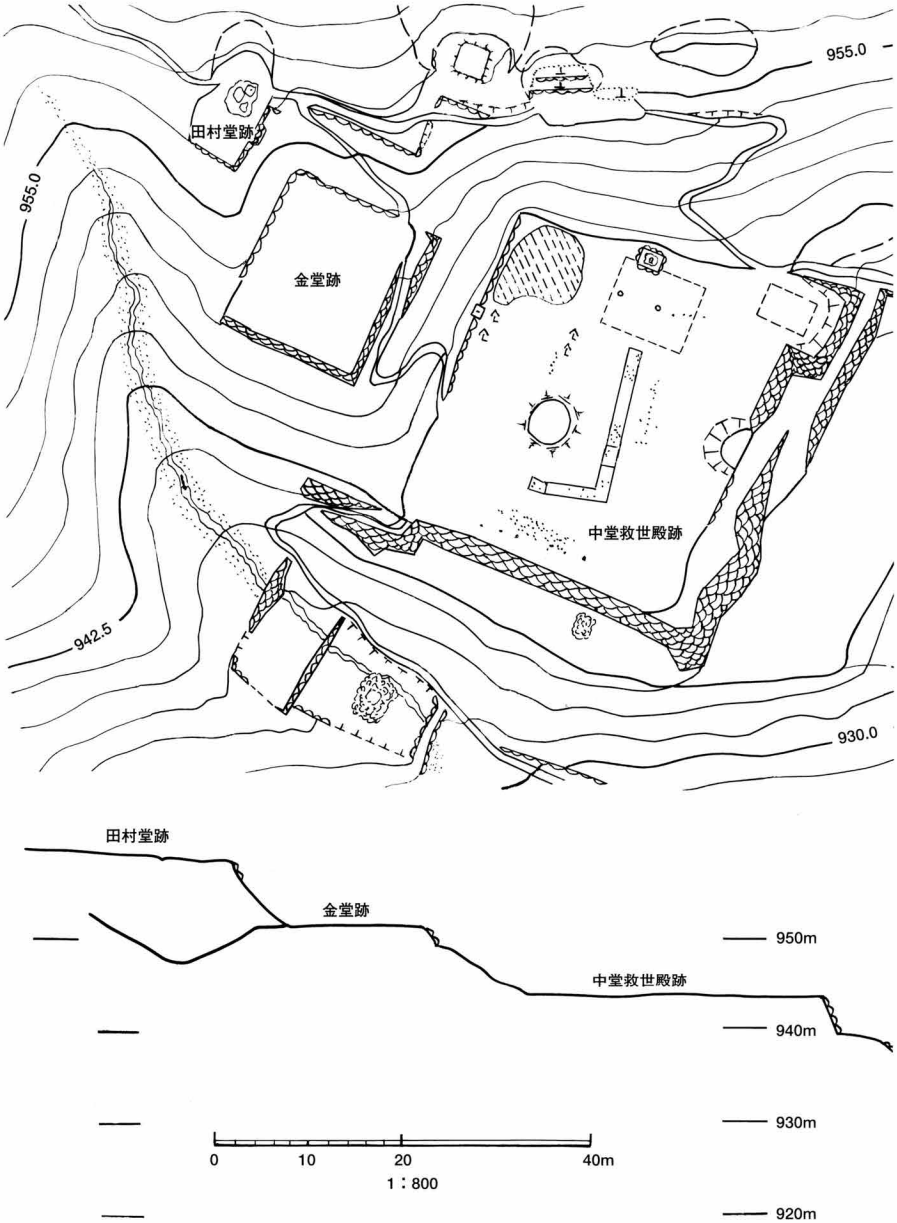
（3）発掘調査

① 平成15年度

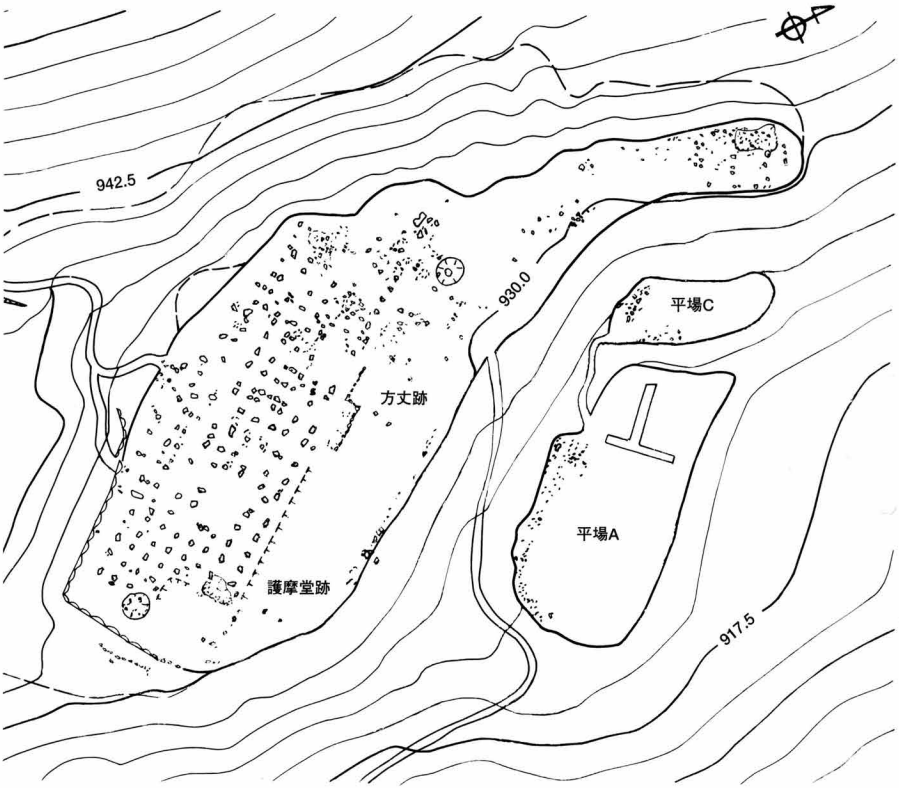
調査期間　平成15年７月28日（月）～８月29日（金）19日間
調査内容　　一番下の平場面のトレンチ調査及び護摩堂面の表面調査

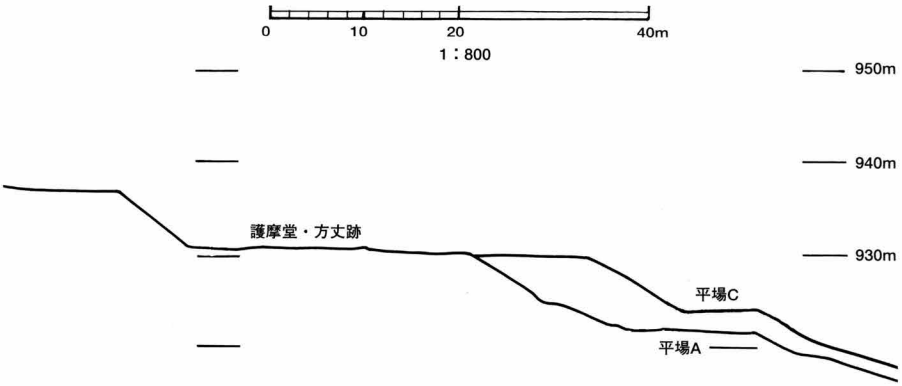
② 平成16年度

調査期間　平成16年８月２日（月）～８月６日（金）５日間
調査内容　中堂救世殿面の発掘


955.0
田村堂跡
955.0
金堂跡
中堂救世殿跡
942.5
930.0
田村堂跡
金堂跡
950m
中堂救世殿跡
940m
930m
0
10
20
40m
1：800
920m

第３図　若澤寺全体図


942.5
930.0
917.5
平場C
方丈跡
平場A
護摩堂跡

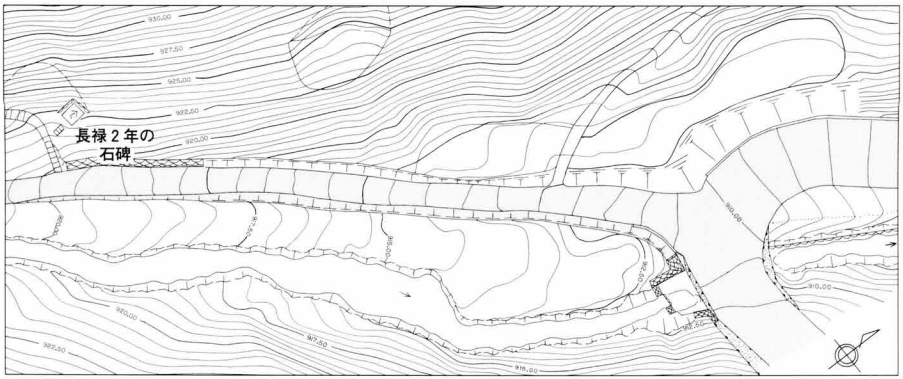

0
10
20
40m
1：800
950m
940m
930m
護摩堂・方丈跡
平場C
平場A

4．寺跡の現状

現状を、江戸時代に描かれた絵図に載る若澤寺の伽藍と比較しながらみていきたい。ただし、本報告の「若澤寺絵図比較」で考察されているように、絵図はいくつか存在しているが、ここでは「若澤寺一山之略絵図」を使用することにする。廃仏毀釈後に一部が耕地とされたようであるが、現在は、戦後になって植林されたカラマツが、直径30cm程度に生長してきており、見通しを悪くしている。標高は、一番低い入り口の部分で標高910m、一番高い田村堂がおかれた面が標高957mで比高差約50mと大きい。寺院は、山の斜面を大きく造成し平坦面をいくつか造成し、そこに建物が建てられている。

調査に入る前の段階の踏査では、石垣は確認されるが、礎石等の遺構は、地表では確認できなかった。残された石垣は、壮大で当時の寺院が栄えていた姿を彷彿させるが、植林された木の生長は、石垣を壊し始めている。

参道から入り口（絵図）



第４図　参道から入り口（1：700）　網部分は現在の林道

（1）参道から入り口

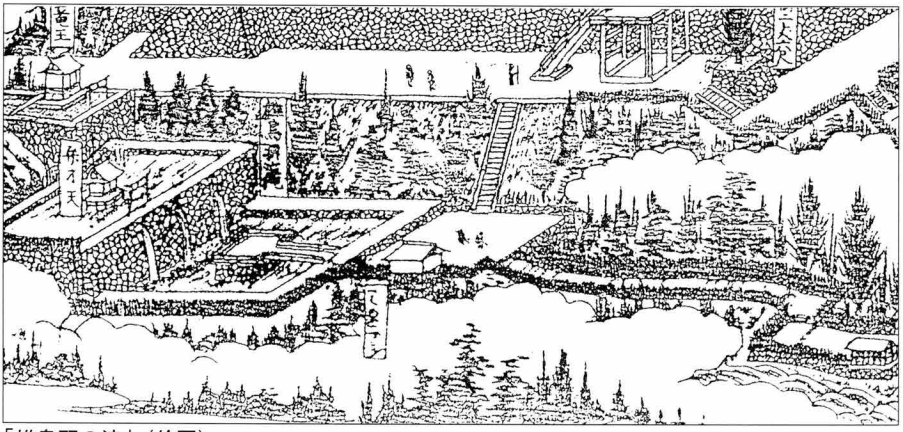
絵図には、最初の入り口として、土塁状の低い石垣に方形に囲まれたかなり広い空間が存在している。その南側部分の中央の石垣の築かれない部分を参道が通っている。最初に断っておくが、石畳は参道のいずれの部分にも認められない。その手前を、水沢が参道を横切っており、それを渡る橋が存在している。現状をみると、この部分については、石垣を含めて、その痕跡を確認できていない。水沢が絵図にあるような林道を横切っている場所を探すと、かなり下になる。林道の拡幅や水沢の氾濫で破壊されたり、その沢筋が変わってしまった可能性がある。

この場所を抜けると、六地蔵との間に山番所が置かれた空間が存在する。この絵図に描かれた手前の石垣は、林道と水沢の改修によって破壊されているが、その痕跡は残っている。この空間は、林道によって中央はかなり低くなってしまっているが、両側に平坦面を確認できる。なお、現在の林道のメインはここでヘアピンカーブを作り大きく曲がり東へ向かう。山番所をはじめとしたいくつかの建物が建てられていた痕跡は、確認できない。また、ここから、斜めに登る道が描かれているが、現在の道と一致すると考えられる。絵図ではこの空間を抜けると、3ないし4段の石段を登ると、道の両側に、3体ずつのお地蔵さんが置かれ、覆屋がかかった六地蔵が存在する。この部分は石垣に囲まれた狭い空間のように描かれているが、現状を見ると、囲んでいる石垣をはじめ、その痕跡は認められない。やはり参道が林道として拡幅される際や水沢の氾濫によって壊された可能性がある。なお、現在の林道はそのまま水沢に沿って登っていくが、絵図にはこの道がない。

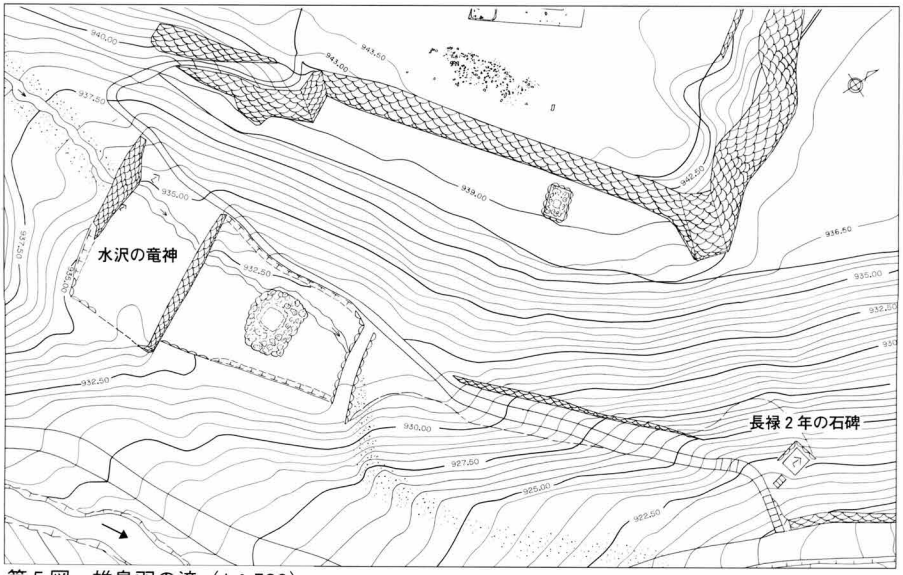
盛泉寺山門前の六地蔵

（2）雄鳥羽の滝

六地蔵をすぎると、参道は直角に山側に折れて、登り始め、そのまま雄鳥羽の滝に向かう。現在その幅は、１ｍほどであり、山側には石垣が残っている。絵図では比較的平坦に描かれているが、結構角度がきつい。参道が曲がる部分の右手に覆屋がかけられた長禄２年（1458）銘の参道供養碑が存在す



「雄鳥羽の滝」（絵図）



第５図　雄鳥羽の滝（1：580）

る。若澤寺に関連した石像文化財は数多いが、紀年名の入ったものでは最も古い。若澤寺が現在の場所に移ったとされる年代の根拠となっている重要な資料である。しかし、不思議なことに絵図には描かれていない。

絵図を見ると、そのまま登っていくと、大きく4つの部分が存在している。最初に小さな建物が存在する方形の空間が存在し、そこから「中堂救世殿」にある鐘楼に向かう、角度がかなりある石段が絵図では存在する。しかしこの平坦面は、現在は確認できておらず、地形から見てそれほど大きな改変がなされているとは思われないため、本来この平坦面が存在したのか疑問が生じる。また石段についても確認されていない。絵図ではこの石段を登らなければ、上の面には上れないように描かれているが、現在はそのまま於鳥羽の滝の脇を斜めに上がっていく道が存在し、その道を通って「中堂救世殿」のある面に登ることができる。絵図と、現状がどちらが正しいのか現在では判断ができない。

絵図を見ると、一連の滝の部分は、一番上に「善女竜王」を祀った祠があり、その下に弁財天、そこから於鳥羽の滝がおち、もう一つの面に落ちている。

「善女竜王」の祠とその鳥居は登ってくる道に向いて置かれ、鐘楼のある面と高さを同じくするようなかなり高い石垣が積まれるように描かれている。現状ではそれほど高い石垣はなく、絵図が誇張している可能性が高い。

それに対して、弁財天が置かれた場所とその下の部分は、絵図では方形に描かれている

長禄の碑

水沢の竜神

が、現状では少しいびつではあるが存在し、湿地となっている。下の場所は、参道の端に石垣が積まれている部分が残る。また、中央にはやや盛り上がった中央に平坦面を持った石積みが見られる。これは絵図にある、於鳥羽の滝を参拝するための「島」で、石垣は崩れてしまったと考えられる。絵図では3カ所の水が流れ出る於鳥羽の滝の石垣は、やや崩れており、滝として機能したかははっきりしない。弁財天が置かれた場所は石垣が残り池状に残っている。絵図には見られないが、現在が「水沢の竜神」（紀年銘なし）の石像が置かれている。

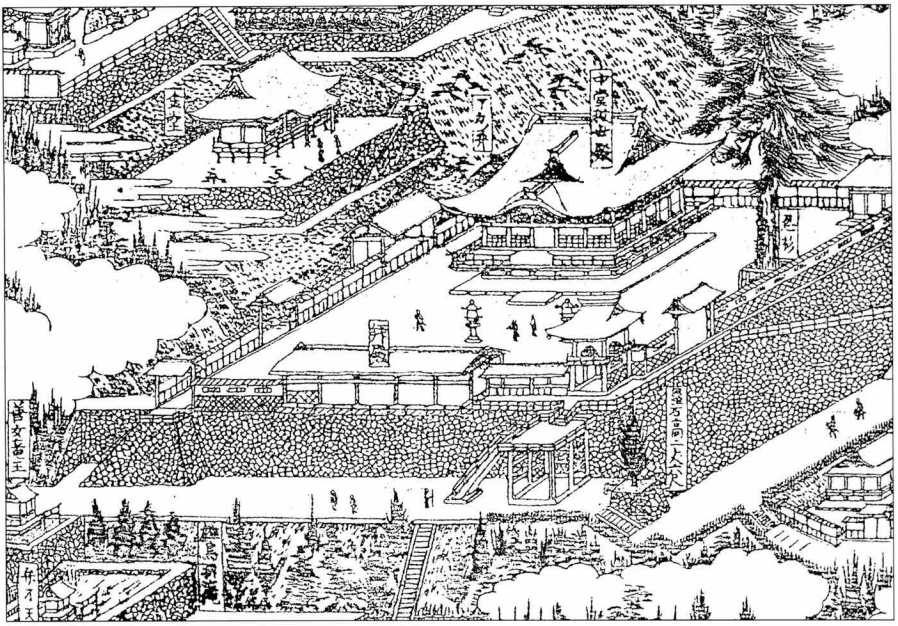
なお、ここで利用する水は、田村堂があった面の裏からでているが、人工的にここまで引いてきた痕跡はなく、自然の流れをそのまま利用したと考えられる。

現在の道は、この一連の水信仰に関連した場所の横を通り抜けると、右側に折れ次の面に向かう。

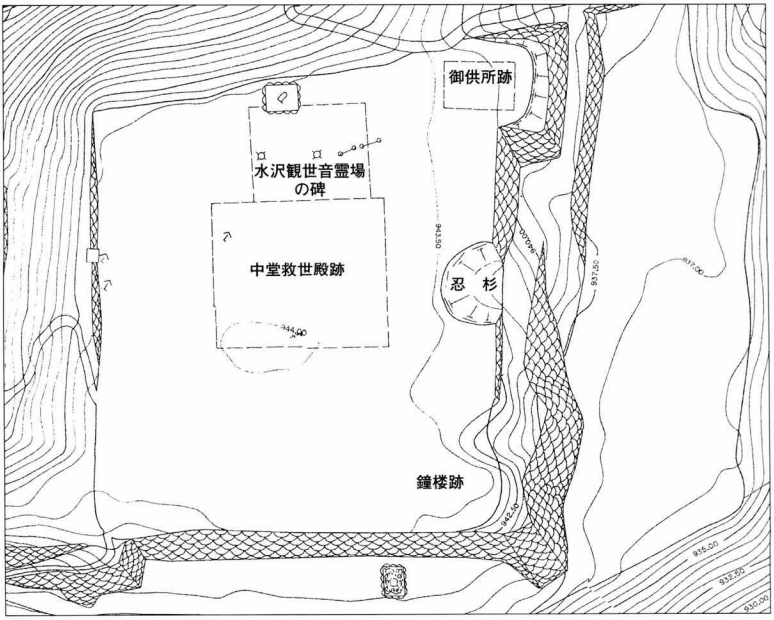
（3）中堂救世殿

中堂救世殿は、石垣が積まれ周囲の2方向に帯状の平場を持っている。絵図を見る限り帯状の平場には、鐘楼へ登る施設の足場以外に建物等の施設は認められない。現状でも、足場の痕跡以外に地表から見る限り遺構は認められない。

絵図からこの面への登り口をさがすと、南側の滝から上がってくる石段、北側の一度石垣の中程で折れ曲がるスロープ、もう一つが柱が組まれた鐘楼の横の場所の階段、の3カ所である。



中堂救世殿（絵図）



第６図　中堂救世殿跡（1：600）

南側部分は、石垣は曲げることによって、登り口を作っているが、現在は石垣がはらんできており少し危険である。北側部分は、石垣がやや崩れているが、中程で折れ曲がる道がおぼろげながら確認ができる。

中堂が置かれた面は南北30m、東西26mの長方形で南西隅を大きく削り、その土を盛り上げて石垣を築いているように見える。面の現状は、西側の斜面近くに、「水沢観世音霊場」の石碑が建てられており、その東側に切石で囲んだ空間がつくられている。その中に1対の、石灯籠（大正3年銘）があるほか、馬頭観音が2体（1体には大正5年銘）と、地蔵尊が2体ある。地蔵尊は、台座に享保18年（1733）の銘が入っているが、破損しており、その組み合わせが正しいか、疑問がある。

「水沢観世音霊場」の碑や石灯籠に見られるように、この場所は大正時代に水沢観世音として再興し祭祀を行っており、残されているのはそれらの遺構である。中央に土の盛り上がりが見られるが、その際の奉納相撲の土俵といわれている。

絵図を見ると、中堂救世殿はやや盛り上げられた方形の基壇の上に造られている。しかし、大正年間の再興のために、基壇の痕跡は地表から観察できないほど平坦にされている。当然礎石などは地表に残存していない。また周囲に巡っている塀などの礎石も認められない。ただ、絵図で「御供所」が描かれている場所は、礎石らしき石が散乱している。この時点で、中堂に関連した遺構の残存状況は非常に低いと判断して、平成16年度に発掘調査を実施した。

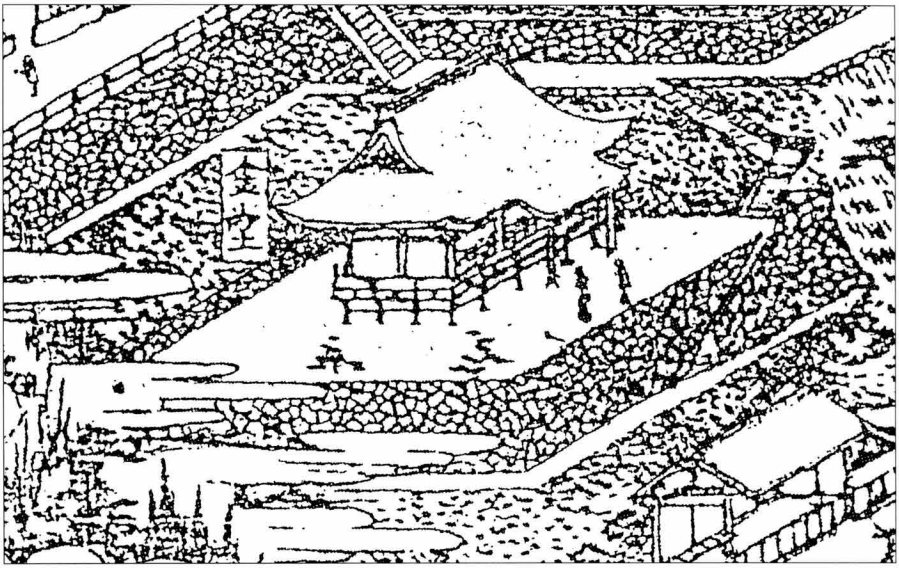
なお、北側の忍杉があったと推定される部分は大きく掘りくぼまれている。また、南西隅は地下水が浸みだしており、湿地となっている。「アカノ井」と呼ばれる井戸が絵図には記されているが、その遺構は確認できない。

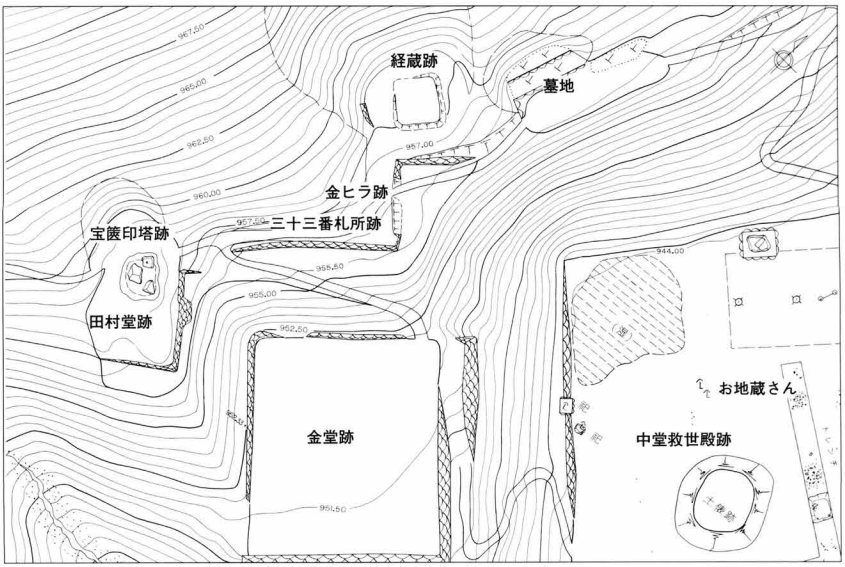
（4）金　堂

絵図では、中堂救世殿から金堂に上がる道は、門を出て斜めに金堂のある面の石垣の犬走り部分に向かい、一度その犬走り部分を戻り、また斜めに登っていくように描かれている。しかし、現状では中堂面から、やや斜めに直線的に登る。

金堂が置かれた面はやはり南西隅を削りだして、その土を前面に盛り上げ周囲に石垣を築いている。平面形は長方形で、東西14m、南北17mほどである。

絵図を見ると、金堂は正面３間×２間の建物が描かれているが、その建物があった礎石痕跡を地表に見ることはできないほど平坦である。なお、この面だけは周囲に塀や柵はない。





第７図　金堂、田村堂、三十三番札所、経蔵跡（1：580）

（5）田村堂

絵図では金堂の北西隅から、斜めに上がり三十三観音の前にでて、そこから石段で登るように描かれている。しかし、現状ではその石段は確認できず、三十三観音と田村堂面との間に直接登っていく。

この面は、絵図では金堂と同規模に方形な面が描かれている。しかし、背後をわずかに削りだし平坦面を作り出し、前面だけに石垣が築かれるだけで、南北10m、東西６ｍと狭い。

絵図を見ると、西から大きな石の上の台座に載せられた宝篋印塔、造塔供養碑田村堂、熊野三社の３つが並び、周囲を塀や柵が囲んでいる。しかし、遺構として地表で観察できるのは、宝篋印塔の台石と造塔供養碑（文化５年銘）だけである。

この面から、元寺場、白山へ向かう道が延びており、白山への参拝に際して、若澤寺を通る必要があったことを示している。

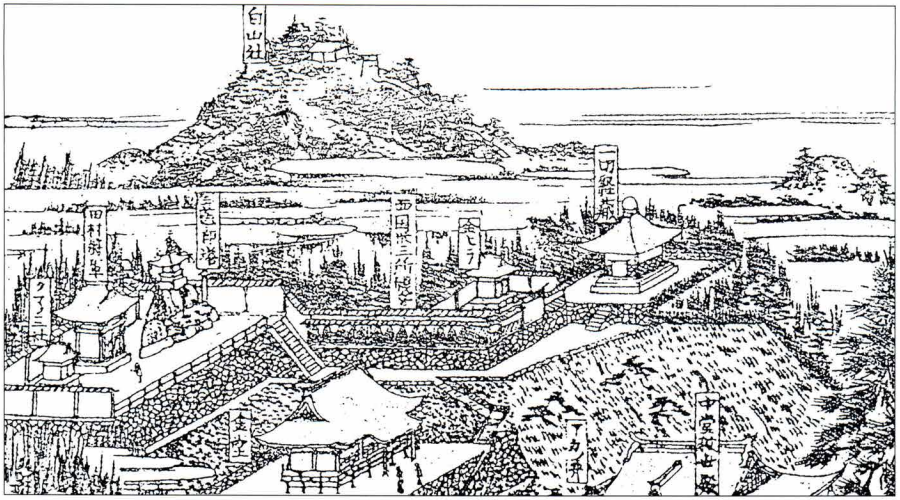
造塔供養碑（栄豊謹写）

（6）三十三番札所・金比羅・一切経蔵

金堂面から斜めに上がった道は、「西国三十三所観音」の石像の観音像が並ぶ中間部分に、絵図ではぶつかっている。しかし、現状では観音像が並んでいたと考えられる、一番北側の端にぶつかっており、「西国三十三所観音」を参拝する場合は、南から北へ移動して参拝するかたちになっている。観音像が置かれた部分の石垣は高さ１m20cmほどで全長12mである。そこには宝篋印塔がある一つ上の面から塀が描かれ背後に続いており、その前の部分に上屋がかけられた観音像群が描かれている。また石垣がＬ字状に曲がっている部分には、「金ヒラ」＝金比羅様が描かれている。その周りには塀が続いて囲っている。現在その部分は道が通ってしまっており、一部の石垣が崩れ、平坦にはなっているが、痕跡は認められない。なお、観音像は盛泉寺に移されて残っている。さらに石垣は再び西に折れるが、その部分に絵図では一切経蔵が描かれている。現状では、そこにはわずかな

宝篋印塔（山形村穴観音へ移築）

田村堂



宝篋印塔、田村堂、三十三番札所、経蔵（絵図）

盛り上がりをもった３ｍ×２ｍの基壇が残っており、礎石も残存している。しかし絵図に描かれているような、登るための石段は崩れてしまったか無い。

絵図では以上の施設しか描かれていないが、現状ではその道の延長上に僧侶の墓地がある。無縫塔、五輪塔などが見られるが、寄せ集められた組み合わせも見られる。辺り一帯にあったものを集めたという話もあるが、江戸時代に存在したかどうかははっきりしない。

現在この墓地から南の金堂面に下る道が存在する。石垣等の施設はない。絵図でも道らしきものが描かれている。

盛泉寺に移された三十三観音

墓地

（7）護摩堂面

調査に入る前に踏査を実施するが、植林した木が生長してしまっており、地表がどのような状態になっているか確認できなかった。面としては、一番大きな面積をもつが、石垣は築かれていない。また、他の面が方形を基本としているが、不整形である。面積が最も広いにも関わらず絵図では狭く描かれている。今回の調査に入る前までは、あまり注目されていなかった。また、廃寺後に利用されたという言い伝えもなく、建物が撤去された後に大きく改変された可能性は少ない。

なお建物は、絵図には「若澤寺一山之略絵図」では護摩堂が描かれ、方丈の大部分が雲に隠れているが、「善光寺道名所図会」では方丈をはじめ多くの建物が描かれている。

詳しくは、発掘調査の項でふれることにしたい。

5．発掘調査

（1）平成15年度

護摩堂の存在した一つ下及び中断の平坦面にトレンチを入れた試掘調査と、護摩堂面の表土を除去して、礎石等の確認を実施した。

① 調査目的

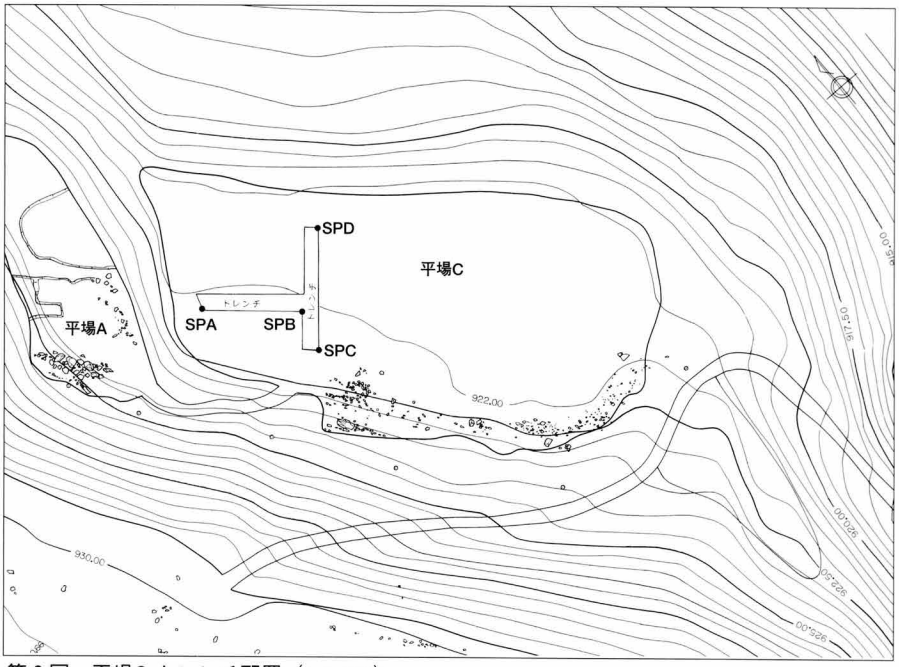
測量を実施するため、全体の木の除去などを行う中で、絵図と照らしあわせながら、一体の踏査を実施する。そこで、護摩堂が建てられた面の一段下に人為的に造成されたと思われる平場を確認する（以下平場Cと呼ぶ）。その規模は、30m×12mの不整形の長方形で、面積が約400m²と規模は大きい。位置的に考えて、若澤寺跡との関係が考えられた。特に絵図にないことは、それが描かれる以前、あるいはそれ以後の可能性がある。「寺が上がる」という伝承があり、この場所に江戸時代以前の寺跡が存在した可能性も考えられた。さらにその西側の護摩堂面との中間の高さに明らかに人為的に造成されたと考えられる小規模な平場が存在することが確認された（以下平場Aと呼ぶ）。さらに、南側部分に緩やかな斜面が続くが、人工的に造成した部分は見つからなかった。

② 調査内容

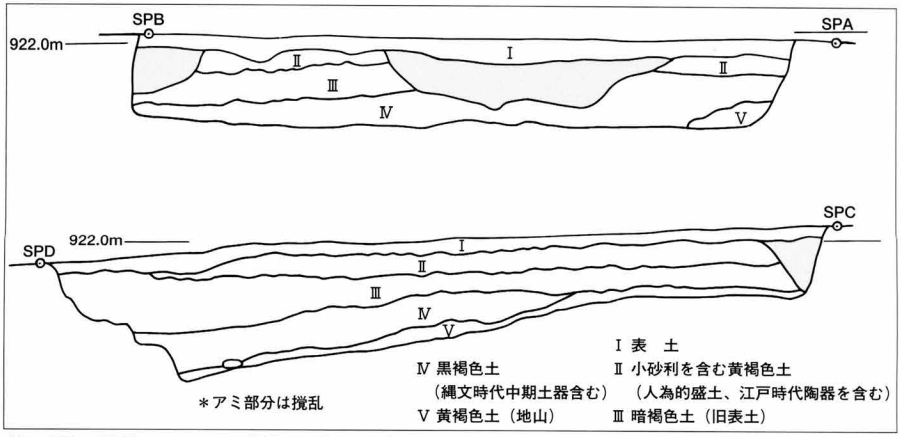
ア 平場C

新たに確認された平坦面の造成時期、利用状況、施設等の痕跡を明らかにするために、最初に第8図のように東西、南北に幅2mのトレンチを入れた。

平場Cトレンチ



第8図　平場C トレンチ配置（1：460）

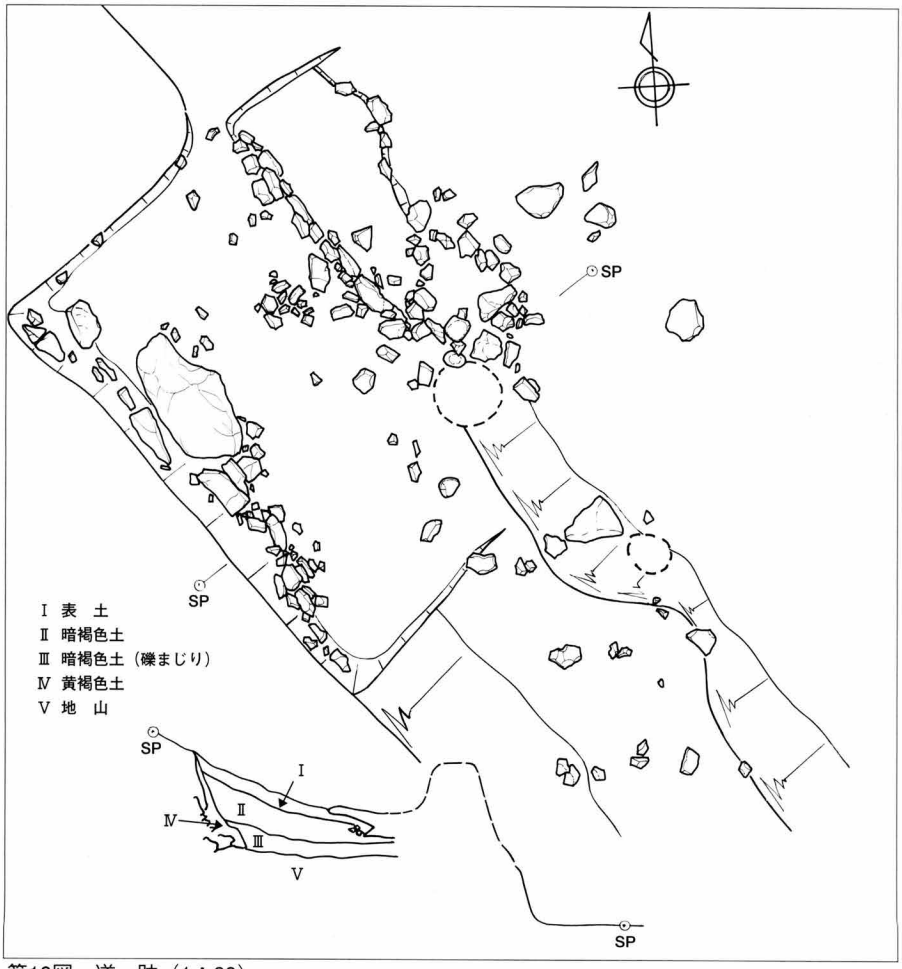


第9図　平場C トレンチ土層図（1：70）

そのトレンチの堆積状況（第9図）を見ると、土層中に平坦面は確認できず、本来の地表面は、やや傾斜しており、南側の地表に続いていそうである。その上に盛土をして平坦にしているが、その中から近世後半期の陶

磁器が出土しており、平坦にされたのが廃寺以降と考えられる。平坦にされた目的は、今回の調査でははっきりしなかったが、畑地にするための可能性が高い。盛土の下に旧地表・表土が存在し、その下部に黒褐色土層が存在する。そこからは、縄文時代前期末の土器が出土しているが、遺構は確認できない。なお、ところどころに不整形の掘り込みがみられるが、耕地化の際の痕跡と考えられる。

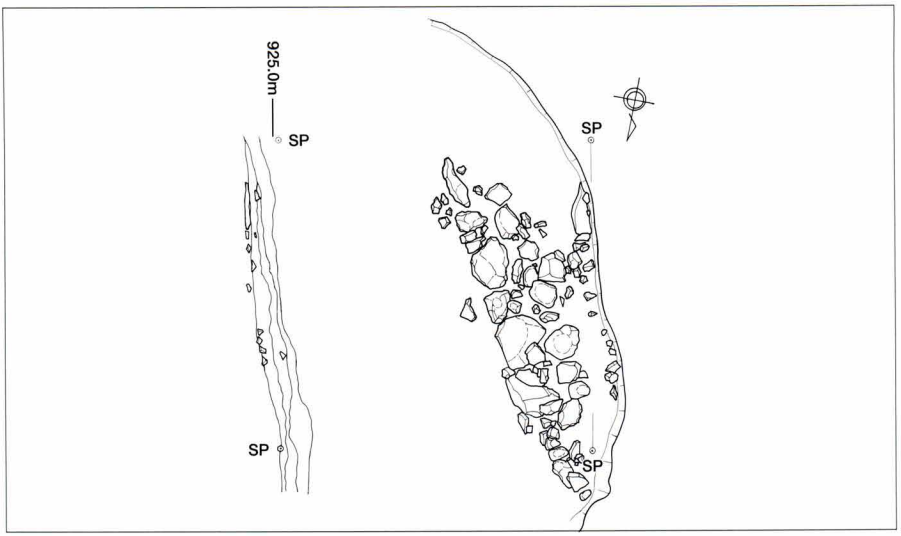
また、南北方向のトレンチを、さらに護摩堂からの斜面方向にのばすと、掘り始めてすぐに人頭大の石が、表土に混じって、まとまって出土する。その中に近世の陶磁器も大量に混じっている。一部を拡張して石と表土を除去し精査すると、幅1.5mの道状の平坦面が現れた。さらに斜面側を精査すると、地山の大きな石を利用しながら、人頭大の石を積み上げて石垣状にしている。その高さは、現状で70cm程度である。また平坦面側にも、20cmと低いが石が積まれる。いずれも道を保護するために築かれたと考えられる。道路の石垣は、六地蔵のある面から於鳥羽の滝に登っていく部分にも残っているが、それよりも稚拙な積み上げ方である。その後、この道状の遺構の範囲を確認するため、平場Cの護摩堂よりの斜面際の表土を除去した。その結果、斜面の裾部に沿いながら、ややカーブをして、人頭



第10図　道　跡（1：60）

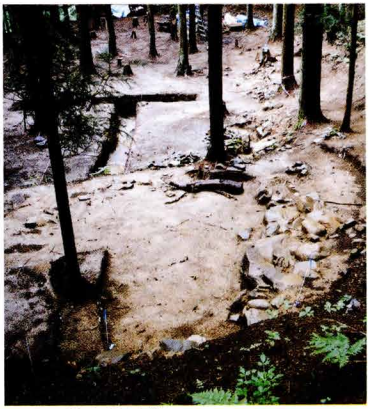
大の石が帯状に東側に続いていることがわかった。時間的な制約があったため、それを除去して下部まで確認することはできなかったが、本来そこに道があり、その簡易的な石垣が崩壊した痕跡と考えられる。最終的には、山番所のあった場所から斜めに登ってくる道とつながる。なお、トレンチの西側については、現状で登る狭い通路になっているため、確認はできない。埋土の中から近世後半期の陶磁器が多数出土しており、廃寺とともに廃道になった可能性が高い。

平場A



第11図　平場A石敷道跡（1：60）

この平坦面西側の、踏査で発見された護摩堂との中間の面に、やはりトレンチを入れた。表土は薄く、すぐに地山に達する。地形的にみても、人工的に削り出された面である可能性が高い。



平場A道路状遺構

平場Cで発見された、道跡の西への延長を探るために、南側の壁際の表土を集中して除去した。大量の崩落土によって埋没していたが、幅1.5mの石敷きを検出できた。石敷きは平坦な面を上に向け、斜面と反対側の石の面を揃えて直線状にしている。ここまで道路が続いていたことが確認できる。道路の西端は壁にぶつかるが、斜面を斜めに登るように石組みが発見されるが、それ以上の検出は厚い崩落土に阻まれて、できなかった。

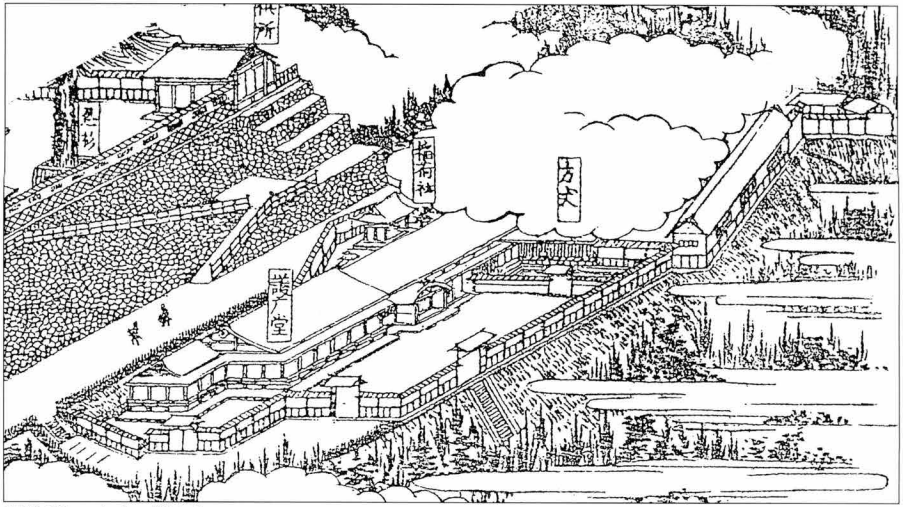
さらに全体に表土を除去した。下の段に向かうこの面の端に、礎石と思われる石をいくつか発見される。塀のような何らかの施設があった可能性が高い。

平場AとCで発見された道跡を絵図と比較してみたい。まず先に述べたように山番所から斜めに上がり、雲の中に入っていく道が絵図には描かれている。今回に見つかった道跡が、この道の延長と考えられる。さらに、絵図を見ると、雲の中から護摩堂面へ斜めに登る道も描かれている。ここまで道が続いていたと思われる。

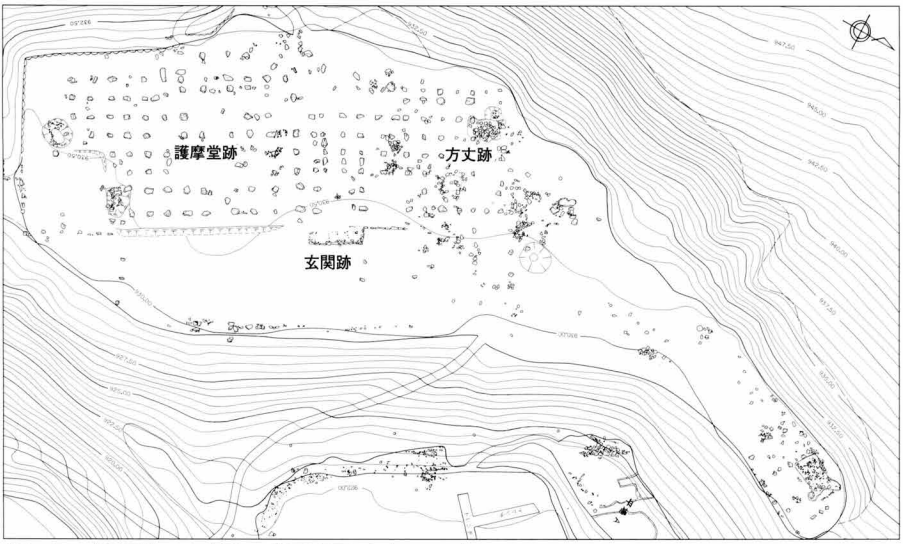
発見された道跡の性格は、絵図にしっかりと描かれていないこと、方丈の裏へ向かっていることから、参拝者が使う道ではなく、日常生活に使う道と考えられる。

ウ　護摩堂面

若澤寺跡の中で、一番面積の広い面である。金堂や観音堂がおかれた面と比較して、いくつかの違いが見られる。まず一つは、他が方形を意識しているのに対して、地形に制約されたせいか、東西に細長い不整形をしていることである。次に、他が斜面に石垣を築いているのに対して、何も施していないことがあげられる。このような形状や構築上の違いの他、遺構の残存状況も大きくちがう。他の２面が、礎石等の表面の構築物が残っていないのに対して、この面は表面の落ち葉を除去すると、礎石が確認できた。このことは、この面が他の２面とちがって、廃寺以降に利用されなか



護摩堂・方丈（絵図）



第12図　護摩堂・方丈跡の礎石配置図（1：750）

ったことによると思われる。地元の方々に聞いても、どのように利用されてきたかはっきりわからなかった。

調査前は、木が生い茂り、一面鬱蒼としており、地表を確認することはできなかった。地元の方々からも、この面がどのような状況であったかは記憶にないとのことであった。細い木を伐採して、下草を除去すると、ところどころから大きな礎石が現れはじめ、全体に礎石が残っていることが予想された。

当初の予定では、トレンチを設定して下部の調査も考えたが、礎石の残存状況が良好なことから、落ち葉等を除去しながら礎石の位置を確認することにした（第13-1図）。絵図には、護摩堂、方丈、稲荷社が、記録ではそのほか納屋等の建物が存在しているとされる。

建物跡は、いくつか見られる。一番規模の大きな建物は、礎石の配置から連続しているようにみえるが、大きく3棟に分けることが可能である。基本的には、護摩堂と方丈を廊下でつないでいる形となる（第13-2図）。絵図と比較すると、「若澤寺一山之略絵図」では方丈部分に雲がかかっているためはっきりしないが、「善光寺道名所図会」では、護摩堂と方丈を玄関がある棟によって連結させており、それと一致している。

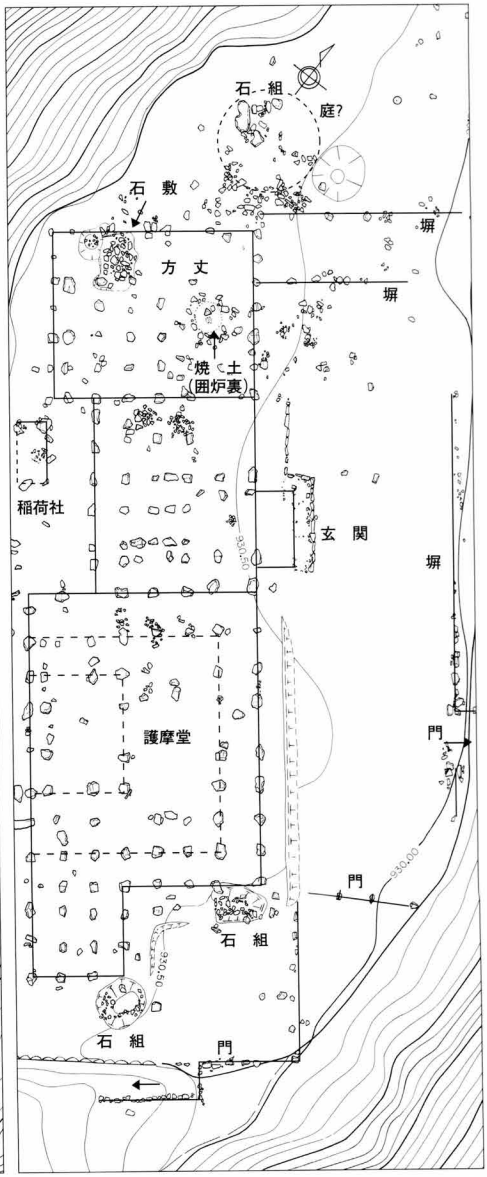
護摩堂は、縁石が用いられないが基壇といえそうな20cm程度の土盛りが北側部分にのみはっきりしている。礎石は形状は揃っていないが、自然

石を用いており、方丈などと比較して意図的に大きなものが用いられている。平面形は、正面８間、梁間７間の長方形の建物に、小規模な建物が東側につけられる。間取りを想定してみると、正面と両側の３面に入側が廻らせていたと考えられ、その幅は正面が2.4m、西側は同じように2.4m、東側がやや狭く1.8mほどである。入側が吹放か、障子等が入れられていたかははっきりしない。内部は、大きく前後に同じ面積、ほぼ60m²（18坪36畳）に仕切られていた可能性もあり、さらに後の部分は３つに分けられる可能性が高く、中央の奥には何らかの施設があった可能性が強い。東に付設された小規模な建物は、３間×３間で、面積は26m²（８坪 16畳）ほどである。なお付属の施設として、方形の石組が付された掘り込みが護摩堂の北東隅と付属建物の同じく北東隅にまるで建物に重なるように２カ所に見られる。その規模は、一辺2.4mほどで、深さは落ち葉等が入っており測ることはできない。なお、石垣は一部が崩落し始めている。この掘り込みの用途であるが、雪隠、井戸などが考えられるが決定的なものはなく、絵図にも描かれていない。

方丈と護摩堂を結ぶ建物は、正面６間、梁行５間と比較的大きく、前に

玄関前の礎石

第13-1図　護摩堂跡・方丈礎石実測図（1：430）



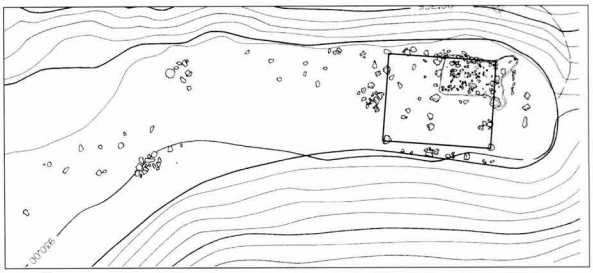
第13-2図　護摩堂跡・方丈建物配置想定図（1：430）

幅2.4m、後に幅２m程度の両方の建物を渡る廊下が通っており、その間に２部屋がとれる可能性がある。玄関は、切石を用いて基壇を前に張り出させている礎石からすると、玄関の幅は3.6mと考えられる。玄関は、絵図をみるかぎり、唐破風造りの屋根をかけ、式台がみられる。この玄関は、現在松本市今井正覚院に存在する。

方丈は、礎石を見る限り、南面を玄関に揃えているように思われる。「善光寺道名所図会」では玄関と直行する形で大きく北へ張り出す形で描かれているが、それとは異なっている。南北７間、東西６間の、約11.6m×約9.4mの平面長方形の建物で、面積は32m²ほどになる。内部の南部分に、石で囲まれた中に焼土面がみられることから、囲炉裏あるいは竈が設置された空間が存在していた可能性が強い。また、建物の南西部分に、東西2.4m、南北1.8m

方　丈（善光寺道名所図会より）

の平らな石が、長方形に敷かれた空間が存在する。その横には浅い掘り込みがみられる。用途は不明である。



第14図　護摩堂・方丈面北端の建物跡（1：460）

この方丈と考えられる建物の南東隅から少し離れた部分、礎石が認められる。絵図をみると、その位置には稲荷社が置かれており、その礎石と思われる。

また、この面の周囲をめぐる塀の痕跡の礎石も見つかっている。南の斜面との境に、ほぼそれに沿う形で小さな石が一列に並んでおり、護摩堂の正面あたりで大きな礎石が2.8mほど間隔ををあけておかれている。絵図と比較すると、下の段に降りる門の部分の可能性が高い。ただし、絵図に描かれる石段は確認できない。さらにそれらの礎石は、護摩堂に向かって直角に南に向かって折れ、またその基壇に接する部分でまた直角に東に向かっておれ、再びL字状に曲がって、中堂救世殿を取り巻く平坦面に登っていく。それはまさに「若澤寺一山之略絵図」に描かれている塀の位置と一致している。門と考えられる2カ所の位置には、1.8mの間隔でおかれている。しかし、方丈から西側では斜面と画するための塀の礎石を見つけることができなかった。ただ、方丈から2列の礎石が南に向かっているが、絵図にある塀の礎石である可能性が高い。その西側には、絵図をみると長屋風の建物が斜面と画するように建っているが、礎石等の確認はできない。

絵図をみると、西に細長く延びた先に塀といくつかの建物が描かれている。調査でもこの場所から、内部に土間状の石敷きを持った建物跡が発見されている。礎石をすべて確認することはできなかったが、ほぼ6.4m四方の正方形の建物になると考えられる。機能的には納屋の可能性が高い。

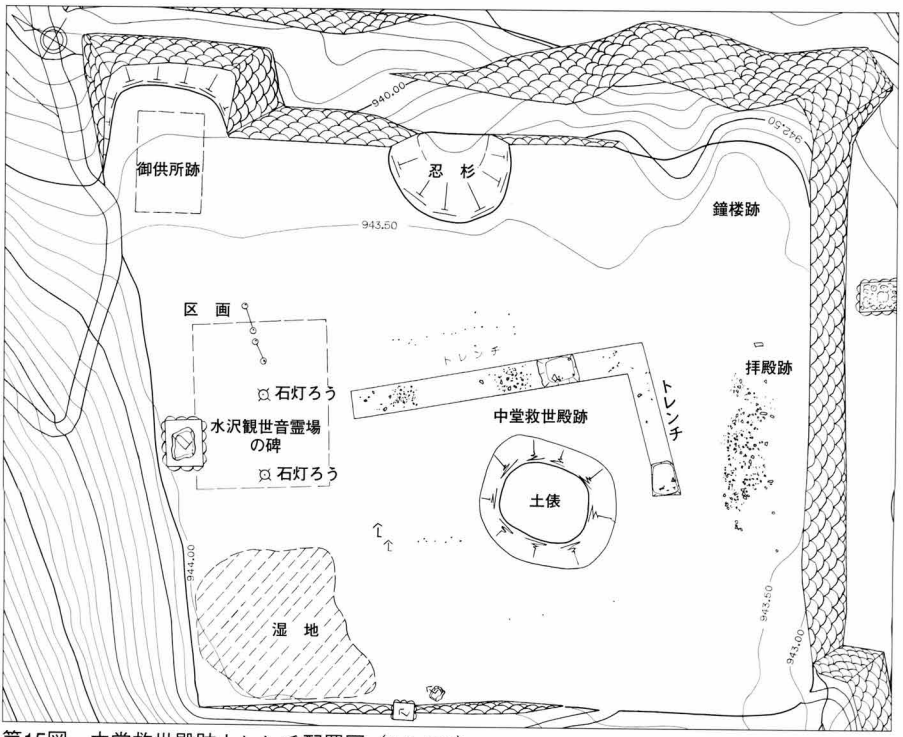
なお、この西端の建物と、方丈の間に石を使用した施設がみられるが、庭園とも考えたが、機能ははっきりしない。また、この面の南東隅は低い石垣が積まれている。

（2）平成16年度

ア　中堂救世殿

先に述べたように、この面は大正年間の観音信仰の高まりにより、施設が整備される際に平坦にされたり、奉納相撲の土俵が造られたりしたため、破壊が著しいと考えられた。表面を観察しても、絵図にみられるような基壇状の盛り上がりを確認することはできなかった。そこで、下部の遺構を確認するには好都合と考え、試掘を行うことにした。

試掘トレンチを、西側壁際の「水沢観世音霊場」碑がある切石で囲まれた空間を避け、幅1.5mで、東西方向16m、南北方向８mにＬ字状に設定した。調査を開始してすぐに、表土（10cm）を除去すると、集石が発見された。そのため、全体の掘り下げをやめ、２m部分について深く掘り下げることにする。

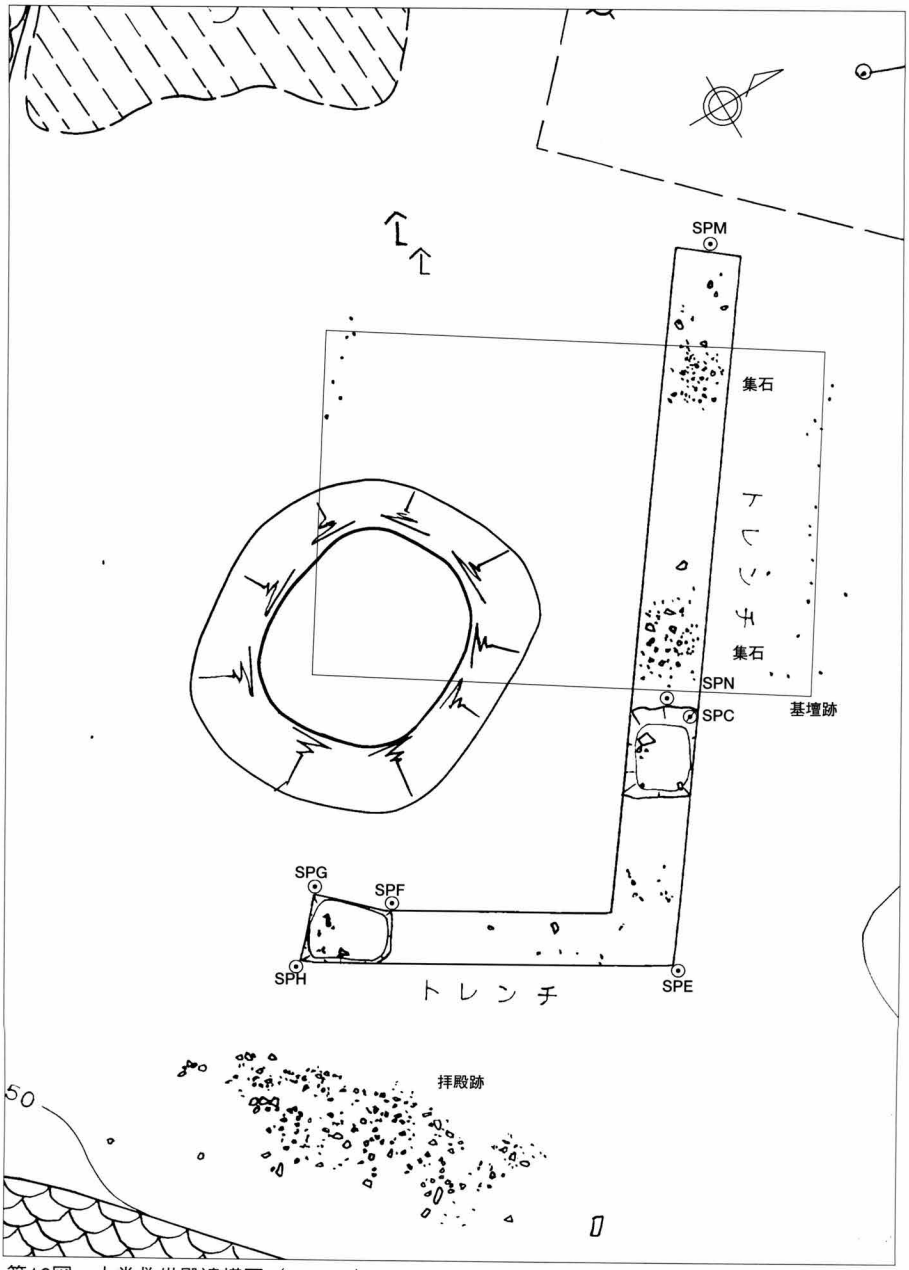


第15図　中堂救世殿跡トレンチ配置図（1：420）

集石が、東西トレンチに直行するように、間隔を4.5mほどあけて、帯状に2カ所で発見された。なお、集石群の端から端までは8mを測る。集石の幅は2mで、拳大の大きさの礫が集められる。建物の基壇の可能性があり、検土杖で周辺を探ると、集石群の存在が確認でき、現状では東西8m、南北12mの長方形の規模が想定される。なお、トレンチ内で礎石と考えられる石も発見されている。絵図に描かれた中堂救世殿の基壇をみると、やや高く盛り上げられている。また、この基壇と考えられる集石の軸方向は、後述する拝殿や石垣の軸方向とは一致していない。このことは、この基壇が絵図に描かれたものより遡る可能性も十分に考えられる。

基壇状の集石

深く掘り下げたトレンチ部分をみると、東西トレンチの中央部分では、表土（Ⅰ層）の下に、地山の褐色土がブロック状に混じる黒褐色土が水平に堆積する（Ⅱ層）。人為的に盛られた可能性が強い。さらにその下部に地表となっていたと考えられる黒褐色土の腐食土層（Ⅲ層）が水平に堆積する。その下部にはⅡ層に暗褐色土に褐色土の大きなブロックと大きな礫を含む層が堆積するが、人為的な可能性が強い（Ⅳ層）。結局この部分では、地山に達することができなかった。次に、南北トレンチの南端の深く掘り下げた部分をみてみたい。西面をみると、表土（Ⅰ層）直下の南端部分で、地山の人頭大の大きな礫を大量に含む褐色土層（Ⅴ層）が現れるが、それは北側へ大



第16図　中堂救世殿遺構図（1：170）

きな傾斜をもっている。その上層にⅣ層が斜めに入り、さらにⅢ層も帯状に入り、その上にⅡ層が入る。南面は、やはり表土（Ⅰ層）直下で地山（Ⅴ層）が現れるが、東側で斜めに傾斜しており、その上にⅡ層がのる。

以上のことから、中堂救世殿が建てられた面について、次のようなことがわかる。

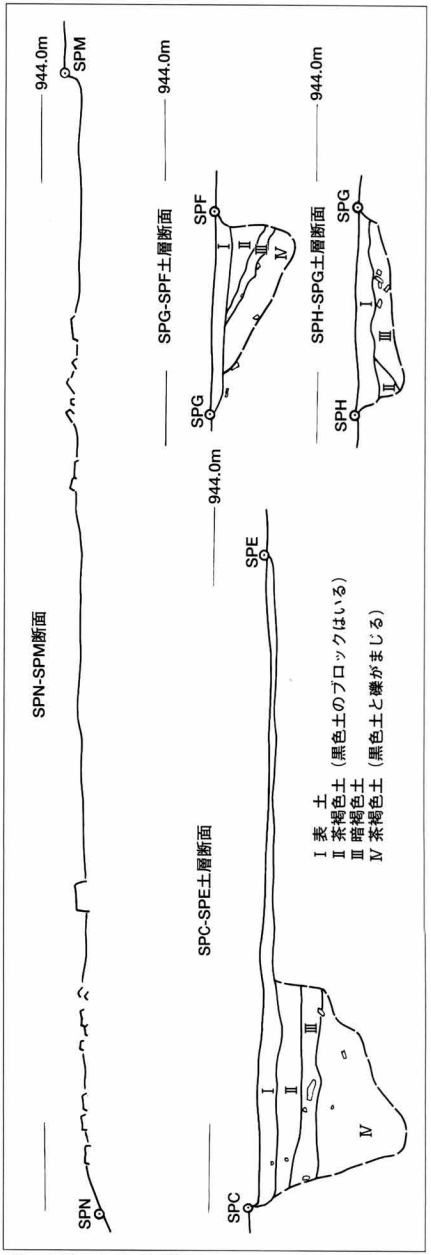
① 現在は平坦であるが、本来の地形は東側は尾根状に延び、建物が建てられた部分は谷状となっていた可能性が高い。こう考えれば、この面の西南隅が湿地帯になっている理由がよくわかる。

② 最初の造成は尾根を完全に崩しきれずやや盛り上がったまま平坦面（Ⅲ層）を造る。【第１次】

③ 次に尾根を完全に切り崩して、全体に盛土（Ⅱ層）をして現在に近い平坦面を作り出す。そこに、トレンチ内で発見された礎石をもつ建物が造られる。この段階の建物が現在の地形と軸方向が揃わないことは、この面の平面形が絵図とちがっていた可能性がある。【第２次】

④ その後、建物を除去し、若干の盛土をして基壇を作り、絵図にみられるような中堂救世殿が築かれる。【第３次】

⑤ 廃仏毀釈により建物が移され、さ



第17図　中堂救世殿トレンチ土層図（1：60）

らに大正年間の水沢観世音信仰の再興による造成で、現在の地形となる。

トレンチ調査によって絵図に描かれる建物の礎石が確認できないことがわかったため、絵図にみられる拝殿の部分に礎石が存在するかどうかを確認するため、落ち葉等を除去して確認をした。ただし石垣近くは崩落や落下の危険があるため、調査を始めると、拳大の礫を集めた石敷きと、約1.8m間隔で配置された礎石が確認された。

6．まとめ

（1）平成15・16年度の調査結果から

①　若澤寺跡の範囲

寺跡の範囲や保存状態を把握するために、伐木や落ち葉の除去を行って、地形測量を実施した（第3図）。その結果、今まではっきりしなかった、造成面の規模や形状等の確認ができ、今後の保存・活用のための大きな材料を得ることができた。

造成面の構成は、「若澤寺一山之略絵図」に描かれた伽藍図とほぼ一致している。また調査によって発見された護摩堂跡の礎石も、伽藍図と大きくは違わないことが確認できた。「若澤寺一山之略絵図」がある程度正確に描かれていることを証明したともいえ、絵図から浮かび上がる若澤寺のイメージは、往時とそれほどかけ離れていないと言えそうである。

しかし、絵図と現状が異なっている点は、次の通りである。

ア　護摩堂北の一段下に、新たに確認した絵図にない平坦面（平場A・C）を踏査によって発見した。寺院に関連するかどうかの確認のため発掘調査を実施した。その結果は、絵図では雲に隠れて描かれていない番所部分から護摩堂に向かう道路跡を発見した。しかし、その平場Cは廃寺以降に、耕地等にするためか、造成されたことが確認できた。その西にある一段高い平場Aは、礎石がいくつか確認されており、何らかの寺院に関係した面である可能性が高い。

イ　絵図では、水沢を渡って最初の土塁状の石垣で囲まれた方形区画を通るが、現在は痕跡も残っていない。水沢の氾濫、林道の建設等で破壊さ

れてしまった可能性がある。

ウ　経蔵跡の北に墓地が存在するが、絵図にはみられない。本来この場所にあったのか、あるいは後になって墓石が集められたものかは確認できない。しかし墓石の五輪塔や無縁塔などをみると、当初の組み合わせでないものも多いことから、後者の可能性が強いと考えられる。

②　若澤寺跡の時期

遺物は護摩堂面の南斜面一帯から、18世紀後半から19世紀前半の大量の陶磁器が採集・発見された。その時期は、住職栄豊によって積極的に寺院整備が行われ、絵図にある壮大な伽藍が造られたとされる時期である。

しかし、中堂救世殿が建てられた面の発掘調査から、この伽藍が一時期に造られたものではないことがわかった。少なくとも、尾根を切り崩す作業を伴う、大規模な造成工事が２回、多ければ３回も行われた可能性が確認できた。しかし、その時期をつかむに至っていない。

当初予想した中世の遺物は、現在のところ発見できていない。

③　建物について

礎石は、地表の清掃調査によって、護摩堂・方丈・経蔵で確認できたが、他の面では発見できなかった。しかし、中堂救世殿の拝殿跡のように、今後精査をすれば発見される可能性はある。

護摩堂と玄関の礎石は、ほぼすべてが残っており、絵図と同規模の建物が想定できる。ただし、絵図に描かれていない方形の深く掘られた石組みが２カ所で発見されたが、その用途ははっきりしない。それに対して方丈は、確認された礎石を見る限り、「善光寺道名所図会」にみられるような大規模なものではなかった可能性が高い。しかし、方丈跡から南斜面にかけて発見された大量の陶磁器は、その建物の機能を裏付けている。また、一番西端にある土蔵跡は確認できたが、絵図にある長屋等に関連した遺構は確認できなかった。

中堂救世殿部分は、絵図に描かれた建物の礎石は廃寺後に失われてしまった可能性が高い。しかし、下部に一段階古い建物の基壇と思われる遺構が発見されたが、その軸方向は「若澤寺一山之略絵図」段階の拝殿とは異なっており、それ以前の伽藍の景観は大きく異なっていた可能性が高い。

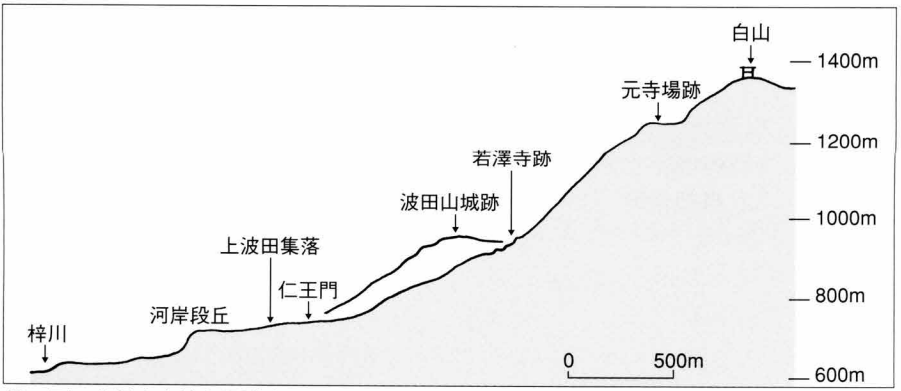
④　周辺調査から

若澤寺跡周辺には、「堂平」などの寺院に関連した地名があるとされる。現在はその場所が特定できないため、一帯の踏査を実施した。しかし、寺に関係するような遺構、その存在を推定できるような地形も見つからなかった。しかし踏査は、石造物を沢の中から発見するなど、大きな成果をあげることができた。また、若澤寺跡の近くまで波多山城の遺構が存在していることが確認され、時期的に両者が併存していた可能性も高く、その関係が気になる。

（2）ここまでわかった若澤寺

ここで平成11年の元寺場遺跡の発掘調査から始まった、「若澤寺を探る」ための一連の調査のまとめをしておきたい。

若澤寺の宗教空間　「若澤寺一山之略絵図」には、若澤寺とともに白山の頂上に祠が描かれている。また若澤寺への参道は、上波田の塔頭西光寺の仁王門が起点となっている。ただし、当初の西光寺の位置は、仁王門が現在ある場所から、男女沢を挟んで南東にあったとされるので、起点は現在と違っていた可能性もある。承応２年（1653）に書き記した文書を住職の隆仁が写したものに、若澤寺分として御朱印地の他に「仁王門　寺中屋敷 一ヶ所…寺家町北側門前屋敷 十軒分…」とある。寺家町は上波田なの



第18図　若澤寺宗教空間模式図

で、そこも若澤寺と関係深い場所となる。このようにみると、若澤寺の宗教空間は、若澤寺跡だけではなく、標高1,367mの白山から、元寺場跡、麓の現在の仁王門、上波田の集落までの範囲（第18図）を一括してとらえる必要があると思われる。

時代を追いながらみていきたい。

① 奈良・平安時代

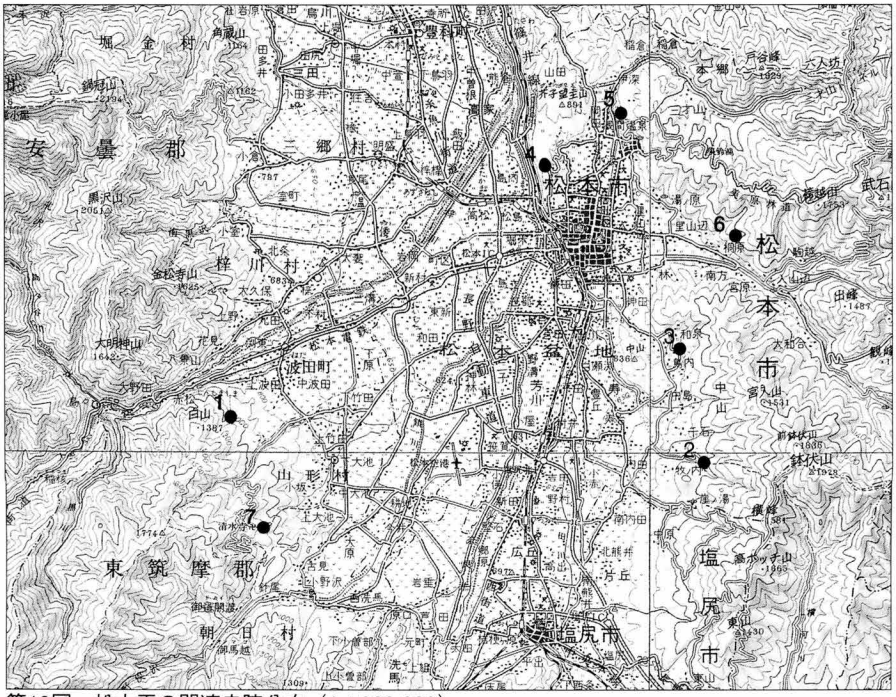
伝承では、奈良時代の開基とされ、坂上田村麻呂との関係が強調されるが、その時代の遺物は発見されていない。元寺場跡に宗教空間が形づくられるのは、平安時代後期（9世紀末から11世紀初頭）、遅くとも10世紀代である。出土した数多くの灯明皿や「安養房？」の墨書がなされた灰釉陶器皿は、宗教的な空間を想像させるのに十分である。ただし遺構は、中世の大規模な造成により、破壊された可能性がある。

この場所に宗教的な空間ができあがる背景を考えてみたい。麓の上波田一帯の平地部分の開発は、灰釉陶器が採集されていることから、元寺場跡と同時期には本格化していたと考えられるが、大規模な集落跡の存在は確認できていない。とてもそれら集落の経済力で、元寺場跡の宗教空間を維持するのは難しいと考えられ、もっと広大な範囲に及ぶ力を背景に考えなければならない。元寺場跡は松本平が一望できるとともに、逆に松本平からは遙かに望む高所である。9世紀後半から10世紀の松本平は、旧来の秩序が崩れ、松本平にある程度の広範囲に影響力を持つ新たな有力者層が台頭する時期である。造寺の背景は、波田という狭い範囲ではなく、松本平西岸地区の動向と連動していたと考えたい。

次に、松本平の寺院の立地等と比較してみたい。かつて山中に伽藍があり後世に現在の位置に下りてきたという伝承をもつものに、松本市内田の牛伏寺、山辺の海岸寺、城山の放光寺、中山の保福寺、浅間の神宮寺などの、いずれも当初は密教であった寺院がある。元寺場跡の調査成果は、このような伝承をあながち無視できないことを教えてくれた。中でも、牛伏寺をはじめ海岸寺、放光寺、神宮寺は、平安時代後期の観音像・薬師像を持っており、最初の山中への造寺が、若澤寺と同じように平安時代にさかのぼる可能性をもっている。このように、現在に続く仏教空間が麓から見上げる山中に造られるのは、松本市の平安時代後期では一般的であったと

いえる。特に観音信仰は、日本へ伝わって以来、鎮護国家や五穀豊穣、天災や疫病の鎮定、兵乱の鎮圧など現世利益が期待されていたが、10世紀になると浄土信仰の高まりにつれて、来世の利益が期待されるようになる。それとともに観音霊場を求めて、観音像を本尊とする寺院の建立が盛んになるとされる。松本平でも、海岸寺や放光寺のように、平安時代後期の観音像を持つ寺院の存在は、同じような動きがあったと理解したい。

なお、同じ鉢盛山の山腹に真言宗の清水寺（山形村）がある。若澤寺と同じように開基は奈良時代とされ、坂上田村麻呂伝承を持っている。元寺場と標高がほぼ同じで、松本平を一望できる。この立地と新しい観音像を持つことは、その造寺を平安時代まで遡らせることが可能でないかと考えている。しかし、このような高地に現在も存在する寺院は、近隣では見つからない。若澤寺が中世以降に大きく勢力を拡大し山頂から麓までを宗教空間とするのに対して、清水寺は麓へ下りるということを選択せずに、そのまま当初の位



第19図　松本平の関連寺院分布（1：300,000）

1.若澤寺（元寺場）　2.牛伏寺　3.保福寺　4.放光寺　5.神宮寺　6.海岸寺　7.清水寺

置に宗教空間を維持した可能性が高い。

② 中　世

鎌倉時代　元寺場跡に火葬墓（古瀬戸の瓶子や四耳壺を使用）が造られるが、それ以外の遺物は少ない。そこに墓地の空間は存在していたが、活発な人間の活動は見られなかったことを示している。しかし、この時期に麓の仁王門にある仁王像（1322）が造られている。西光寺かどうかは別にして、麓の部分の宗教施設の整備が進められたことを物語っている。また、伝来している仏像の中にこの時期のものがいくつかある。宗教活動の中心が、元寺場から、仁王門の存在する麓の部分に移ったとも考えられる。

室町時代　15世紀中頃になると、元寺場跡に再び多くの人々が集まり、宗教活動が活発化する。この時期に、東西約75m、南北約140mの中に4つの規模の大きな平場によって構成される大規模な寺院空間が、できあがった可能性が高い。そこに建物が存在した光景を想像した場合、かなり規模の大きい伽藍となる。源信盛が永享11年（1439）に梵鐘を寄進しているが、現在まで

	年	元寺場跡	若澤寺跡	年	記録・石造文化財
平安時代	900				
	1000				
	1100	安養房?			
鎌倉時代	1200				
	1300	古瀬戸			
南北朝	1400			1322	善光寺妙海作仁王像（元享2年）
室町時代	1500			1439 1458	源信盛　梵鐘寄進（永享11年） 若澤道供養費（長禄2年）
戦国	1600			1575 1577 1594	若澤道供養費（天正3年） 武田勝頼寺領安堵状（天正5年） 若澤寺、元水沢よりつき鐘堂場へ引く
江戸時代	1700			1635 1654 1670 1673	丁石（寛永12年） 若澤寺をつき鐘堂場から今の堂場にあげる 黒川山論裁許絵図（寛文10年） 寺火災（延宝元年）本堂焼失
	1800			1723 1744 1751 1773	若澤寺客殿建立（享保8年） 若澤寺御開帳（元文4年） 若澤寺庫裏建立（寛延4年） 若澤寺御開帳（安永2年）
明治	1900			1801 1808 1871	観音堂普請（享和元年） 護摩堂普請（享和7年） 廃仏毀釈（明治3年）
昭和	2000				

第20図　若澤寺関連年表

伝えられるこの時期の仏具も多い。長禄2年（1458）銘の若澤道供養碑の存在から、若澤寺跡にすでに寺院が移動していたという説がある。これを今のところ肯定も否定もできないが、この時期は、元寺場が再び機能を始める頃であり、そこへ向かう参道の脇に建てられたとしても不思議ではない。

しかし、ほぼ一世紀経た室町時代後半には、遺物の出土がなくなることから、人間の活発な活動はみられなくなった可能性が強い。最終的に元寺場に残ったのは、5間×5間（約9.2m×約9.6m）のかなり大きな密教本堂と推定される堂と、小規模な4間×5間の建物の2棟だけである。戦国時代は、遺物が若澤寺跡からも見つかっておらず、一帯の宗教空間のどこがこの時代の中心的な信仰場所か、はっきりしなくなる。しかし、重要文化財に指定されている田村堂は、室町時代後期の作とされる。本来は、移動が可能な堂内に納められていた厨子であり、これを納めた建物がどこかに存在していたことは間違いない。

このような寺院の発展は、在地の有力者の信仰と保護があったことは間違いない。元享2年（1322）に仁王像を寄進した源重久、永享11年（1439）に鐘を寄進した源信盛などの、村上源氏系波多氏がまずあげられる。そのほか、対岸の梓川村に勢力を持った西牧氏は宝徳2年（1450）に鰐口を寄進している。また長禄2年（1458）銘の参道供養碑にみられる「平朝臣六翁沙弥盛高」は北安曇地方に勢力を持った仁科氏とされる。このことを保護をした有力者が交代したとする考えもあるが、広範囲の有力領主の保護を受けていた考えたほうがいいのではないか。なお、元寺場跡から発見された火葬墓は、それら有力領主の墓であった可能性も考えられる。戦国時代になると、松本平一円を支配した武田氏や小笠原氏の保護を引き続き受けることになる。

③ 近　世

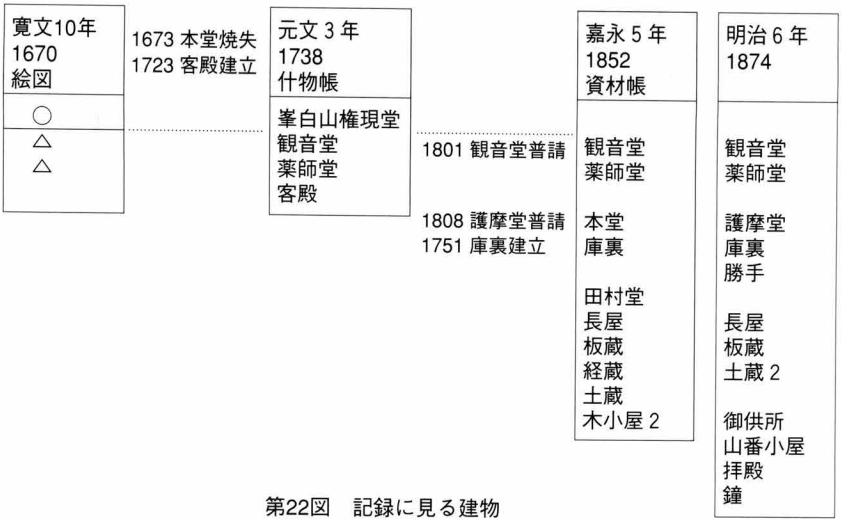
若澤寺は、大量に見つかった護摩堂面の遺物の時期を見る限り、18世紀後半から19世紀前半に、多くの人々が活動していたのがわかる。その時期は、絵図に描かれた伽藍の整備が終了した時期である。遺物の多くは、碗・皿などの什器で、「信濃日光」と呼ばれ、多くの参拝客を集めていた繁栄の様子が、それらからもしのばれる。しかし、中堂救世殿面のトレン

第21図　黒川山絵図と裁許状（浅田信一郎氏蔵）寛文山論の際、江戸幕府評定所へ提出した黒川山絵図と、その裏へ諸奉行・老中が署名・加印して下げ渡された裁許状の写し。

チ調査によって、下部に造成された2面が存在することがわかり、この伽藍が一度に造られたものではないことがわかった。その造成は、尾根を大きく崩して谷を埋めて平坦面を造る、大規模なものであった。しかし、具体的にいつ頃、現在の場所に伽藍が造られたかは、わからなかった。

現在の位置に若澤寺が伽藍が最初に造られた時期を、文献資料や紀年銘資料から考えてみたい。参道に置かれた丁石は、寛永12年（1635）に建てられ、寛文山論（1670）の「黒川山絵図」には現在と同じ位置に2棟の建物が描かれ「若澤寺」と注記されている。このことから伽藍は、17世紀前半までには現在の位置に造られていたことになる。年表にあるように、戦国時代から江戸時代のはじめに、寺の位置が動いたとする伝承があるが、その可能性は高い。

資材帳などに残る建物の記録を並べてみると、第22図のようになる。元文3年（1738）までの2つの記録は建物数が少なく、逆に「峯白山権現堂」は、それ以降の記録には出てこない。元文3年以降に普請の記録が多いが、



第22図　記録に見る建物

特に1800年前後に集中する。嘉永５年（1852）の資材帳に多数の建物が記載されているが、それは「若澤寺一山之略絵図」に描かれた建物と一致することから、19世紀の初めに絵図にあるような壮観な伽藍ができあがったと考えられる。逆に17・18世紀の伽藍の様子はわからない。

18世紀末にこのような整備が行われた背景であるが、本寺特有の理由として、天明５年（1785）から天保元年（1830）までの45年間も住職を勤めた栄豊が、御朱印寺としての格式を重視した寺にしようと努力したことが大きい。そのためには莫大な費用を必要とし、当然多くの喜捨にも頼っていたであろうが、重要な役割を果たしたのは、所有していた広大な森林の木材の売買であった。寺が独断で伐木し売買したことは、檀家とのトラブルを生むもので、争いが絶えなかった。

もう一つの背景は、江戸時代後半、18世紀前半（化政期）になると、経済力の向上、交通網の整備などを背景に、寺社参拝の旅が物見遊山の性格を強くし、空前の旅行ブームがおこったことである。現在でいえば旅行のためのガイドブックであった「名所図絵」が数多く刊行される。若澤寺も例外ではなく、江戸時代のはじめには成立していた信濃三十三番札所の二十五番札所ともなっていたが、作家として著名な十返舎一九が来訪したり、多くの刊行物にも紹介され有名になった。この寺社参拝の旅行ブームを利用して多くの参拝客を集め、潤おうとしたことも、伽藍を整備しようとし

た背景にあるだろう。

白山信仰　寛文山論（1670）の「黒川山絵図」をよくみると、2棟の建物の「若澤寺」のほかに、それより標高が高い白山山頂の近くの尾根筋に、2棟より立派な堂のような建物が描かれている。その場所は絵図の位置からすると元寺場で、資材帳に記される「峯白山権現堂」と考えられる。この点はすでに『波田町誌』で中川治雄さんが指摘しているところである。元寺場跡は16世紀中頃には活発な人々の活動がみられなくなったが、信仰対象は18世紀前半まで残っていたことになる。現在まで「元寺場」として地名が伝わっているのも、比較的新しい時期まで、建物が残り、宗教空間として認識されていたためと言える。絵図に描かれた立派な建物は、調査で確認された5間×5間（約9.2m×約9.6m）の密教本堂と推定される堂で、十一面千手観音像が安置されていたと考えられる。十一面観音は、白山妙理大権現の本地仏であり、白山の主尊は九頭龍であり水神の性格を持っている。元寺場跡の造成された空間の特徴に、白山に向かう道が中央を通過していることがある。白山が強く意識されていたためである。このことは、中世までに白山信仰が持ち込まれ、この宗教空間では大きな役割を果たしていたと推定される。ただし、宗教空間ができあがった平安時代の当初から、白山信仰が持ち込まれたかどうかはわからない。白山信仰は、延暦寺との結びつきにより広がったとされ、本来は天台宗であるはずであるが、若澤寺は真言宗である。そこで気になるのが、塔頭西光寺がかつては天台宗だという伝承である。ただ、修験道と関連するような行場や拝所、その名残の地名は現在まで確認されておらず、山内を駆けめぐり修行に励む行者の姿は浮かんでこない。「若澤寺一山之略絵図」には白山社が描かれているのに対し、峯白山権現堂は描かれていない。嘉永5年（1852）の資材帳にも記載されていない。これらのことから、峯白山権現堂は若澤寺の伽藍が整備されるうちに、壊されあるいは朽ち果ててしまった可能性があり、十一面千手観音像もその際に何らかの理由で姿を消し、白山信仰も失われていった可能性が高い。

白山頂上には、現在も小さな祠が置かれているが、現在どのような宗教活動が行われているかわからない。しかし、江戸時代には、白山権現と呼ばれ、日照りの際に松本藩の島立組が雨乞いを祈願する場所として、信仰が厚かったようである。白山は、農業用水として頼る梓川が松本平に流れ出る島々谷の入り口に姿良く聳え立っており、水配りの神が宿る山として、

ふさわしい。

廃仏毀釈　若澤寺は、30年に一度の御開帳をはじめ、宝暦4年（1754）には信濃国中から学僧を集めて1ヶ月間も亘る初法談会を開いたりして、御朱印寺の誇りにかけて宗教活動に力を入れた。嘉永6年（1853）には念願であった壇林所の寺格を本山から与えられ、幕末には、山階宮家のご祈祷所ともなり、絶頂を迎える。しかし、明治新政府が明治元年（1868）3月に発した太政官布告神仏分離令、明治3年（1870）の大教宣布などにより、廃仏毀釈運動とも呼ばれる民間の運動がおこる。特に松本藩は徹底した廃仏毀釈を行い、自らの菩提寺をはじめ多くの寺院を破壊した。若澤寺も例外ではなく、檀家の支援も無く、廃寺となってしまい、建物は移築あるいは解体され、仏具も散逸してしまう。せめてもの慰めは、その売却資金が、学校の建設費用に充てられたことであろう。その後大正年間に、観世音霊場としての再興がはかられるが、長続きすることはなかった。

⑤　おわりに

以上のように、白山から上波田にかけての宗教空間は、元寺場に人が足を踏み入れてから1100年以上たつが、その時代の状況に合わせて場所と内容を変えながら、現在まで信仰が続いている。

今までの調査でわかったこと、調査から推定されることを、ここまで述べてきた。多くの課題が残ったが、そのいくつかをあげておきたい。

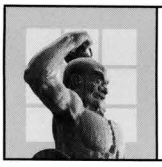
Ⅰ　若澤寺跡に最初に伽藍が作られた時期の特定である。今後の発掘調査の結果に期待したい。

Ⅱ　現在のところ、麓から白山の宗教空間の中に、時間的な空白がある。上波田には仁王門が存在し、その空白を埋める場所かもしれないが、調査は進んでいない。西光寺跡も含めて、今後の調査が必要である。

Ⅲ　隣接する波田山城跡は、この宗教空間の中に存在するといってもいい。両者にどんな関係にあったか興味深いが、波田山城跡の範囲や規模についてはっきりしない面が多いので、その確認が課題となる。

参考文献

牛山　佳幸　2002「山岳仏教と密教系寺院」
『伊那の中世伝説・山岳信仰』伊那市・伊那市教育委員会
木下　守　2002「「弘法様」から探る旧海岸寺の姿」
『長野県民俗の会通信』第172号
久保　智康　1999「国府をめぐる山林寺院の展開」
『朝日百科 国宝と歴史の旅』3　朝日新聞社
牛伏寺誌編纂委員会　1983『牛伏寺』
高瀬　重雄編　1977『白山・立山と北陸修験道』名著出版
波田町教育委員会　1974『波田町の石造文化財』
波田町教育委員会　1987『波田町誌 歴史現代編』
波田町教育委員会　2002『若澤寺を探るⅠ　元寺場跡』
波田町教育委員会　2004『若澤寺を探るⅢ　若澤寺文献資料集１』
原　明芳　1996「古代社会の変質と中世のはじまり」『松本市史』
第二巻 歴史編Ⅰ　原始・古代・中世
原田　和彦　2003「長野市の観音霊場」
『山をめぐる信州史の研究』高志書院
東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会
1968『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第二巻下
松本市　1996『松本市史』第四巻旧市町村編Ⅲ



若澤寺跡から出土した遺物

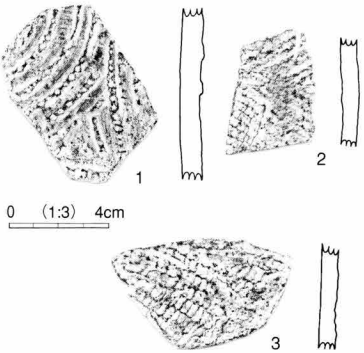
市川　隆之

1．縄文時代の遺物

方丈下の平坦地に入れた試し掘りの溝（トレンチ）や、発掘範囲各所から縄文土器が採取された。量は少ないが、若澤寺跡の下に縄文時代の遺跡があると思われる。土器は縄文前期末のもので、１は細い凹凸のある細い粘土紐の文様、２・３は縄文を付けている。

2．戦国時代から江戸時代前半の遺物

小破片ながら内耳鍋と思われる４の口縁破片が１点採取された。内耳鍋は内側に輪状の耳を付けた桶形の土鍋で、室町時代後半～戦国時代頃に多く使われた。採取破片は小さく断定しにくいが、内耳鍋とすれば縄文時代以後で最も古い遺物となる。



第23図　縄文土器

ただ、同時代の陶磁器もなく、若澤寺に関連するものとは言いきれない。続く江戸時代前半の焼物には瀬戸美濃産の白濁した長石釉（志野釉）を掛けた５の丸皿、６の口が折れた皿片がある。６は内底の釉を輪状に拭き取った輪はげ皿かもしれない。土器の内耳鍋と違って、陶器皿は長期に使えるので、恒常的に維持される施設があって、そこで使われたものかもしれない。ただ、その施設が若澤寺関連のものかは、これ以後、焼物の認められない空白期があって断定できない。

3．江戸時代末の遺物

江戸時代前半以後はしばらく焼物が認められない時期があり、次に焼物がみられるのは江戸時代終り頃のものである。この時期の焼物は方丈下の平坦地から数多く採取された。これらの焼物には明治時代後半にはやった型紙を使った染付紙型摺（かみがたすり）、銅版で印刷した型紙を使った染付銅版転写（どうばんてんしゃ）が含まれていないので、明治時代後半までは下らないと思われる。若澤寺の最終期か、廃寺の際の片付けで捨てられた焼物である可能性が高い。

（1） 焼　物

① 焼物の種類

一般的に、焼物は焼く温度によって、1300°前後の吸水性のない磁器、1000～1250°前後で焼かれた吸水性のある陶器、800～1000°で焼かれた土器に分けられるが、今回の発掘でも各種の焼物が出土した。磁器には呉須と呼ばれるコバルトで下絵を描いた染付、白磁、外面に青磁釉を掛けた染付、釉を掛けて焼いた上に赤色などの多彩な釉で上絵をつけた上絵付磁器などがあり、産地は九州の有田周辺で焼かれたいわゆる伊万里と、19世紀から磁器を焼き始めた瀬戸美濃製品がある。量的には瀬戸美濃製品が多い。陶器は釉を掛けたものと、釉を掛けない焼締のものがあり、釉は鉄分を混ぜた黒・茶褐色の鉄釉、淡い黄色や青緑色の木灰の灰釉、鬼板と呼ばれる酸化鉄を溶いて塗った錆釉、ルス釉とも呼ばれる緑色の緑釉などがある。産地は瀬戸美濃産が多く、一部に鉄分の多い赤茶色の土を使った近在の窯で焼かれたと思われる焼物や、精良な土で多彩な上絵を付けた京都や信楽と思われる陶器、産地不明の陶器がある。土器は僅かしか出ていないが、明褐色の素焼きのものと、黒灰色の瓦同様の燻し焼きがある。このようなさまざまな焼物は見た目や機能的な差があって使い分けされていた。また、中世・近世では焼物種類ごとに生産地が違う傾向があり、さまざまな産地から運ばれた焼物を組み合わせて使っていた。

② 器の種類

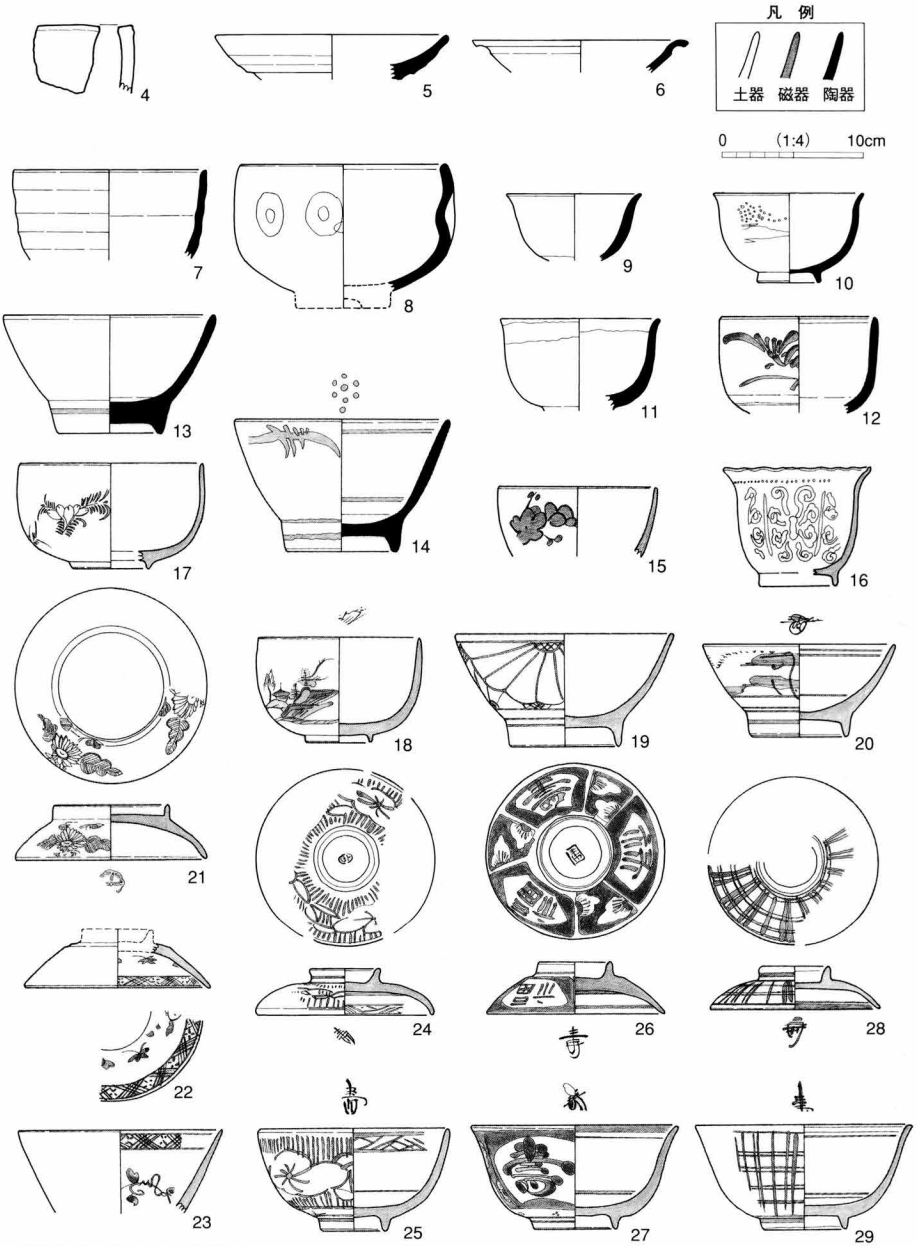
さまざまな種類の器が出土したが、茶碗類、徳利などの食器、土瓶、灯明皿、水滴類などが多い。多くの茶碗類・徳利・土瓶などは若澤寺で大勢の人間の食事や接待のために使われたものと考えられ、水滴は硯の多さからも文字を書く機会が多かったことを示すと思われる。特に茶碗類は同じ物がいくつも出土しており、膳に載せるセットとして保有していた可能性がある。ここでは便宜的に器の種類を食器、調理具、貯蔵具、その他にわけて出土品をみてみよう。

食器類 食器は碗、皿、小杯、徳利、碗の蓋、鉢、盃洗などがある。

杯 図にしていないが、呉須で宝船などの上絵を付けた非常に薄い作りの杯が少量ある。

碗 碗は口径7～9cm前後で高さ5～6cm、口径10～12cmで高さは5～7cmの二つのサイズある。ここでは前者を小碗、後者を碗と呼んでおく。小碗・碗共に伊万里・瀬戸美濃産の染付磁器や瀬戸美濃産の磁器染付を真似した呉須下絵の陶器碗は多いが、灰釉・鉄釉の陶器碗は少ない。

江戸時代末頃の茶碗類



第24図　出土した焼物 1

小碗は腰の丸い丸碗と、口の端が外側に反る端反(はぞり)の碗、胴が直線的な碗がある。丸碗は12・15・35・36で、15は伊万里？、12は瀬戸美濃の陶器、35は瀬戸美濃産の染付、36は同赤絵上絵付である。端反の碗は９が灰釉、10は外面に錆釉を掛けて白泥で文様を描く瀬戸美濃産？、11は鉄釉を掛けて口縁のみ白濁した藁灰釉を掛けた近在窯産陶器である。また16は型で作られた伊万里碗と思われる。口が直線的なものは33・37の瀬戸美濃産染付がある。33は口縁の外側に釘状の細い工具で文様を刻む。陶器小碗は数が少ないが、染付小碗は37のように同じものが多数あり、セットで具えられていたもののようだ。湯呑と思われる。

碗は陶器と染付磁器がある。陶器は瀬戸美濃産が主体だが、京焼・信楽と思われる破片もある。７は灰釉を掛けた丸碗、８は鉄釉の上に長石釉を飛ばし掛け、体部に窪みをもつ拳骨(げんこつ)茶碗と呼ばれる碗、13・14は瀬戸美濃産の染付風に呉須で絵を描いた幕末に流行した広東碗(かんとんわん)と呼ばれる形の碗で、図で示した以外に沢山出土している。

磁器染付碗も量が多い。胴の丸い丸碗、口端が外側に反る端反碗、広東碗、外面に青磁釉を掛けた体部が直線的な碗がある。丸碗は17・18・25で、17・18は伊万里、他は瀬戸美濃産と思われる。25は同じ文様の蓋が付く。23は腰が折れて胴が直線的な伊万里の碗で、外面に青磁釉を掛ける。複数出土し、22の蓋とセットになる。広東碗は少なく、19と20を図示した。19は伊万里、20は瀬戸美濃産と思われる。26～32は端反の碗と蓋で、30や32は伊万里?、他は瀬戸美濃産と思われる。染付碗には蓋が付くものも多く、碗の内底、蓋の裏にそれぞれ「寿」が書かれる。おめでたい文字を書いた接待用食器だろうか。21は碗の蓋と思われるが、セットの碗がわからない。また34は碗にしてはやや深めで、後述する蓋付きの鉢かもしれない。

皿　皿は口径10～12cmで高さ２cmの小型皿、口径15cm前後で高さ４cm前後の中型皿、口径18cm以上の大型皿がある。当時、どのように呼ばれたかわからないが、ここでは便宜的にそれぞれ小皿、中皿、大皿と呼んでおく。これらの皿は圧倒的に染付が多く、陶器は少量しかない。しかも、染付の小皿、中皿は同じものが複数あり、それぞれ膳に供するために同じものがいくつも具えられていたようだ。これに対して大皿や陶器皿は数が少ないので、共用や単独で用いられたと思われる。

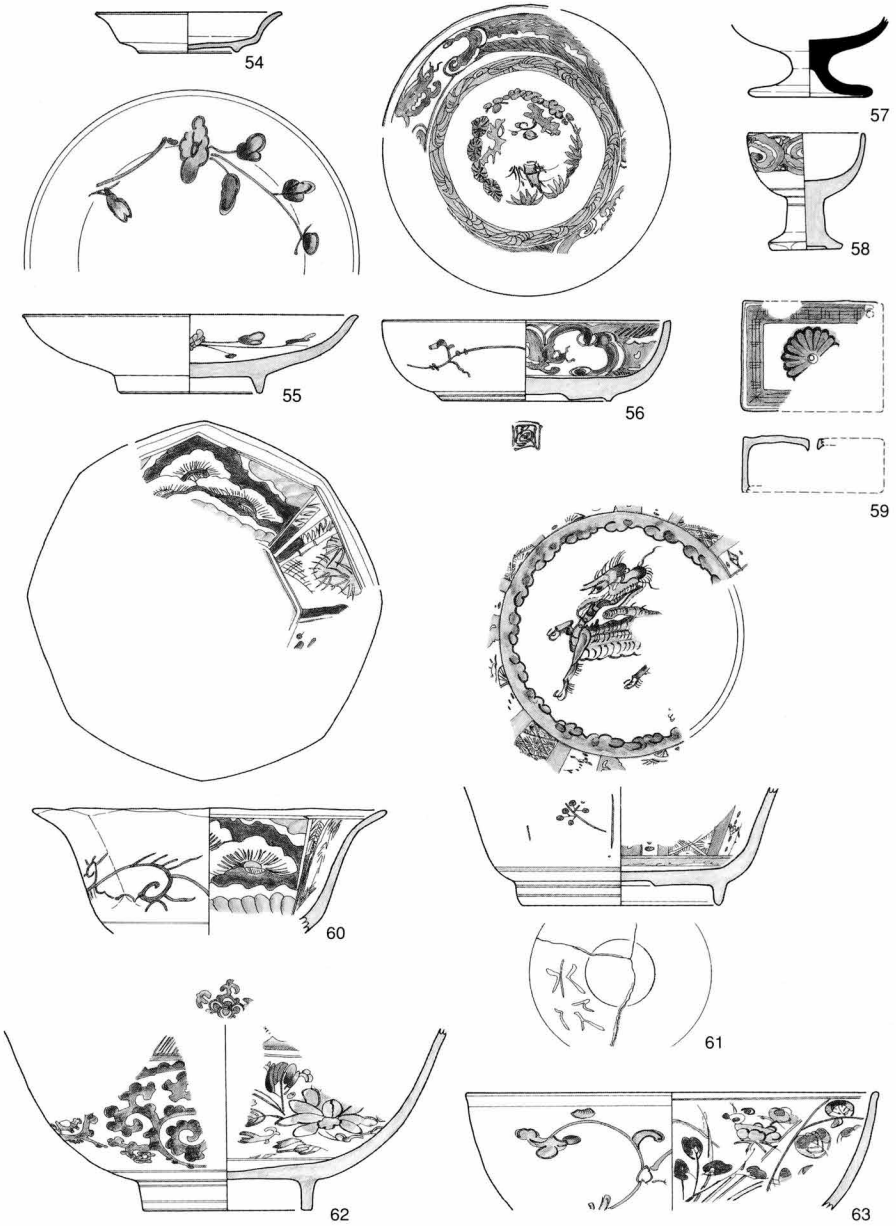
小皿は高さ２cmながら、口径10～11cmのやや小ぶりなものと、12cm前後

第25図　出土した焼物 2

の大ぶりな皿の2種サイズに更に分けられる。小ぶりな皿は54が瀬戸美濃産白磁皿、51・53が上からみると輪花状に形づくられる伊万里染付皿である。大ぶりな皿は52が竹林と人物が描かれる伊万里である。これらの皿は基本的に同種のものが複数ある。中皿は伊万里と思われる染付皿50や56がある。何れも底は幅広い釉のない一段高い部分をつくる蛇の目凹高台と呼ばれる形である。また、数少ない陶器の皿はこのサイズに入ると思われ、いずれも瀬戸美濃産である。48は上絵付、49後者は文様を切りぬいた型紙で呉須の文様を付けている。大皿は55の瀬戸美濃産染付と思われるものがある。大皿の出土量は少ない。

鉢　口縁19cm前後の多角形の鉢、21cm以上の大鉢があり、何れも伊万里の染付と思われる。多角形の鉢は60・61の2点図示したが、他にも同じものがいくつかあって小･中皿同様に個々の膳に供する器として複数セットで具えられていたようだ。全体の形が判明するものは少ないが、60は体部に松･竹･梅を描いており、六角形かもしれない。61は内側底に麒麟を描く。また、ガラス継ぎとよばれる低温で溶けるガラスで割れた破片を接着修復しており、そのガラスで外底に「水沢」と書いている。大鉢は全体形を窺

染付と陶器の皿



第26図　出土した焼物 3

えるものはない。

62は外面にいわゆるタコ唐草と呼ばれる唐草を描き、65は内面に花、外面に唐草を描く。出土数が少ないので個別膳に供す器ではないようだ。

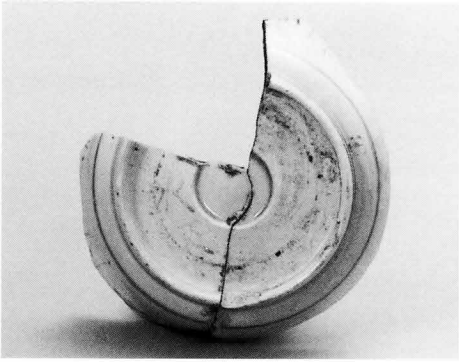
蓋付の鉢　64・65は口縁内側に釉がないことから、蓋の付く筒型の容器と思われる。口径は8cm前後、13cm前後の2種あり、何れも瀬戸美濃産の染付である。64は省略した線描で龍を描いている。

盃洗（はいせん）　66は盃洗と思われる。盃洗とは返杯する際に杯を洗うための鉢で、宴席に用いられた（文献1）。瀬戸美濃産の染付である。

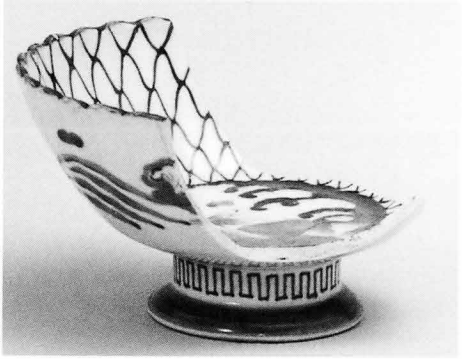
そば猪口（ちょこ）　そば猪口が少量出土した。38は胴体が直線的な筒型の器で、現代と同じ形である。伊万里染付で外面に草花文と蝶をあしらう。

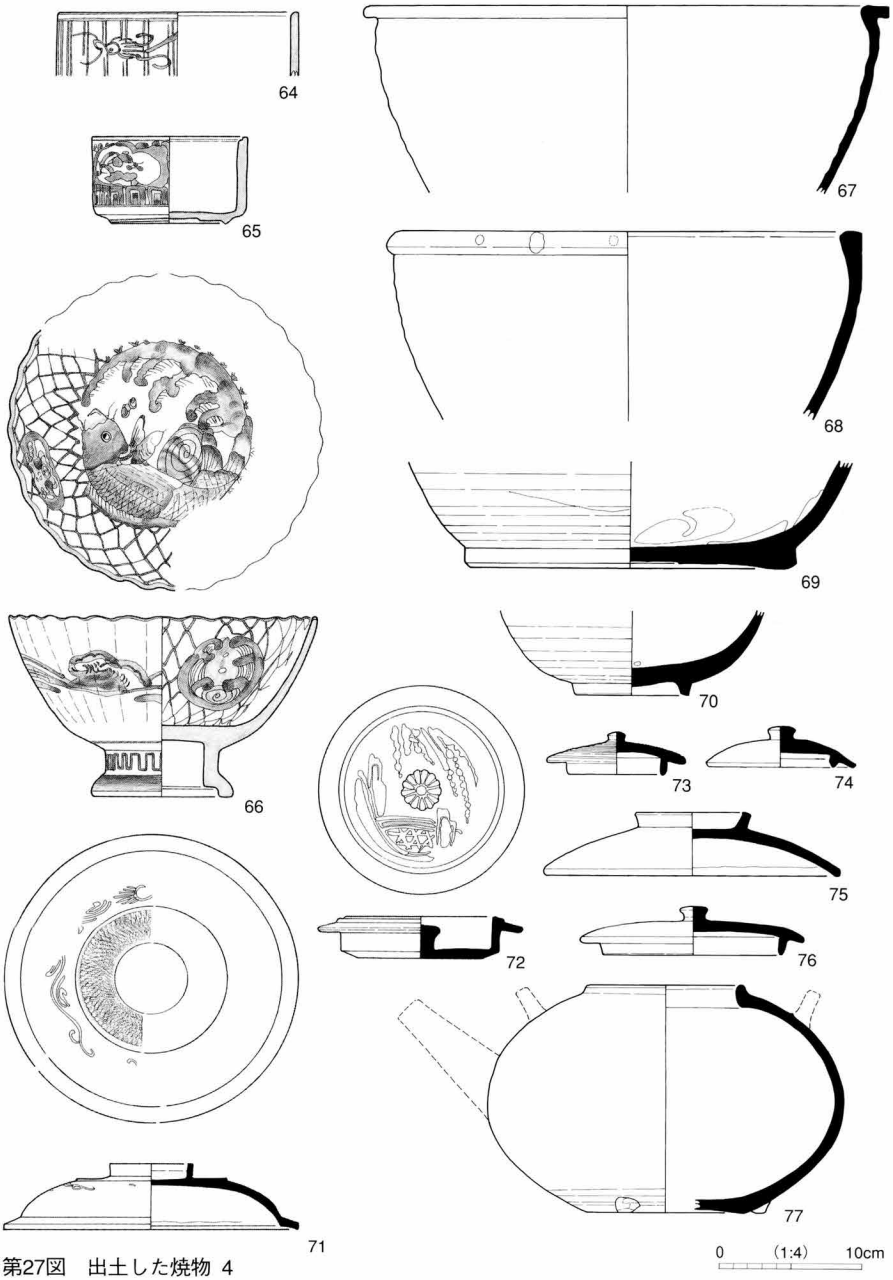
徳利　徳利が多く出土している。何れも酒屋で酒を買うための通い徳利ではなく、酒宴の席に供された徳利である。瀬戸美濃産の染付と近在窯の陶器徳利があり82の近在窯の徳利を図にした。徳利も同形のものが複数認められる。

仏飯（ぶっぱん）　仏壇などにご飯を供える器で、小型の碗状の容器に細い脚が付く。57は瀬戸美濃産の陶器で、58は伊万里？の染付と思われる。一般的な民家跡などでも出土して


ガラス継ぎされた鉢の底（蛇の目凹高台）

鉢類

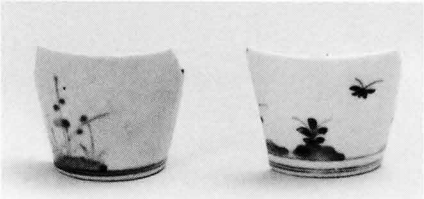

盃洗

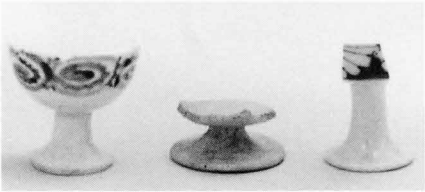


第27図　出土した焼物 4

おり、寺院のみで使われた器とは言いきれない。

急須　茶葉を直接土瓶で煮出して飲む方法もあったが、現代のように茶葉にお湯を注ぐ急須も出土している。図にしていないが、器壁の薄い焼き締めのものがある。土瓶と急須の使い分け方はよくわからない。





仏飯とソバ猪口

貯蔵具

貯蔵用の壷・甕はあまり出土していない。幕末頃には近在窯でも沢山焼いているので、入手しやすかったと思われるが、若澤寺での使用量が少なかったのだろうか。

壷・甕　量が少ない上に破片が主で、図で示したのは3つのみである。78は瀬戸美濃産の陶器甕で鉄釉を掛け、灰釉を流し掛けする。80は赤味の強い土を使った近在窯製品と思われる。81は白色のち密な土の壷で上部に鉄釉、下半に透明釉を掛ける。信楽産とも思われるが詳細は不明である。

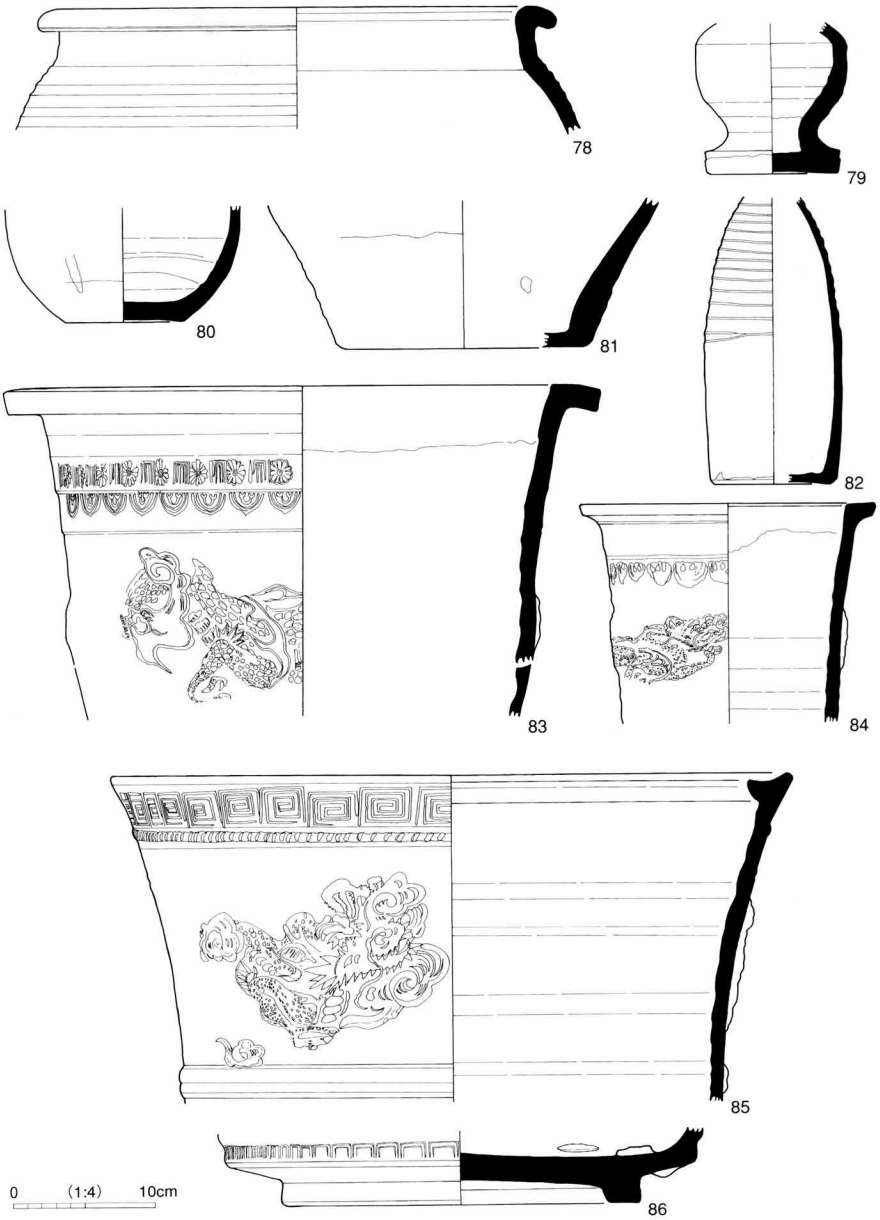
壷・甕類

調理具

煮炊きや調理につかう器で、土瓶・土鍋、練り鉢などが比較的多くみられる。すり鉢は少ない。

土瓶　茶葉を直接入れて煮出すヤカン形の器で、瀬戸美濃産と近在窯産がある。破片も多く出土しているが、全体形がわかるものは少なく、77のみ図で示した。

透明感のない緑色釉を掛け、底は無釉である。底には煤が付いており、直接火に掛けたことが知られる。他には無数の線を入れたいわゆる糸目の土瓶も出ている。なお、錆釉を掛けた73は瀬戸美濃の糸目土瓶、76は瀬戸美濃産の錆釉土瓶、74は灰釉を掛けた近在窯産の土瓶蓋と思われる。

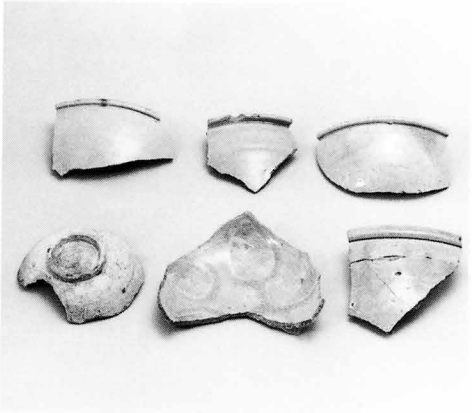


第28図　出土した焼物 5

土　鍋　注ぎ口と柄を付けたいわゆる行平(ゆきひら)鍋と思われる破片、耳の付いた鉄釉の土鍋片が採取された。何れも全体の形が窺えるものは少ない。瀬戸美濃製品と思われるものと、近在窯製品と思われるものがある。また、71は行平鍋の蓋と思われるが、唐草の模様を付けるなど手の込んだ作りで、来客用などの優品と思われる。また、75は陶器の蓋で、これも土鍋の蓋と思われる。江戸時代後半から鍋料理が普及するといわれているが、若澤寺でも鍋料理が供されたのだろうか。

土瓶

練り鉢・片口　粉物を練る際に使われた鉢で、67～70を図に示した。何れも灰釉を掛けたもので、口縁の形は外側に折れるものと折り返したものがある。69は底部破片で、重焼するために釉を所々拭き取っている。70は灰釉を掛けた片口の底部と思われる。


練り鉢類

すり鉢　すり鉢はごく一般的に用いられた調理具ではあるが、今回の発掘調査では出土数が少ない。図示したのは87の瀬戸美濃産のすり鉢、88の近在窯産のすり鉢を図示した。87は口縁内側に丸に「大」字をスタンプで付けている。88は卸目が密である。

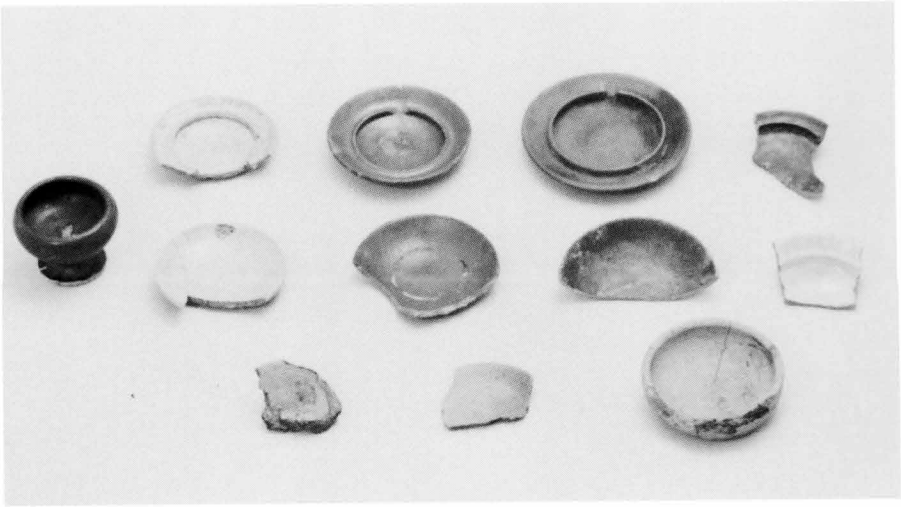
蓋　73・74・76は土瓶の蓋と思われ、73と76は錆釉、74は灰釉を掛ける。75は土鍋の蓋と思われる。72は鉄釉を掛けた上に白泥と赤色の上絵を付ける。丁寧な作りであることや大きさからも土瓶や急須の蓋とは考えにくいが、何の蓋かわからなかった。

その他

文具類や調度類をまとめて扱う。

灯明皿　灯明皿は明かり採りの必需品で、今回の発掘でも多く出土した。ここではごく一部のみ図に示した。42～44は受け口が付くもの、45・46は皿状のもので釉は錆釉を主として灰釉もある。47は秉燭（ひょうそく）と呼ばれる杯に脚を付けた灯明具で、内側に芯立ての細い筒形突起が付く。これらの灯明皿は瀬戸美濃産を中心に近在窯のものもある。また、39～41は素焼きの土器皿だが、陶器灯明皿が普及する以前か、補助的な灯明皿と思われる。なお、41の土器皿は表面がヘラ等で磨かれており、灯明皿ではないかもしれない。

すり鉢



灯明皿類

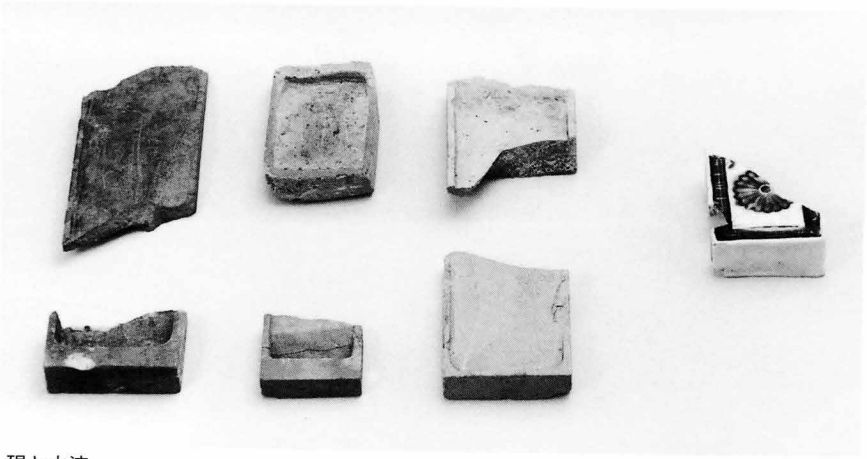
水　滴　硯で墨をする際に使う水を入れた容器で、空気孔と注ぎ口の小さな穴が2ヶ所付く。箱型のほかに動物などをかたどったものも知られている。瀬戸美濃産染付を中心に陶器も少量ある。図の59は染付の四角い箱型水滴で菊花文をあしらうもので、他に俵型の水滴も出土している。硯と共に寺で文字を書く機会が多かったことを物語る器といえる。

植木鉢類

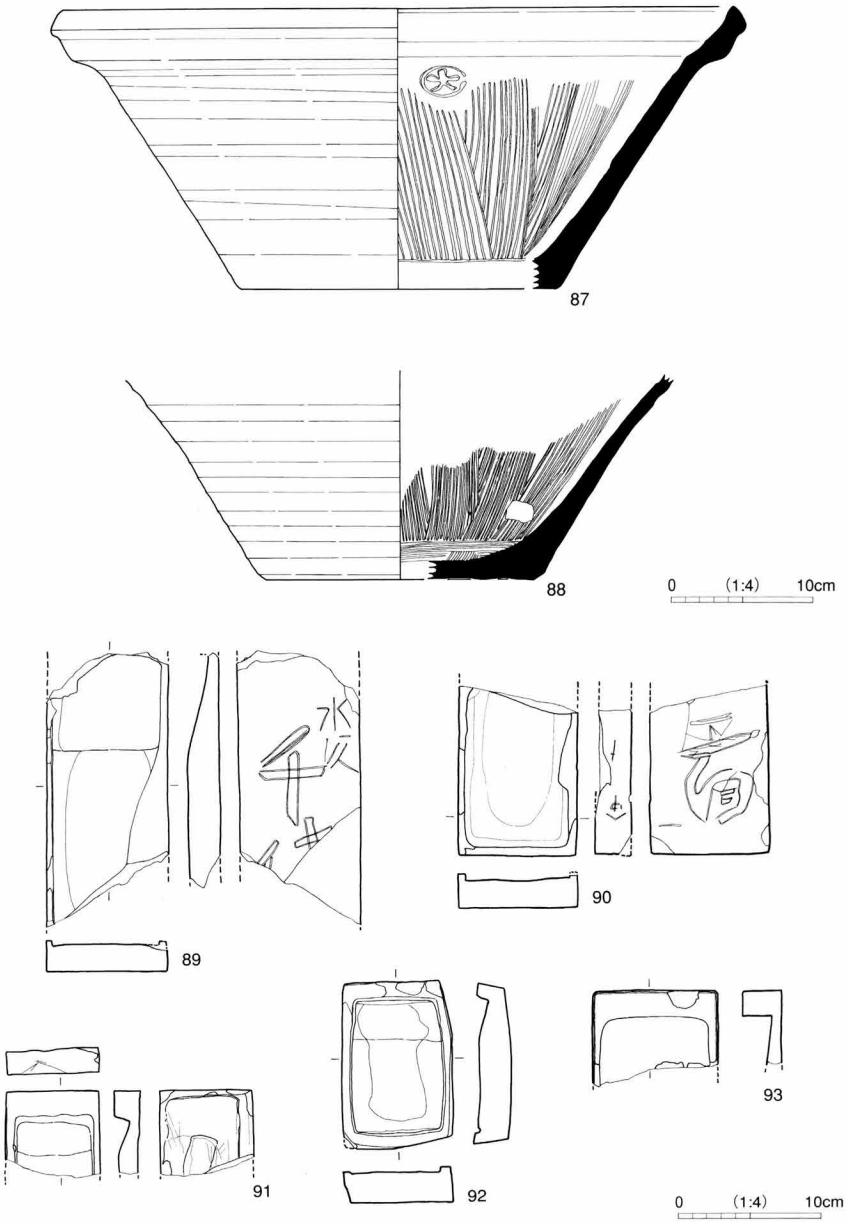
花　瓶　79は鉄釉を掛けた近在窯産の花瓶と思われる。寺では仏前に花を供える機会は多いと思われるが、花瓶と断定できたものは少ない。

水　甕　85・86は水甕と思われるもので、植木鉢と似たつくりで外側に竜とスタンプ文をあしらい、緑色の釉を掛ける。口が内側に折れる。

植木鉢　瀬戸美濃産の緑色の釉（ルス釉）を掛け竜の模様を付けた植木鉢類が出ている。83・84の二つ図に示したが、他にいくつかあって寺院内で植木が行われていたことがわかる。植木鉢のサイズは図示したように最低2種あるようだ。



硯と水滴



第29図　出土した焼物 6・硯

（2）石製品

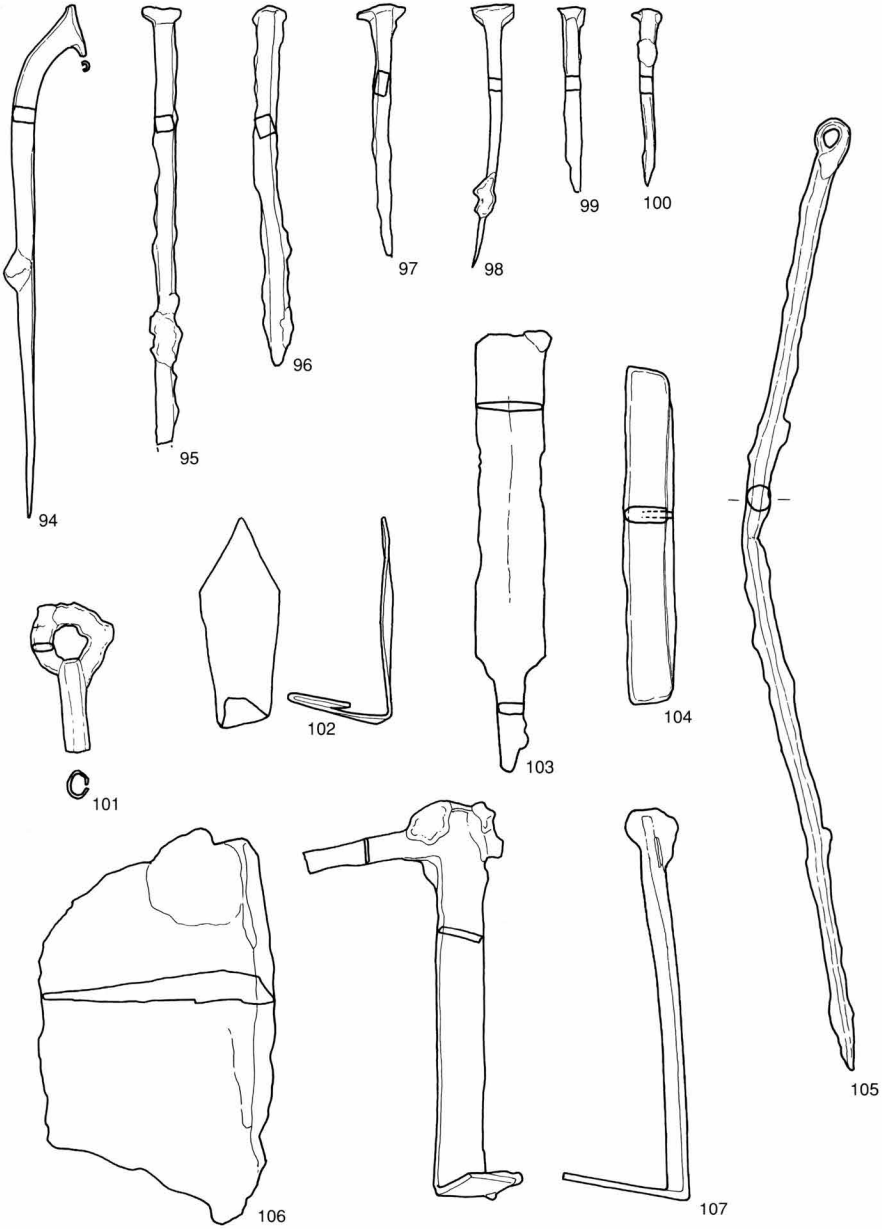
硯・碁石・砥石などの石製品が採取され、硯のみを図示した。硯は比較的多くみつかり、若澤寺では多く使われていたことを示す。多くの硯は頁岩など粒子の細かな堅い石材で作られているが、他に92の屋根瓦片を削って硯にしたもの、あるいは燻し焼きの瓦製品の93の硯もある。また、石製の硯で深く窪むほど使い込んで、裏返して作りなおしているものがあった。なお、硯の裏面に墨の文字を真似した小刀などの工具で付けた文字がいくつか認められた。判読できたものでは「水（沢？）　千（代）」、「旬？（百？か）」、三角と「中」の字を組み合わせたもの（山中？）がある。これらの文字は個人の所有者名を表すものだろうか。

（3）金属製品

鉄製品と銅製品がある。一部のみ図に示したが、鉄製品は94～100が釘、105が火箸、102が祠などに納めた剣形、101が鍵？、104が小柄か小刀？、103がやすりと思われ、これ以外に文鎮？などもある。最も多いのが釘で、図で示したように長さ約13cm強、（10cm前後）、7cm、4.5cmの3（～4）種ありそうだ。また、頭は一旦広めに叩き延ばして折り返しており、頭がT字状になるものが目立つ。剣形は本来神仏に奉納されたものと思われるが、図示したものは折り曲げられている。奉納の度に古いものは廃棄されたのだろうか。106は板状の鉄製品、107はL字状の幅の狭い鉄板を折り曲げた製品で、何かの部品と思われるが、用途はわからない。なお、これ以外に鉄製品を作る際に排出される鉄滓（てっさい）と呼ばれる製鉄カスが出土している。建物構築時か、寺院存続中に鍛冶が行われたのだろうか。

銅製品は3点のみ図で示した。108は三角形の板で1辺は直線的で折り曲げられており、反対の先端先に釘孔がある。109は三角形の銅製板だが、用途はわからない。110は細い紐状の銅製品で一端の断面は丸い。

銭はすべて寛永通宝で、111～117が銅銭、118～121が鉄銭である。111は裏面に「文」を刻み、寛文8年（1668）～天和3年（1683）に鋳造された文銭と呼ばれるものだろう（文献2）。116は裏面に何も刻まないが、表面の文字や銭径はこれと似ている。112は裏面に「元」を刻み、元禄10年（1697）～延



第30図　金属製品 1

亨4年（1747）・明和4年（1767）～天明元年（1781）に鋳造されたものと思われる。随分小型だが、類似した大きさの銭には113～115がある。117は裏面に十一波と呼ばれる文様を刻む。明和5年（1768）～天明8年（1788）、文政4年（1821）～文政8年（1825）、安政4年（1857）～安政6年（1859）鋳造のものと思われる。118～121は鉄銭で元文4年（1739）～延享4年（1747）、明和2年（1765）～安永8年（1779）、天保6年（1835）～慶応3年（1867）に鋳造されたものに当ろう。120と121は錆で文字が全く読めない。

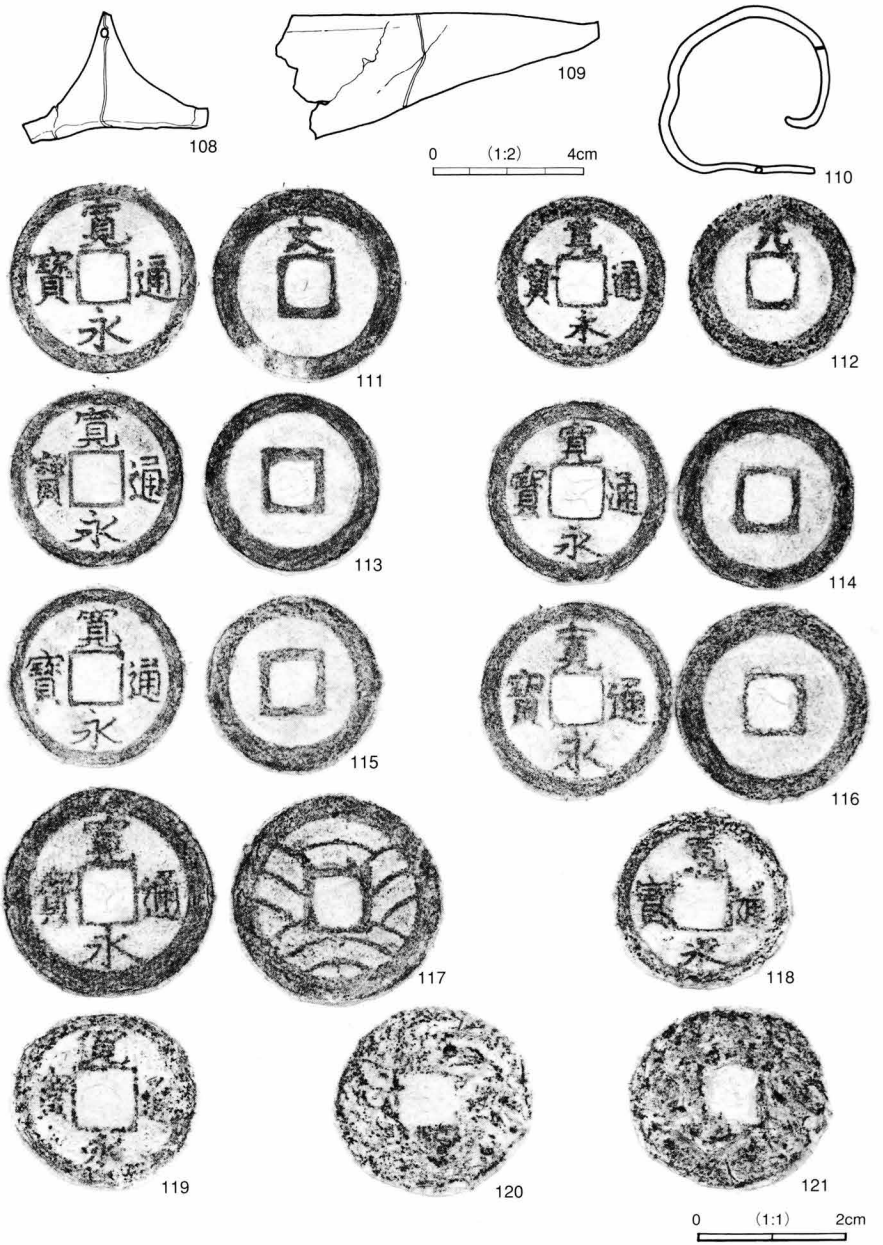
4．出土した焼物からわかること

焼物は粘土で作るので細かな細工がしやすく、時代ごとの形の変化も現れやすい。そのため、考古学では遺跡の年代を知る物差しに使われている。ここでも出土した焼物から若澤寺の年代を考えてみる。

出土した焼物は縄文時代、戦国時代?、江戸時代前半頃、江戸時代終わり頃のものがあった。縄文土器は寺とは無関係の遺跡のものといえるが、戦国時代頃と江戸時代前半のものは若澤寺ゆかりの焼物と判定できるか微妙である。ただし、戦国時代頃の土鍋破片は小さく、本当に戦国時代の内耳鍋と認定してよいか不安もある。また、江戸時代前半の陶器皿類も出土量は少なく、若澤寺に直接関係するとも断定できない。従って確実な若澤寺に関連する焼物は、量的に多く出土した江戸時代末頃のものであり、現在地表面に残されている寺跡はほぼ江戸時代末頃の姿と考えられる。この地表面に残る寺の姿が整備された時期を細く追求するのは難しいが、江戸時代末頃の焼物のなかで比較的古いものとして18世紀後半頃の物があり、これが想定できる上限とはいえる。それ以前の若澤寺の様相は焼物がほとんどない時期もあってよくわからない。

また、若澤寺が元々あったとされる元寺場遺跡では中世末までの焼物があるものの、江戸時代の焼物が出土していなかった。さらに、長禄年間の碑が若澤寺跡にあることから、室町時代～江戸時代中頃には山麓に若澤寺があったとも想定されていたが、今回の発掘成果からは室町時代～江戸時代前半の焼物が少なく、若澤寺の移転については、今回あきらかにできなかった。

ところで、量的に多い江戸時代終わり頃の焼物の器種から若澤寺の様子を想像すると、同じ食器が数多く出土していることから大勢の人間を接待


108
109
0 (1:2) 4cm
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
0 (1:1) 2cm

第31図　金属製品 2・銭

する、あるいは揃いのお膳で食事をすることが多かったと推測される。遺跡に残される器は腐りにくい陶磁器が主体で、漆器はどの程度使われたかわからないが、少なくとも膳には染付の蓋付碗、染付皿がセットで使われた可能性がある。同時代の農村遺跡である塩尻市吉田川西遺跡の焼物と比べると、川西遺跡で多くみられる灰釉をかけた大ぶりの丸い碗がここではほとんど出土しておらず、一方で伊万里などの染付が多いことはやや高級品が多いと捉えられるか。また、徳利や杯などの酒器、土瓶や湯のみなど飲茶関係の器も多く、こうしたことから出土した食器は接客用の器が主体と考えたほうが良いのかもしれない。

一方、香を焚く香炉や仏飯といった仏事関係の器が逆に少ない点は気になる。食器が多い特徴は、料亭ではないかと勘違いしてしまいそうだが、比較する寺院の発掘例がないことや、仏具は持ち出されている可能性もあって、今後、類例をまってさらに検討されることを期待したい。

参考文献

永井久美男編　1998『近世の出土銭Ⅱ』兵庫埋蔵銭調査会

井汲　隆夫　1994「江戸のやきもの」
『江戸のやきものと暮らし』新宿区内藤町遺跡調査会

服部　郁　1994「近世瀬戸窯における磁器生産の開始と展開」
『研究紀要第２輯』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター

藤澤　良祐　1987「本業焼の研究（１）」
『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅵ』瀬戸市歴史民俗資料館

藤澤　良祐　1988「本業焼の研究（２）」
『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅶ』瀬戸市歴史民俗資料館

藤澤　良祐　1989「本業焼の研究（３）」
『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅷ』瀬戸市歴史民俗資料館

（財）長野県埋蔵文化財センター
1989『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書　塩尻市内その２』

産　地	焼　物	器　種	中堂救世殿	拝　殿	観音堂	方　丈	方丈下テラス	方丈下トレンチ	不　明
瀬戸・美濃	陶器	小　碗					25		
		碗				7	134	5	
		皿					12		1
		鉢				7	7		
		仏　飯					17		
		徳　利				1	23		
		こね鉢・片口鉢				8	168	16	
		鍋・土瓶				14	95		7
		すり鉢	2			4	51		
		香　炉					2		
		壺・甕				1	10		
		植木鉢・水甕				2	54	2	
		灯明皿・秉燭	1			5	184	15	
		蓋					17	4	
		水　滴					19	1	
		器種不明					32	1	
	染付陶	小　碗	1			3	16		
		碗	1			3	116	5	
		仏　飯	1				5		
	染付磁器・上絵付磁	小　杯				3	63	2	
		小　碗	1	2	5	21	201	16	2
		碗	3			18	130	16	
		小　皿	1			4	73		
		中　皿					26		
		鉢				10	34	1	
		仏　飯					8		
		徳　利	1				97	4	
		急　須					7		
		蓋				1	8		
		水　滴	3			1	59	5	
		植木鉢				1	4		
		香炉					1		
		壺					3		
		器種不明					135	28	
伊万里	染付磁器	小　碗				1	36		
		碗	4			2	99	2	
		小　皿				1	53	2	
		中　皿					10		
		鉢	2				10		
		ソバ猪口					4	1	
		蓋					9	2	
		壺					3		
		器種不明					13		
京　系	陶器	小　碗					19		
		徳　利					3		
信　楽	陶	壺					2		
唐　津	陶	碗					1		
近在窯	陶器	小　碗					10	2	
		碗					6		
		皿					2		
		徳　利					31		1
		急　須					4		
		蓋					4		
		調理鉢					1		
		土瓶・土鍋・蓋				4	48	4	1
		すり鉢					6	3	
		灯明皿・秉燭				2	19		
		甕・壺				1	5		
		香　炉？					1		
		花　瓶					2	1	
		器種不明					1		
	土器	皿					7		
		火　鉢					48	2	
		五　徳？					5		
		器種不明					3		
		内耳鍋					1		
産地不明	陶器	小　碗					6		
		急須・蓋				2	23		
		徳　利					2		
		調理鉢					2	1	
		土瓶・蓋				4	102	4	
		壺					2		
		器種不明				3	17		
		水滴（軟質陶器）					3		
		縄文土器			3			6	

発掘で採取された焼物の内訳（数字は破片数）

文書に見る若澤寺

百瀬　光信

波田町により進められた若澤寺総合調査は、平成12年から本格的な調査が始められた。標高1,250mの元寺場跡発掘によって、およそ1000年ほど前からの山岳寺院遺構が存在したこと、またそれが15世紀末まで使われていたことが解明された。

引き続き平成14年からは水沢谷の若澤寺跡の発掘及び礎石の確認、実測、石垣の調査、参道の踏査等が行われた。寺院を発掘した結果、江戸後期から末期の70年間（1780～1850）に使用された陶磁器片など、およそ1,000点が遺物として採取されている。しかし、なぜか江戸中期以前の遺物はほとんど発見されておらず、そのため数百年の空白部分を埋める考古的資料に欠けてしまっている。

今回、総合調査･報告書の作成に当たり、中世から近世全般の若澤寺関係考古資料の欠ける部分を補完解明するため、波田町誌に載らない多くの個人所蔵古文書資料を拝借し解読を行った。その結果、書籍などに記載されている文献資料を含め「若澤寺文献資料集」として平成16年10月出版し、「資料集２」も17年３月発刊して、調査報告書の万全を期することができた。

若澤寺文献資料集１

その資料集の内訳は次のようである。

（１）「若澤寺初法談始終雑録（下波田、波多腰信義氏所蔵）」

江戸中期の宝暦４年（1754）に若澤寺住職栄運法印により行われた、信濃国の所化衆（学僧）約100人と、松本平の真言宗寺院が参加し、檀家と波田三村民及び信徒の寄進で、約30日間若澤寺に寄宿させ、寝食をともにしながら学ぶ、仏法大学ゼミナールが行われた。ありがたい講義や問答を聴くため、松本平はもとより県内から１日何千人もの善男善女が、里から２キロも隔てた山奥の若澤寺境内へ参拝に押し寄せたという。その一部始終が日記風に住職の手で記録されており、古文書は解読され、資料集１に掲載されている。

（2）「安永２年（1773）の御開帳記録」

こちらも若澤寺住職栄運法印により記録されている。下波田の波多腰信義氏所持の古文書を解読して所載した。記録によれば、水沢観音の御開帳は30年に一度行われ、当時水沢観音信者の拡がりは、松本平西辺部一帯や松本城下にも及んでおり、ことに女性は各村から「御手の糸」を奉納していた。このことから水沢観世音がことさら松本平の女性たちの心を強くひきつける、現世利益の仏様であったことが窺える。

（3）「若澤寺一山文献資料集」

これまで出版公開されている書籍や資料集などを幅広く渉猟した上で、その内の若澤寺関係の資料だけを集めてまとめたのが本誌であり、研究に便宜を供するため上梓した。

（4）「若澤寺一山関係文書集」

天正５年（1577）の「武田勝頼龍丸御朱印寄進状」をはじめとして、主に波田町内に残されている各家所蔵古文書から若澤寺関係のものを収録して所蔵した文書である。江戸時代末から明治初年の、若澤寺一山に関する情報と、廃寺後の寺領田畑、宅地や建物、仏像の行方まで、従来公開されていない文書の多くが掲載されている。

（5）「若澤寺一山年表」

若澤寺は、奈良時代の僧行基の創建縁起で、平安初期に坂上田村麻呂による中興と伝えられている。しかし、８世紀に水沢山に寺院を建立したのは、山麓の梓川河岸段丘や唐沢川の扇状台地に大和朝廷の御牧大野牧や藤原氏の大野庄等の、荘園と牧を支配した秦（波多）氏の信仰の所産ではないだろうか。行基も坂上田村麻呂もともに渡来系氏族のシンボル的英雄であった。波田氏は平安末から鎌倉期には「源姓」となった。その後、南北朝期には一山が天台宗と真言宗に宗論で分裂し、奥の院は若澤寺、中院の光明山西光寺、里ノ坊別当西光寺の三寺に分かれた。別当西光寺は、仁王尊（県宝）を元享２年（1322）に源重久により寄進されるなど、七堂伽藍のそろった寺であったが、大檀那の庄屋源右衛門が元禄３年（1690）に没落したことにより、寺は田畑を失い、西光寺は若澤寺預けの末寺に変わった。

若澤寺は江戸初期に新義真言宗智山派に属し、智積院末になり法流を伝え、徳川将軍の朱印寺として栄えた。若澤寺が現在の寺場へ最初に創建された時代は、永亨11年（1439）梵鐘銘に波多郷源信盛とあり、里坊別当栗田西光寺が鎌倉時代に上波田の寺家町に在ったように、奥の院として観音堂や不動堂が水沢谷に作られ一体の寺とみられ、現存する水沢不動立像も鎌倉末の製作と鑑定されている。

平安時代に造成されたと見られる元寺場にある峯白山本地堂（みねはくさんほんじどう）には、白山権現の本地佛である十一面観音が安置されている。元寺場は天台系修験道場に使われていたのであろうか。

重要文化財の田村堂は、室町末（16世紀）に作られた若澤寺本尊の厨子である。金堂も江戸初期（17世紀）の建造、丁石も寛永12年（1635）の造立であることから、若澤寺も現在地に鎌倉時代にはあった。

若澤寺文献資料集２

平成17年３月に波田町教育委員会より出版された。

（１）「信州水澤観音利益（りやく）、雑食橋由来（ぞうしばしゆらい）」

文政２年（1819）春に江戸において出版された、木版刷りの絵入り草紙である。江戸後期の戯作者十返舎一九が、文化11年（1814）秋に改装したばかりの若澤寺を訪れ、３日間逗留したといわれている。その間に寺の若僧や村民から聞いた昔話をまとめ、人情世話物（恋愛小説風）に創作し、観音利益と雑炊橋架設にまつわる男女の恋や、波田城山御家騒動をサスペンスドラマ化したのがこの作品である。原本は東京都立中央図書館特別文庫室に所蔵されており、許可を得て解読、活字化し資料集２に掲載した。

（２）「筑摩安曇古城開記（抜粋）」

昭和12年（1937）８月発刊の「安筑史料叢書」の中に掲載されている「古城開記」より、水澤観音に関係する部分を抜粋した文書である。同書の「書目解題」（堀内千万蔵氏解説）によれば、「本書は蕗原拾葉集中の一巻である。本書何人の作たるは不明なれど、巻首多量に佛道を礼賛する当り、多分僧侶の筆述らしく、また若澤寺及びその塔頭たる西光寺を力説せるあたり、あるいはそれ等の寺僧かと思われる。（中略）享保以降の明和安永ころの述作なりと推定される。」と書かれており、中世の若澤寺の消息を伝える重要な文献史料である。

(3)「西光寺絵図（書き込みの一部抜粋）」

この絵図は上波田阿弥陀堂所蔵で、波田町指定文化財に指定されている。絵図の元絵は正保2年（1642）に描かれた古絵図を、寛政8年（1796）に再び描き写したと記されている。絵図面の中に文章が多く書き込まれているが「西光寺伝に曰く」の文章は、若澤寺とその一山にかかわる中世の故事が記述され、重要な史料とされている。また堂塔の建造に関する文章からも参考資料となる部分が多く、必要な書き込みだけを抜粋して記載した。

(4)「信府統記」

松本藩水野家が享保9年（1724）に編纂した文献である。「昔ハ今ノ地ヨリ二十七八町山奥ニ有リシガ、長禄二申戊（1458）今ノ地ニ移セリ」と記され、寺入口の供養碑銘にも「長禄二年五月二十八日、平朝臣六翁沙弥盛高」と刻まれている。また寺の鰐口銘にも「施主平朝臣六翁沙弥盛高、長禄二年(1458)」とあり、この時期若澤寺に大きな変動があったと考えられている。

文禄3年（1590）若澤寺に細野七右衛門が古い鰐口を再利用し、刻銘して寄付しており、また町内の古文書に「元水沢よりつきがね堂場へ寺を引く」とあり翌年には下波田原村へ法久寺を移している。この時も若澤寺に大きな変動があった年とみられるが「元水沢、つきがね堂場」などまだ不明な点が多い。

(5)「信濃奇勝録（佐久の人、井出道貞編）」

天保5年（1834）に刊行された書物である。若澤寺については一山の略絵図、寺の紹介文が見られ、梵鐘の銘文と水沢の山焼け、天狗の話などが記されている。

(6)「善光寺道名所図会（名古屋の人、豊田利忠編）」

天保14年（1843）に編纂され嘉永2年（1849）に刊行された。若澤寺一山の正確な絵図と雑食橋が載っており、また寺伝と扁額の文章（十返舎一九作）、鰐口銘及び御詠歌が載っている。

(7)「内山真弓の水沢日記」

弘化年間（1844～47）に、和田の萩原元貞と共に若澤寺を訪れたときのことが書かれており、郷土史誌「信濃」に掲載された。

若澤寺絵図比較

波多腰英文

若澤寺は、江戸時代後期には大伽藍が造営され、信濃日光と称えられたため文人墨客や巡礼の参詣が多く、全国にその名が知れ渡っていた。文化11年（1814）には十辺舎一九も訪れている。このような有名寺院も、明治初年に行われた廃仏毀釈には抗し難く、廃寺となってしまった。当時の寺全形の様子を知る資料としては、臼田町の神官井出道貞著「信濃奇勝録」、豊田利忠著「善光寺道名所図会」と版木に残された版画「若澤寺一山之略絵図」など、わずか数点の絵図が現存しているだけである。

平成15～16年度に実施された発掘調査の結果、版画に残されている絵図どおりの礎石が出土した。従ってこれらの絵図が、部分的誇張による構築物の大小は別として、当時の若澤寺全体の配置状況を忠実に表していることを前提に比較して見ると、寺の改築状況が推定できる大変興味深い史料である。

表1に「若澤寺絵図が作成された経緯」「水沢山若澤寺絵図詳細比較」を示した。これによると、「信濃奇勝録」には稲荷社が記載されておらず、「善光寺道名所図会」、「若澤寺一山之略絵図」より約30年以上古い、京都愛染寺より稲荷大明神安置が行われた寛政11年（1799）以前の絵図であると推定できる。

表2に、明治6年上波多村戸長らが願出の若澤寺処分願に記載されている構築物の大きさと造りを示し、水沢山若澤寺の現存する3つの絵図についての詳細な比較を示した。

●主な絵図上の違いを以下に示した。
（※「若澤寺一山之略絵図」については「善光寺道名所図会」とほとんど違いが見られないため、主に「信濃奇勝録」との比較とした。）

1．最上段へ上る登り階段…❶
「信濃奇勝録」は西向きに登るが、「善光寺道名所図会」、「若澤寺一山之略絵図」は南向きに上るように変更されている。

2．アカノ井…❷
「信濃奇勝録」は西側壁沿いに建物があるが、「善光寺道名所図会」、「若澤寺一山之略絵図」は南側壁沿いに変更されている。

3．中堂…❸
「信濃奇勝録」には中堂には廻縁なし、「善光寺道名所図会」、「若澤寺一山之略絵図」では、四方廻縁が増設されている。

4．中堂前の石灯籠…❹
「信濃奇勝録」には見られないが、「善光寺道名所図会」、「若澤寺一山之略絵図」には一対の石灯籠が見られる。

5．鐘楼…❺
「信濃奇勝録」は屋根峰が東西であるが、「善光寺道名所図会」、「若澤寺一山之略絵図」では屋根峰が南北となっており、位置も変っている。

6．稲荷…❻
「信濃奇勝録」には描かれておらず、「善光寺道名所図会」、「若澤寺一山之略絵図」では表示されている。
〔若澤寺へ京都愛染寺より稲荷大明神安置の証明書：寛政11年（1799）〕

7．護摩堂…❼
「信濃奇勝録」では講堂となっているが、「善光寺道名所図会」、「若澤寺一山之略絵図」では護摩堂となっており、大きな建物に建て替えられた様子がうかがえる。

8．講堂、護摩堂横の玄関…❽
「信濃奇勝録」では粗末な玄関であるが、「善光寺道名所図会」、「若澤寺一山之略絵図」では、立派な玄関に変っている。現存している松本市今井の正覚院玄関を偲ばせる形になっている。

9．庫裏、方丈…❾
「信濃奇勝録」では庫裏となっているが、「善光寺道名所図会」、「若澤寺一山之略絵図」では、方丈となっており立派に建て替えられた様子がうかがえる。

10．物置、蔵…❿
「信濃奇勝録」では一棟の建物が見られるが、「善光寺道名所図会」、「若澤寺一山之略絵図」では複数の建物が描かれており増築された様子がうかがえる。

表1　若澤寺絵図が作成された経緯

	信濃奇勝録	善光寺道名所図会	若澤寺一山之略絵図
著者	井出道貞 臼田の神官 【天保13年（1842）86歳で没】	豊田利忠　別名（庸園） 尾張今尾藩竹腰氏（尾張藩付筆頭家老）の家臣で、京都の朝廷に仕える大和絵の名門土佐派の門人	
刊行	天保5年（1834）成稿したが刊行にいたらず。後に孫の通が引き継ぎ明治20年（1887）木版本として刊行	天保14年（1843）ころ完成 嘉永２年（1849） 名古屋の書肆美濃屋伊六	
挿絵	不　明	豊田利忠が下絵及び挿絵を描く。但し老齢の為、小田切忠近こと「春江」に、挿絵108点のうち32点を清画させ、挿絵の中に「春江補畫」とある。若澤寺の絵図は春江補畫である	
彫刻	東京の彫工　大沢鉞三郎 明治20年出版 版木　22.7×44×2.5t　桜材	名古屋　中村屋治助	京都御池室町住 彫刻人　丹波屋伊祐彫
作成時期	10数年の年月、足を運び実施の見分をした 【1.絵図に稲荷社が描かれていない。寛政11年（1799）京都愛染寺より稲荷大明神安置の証明書あり】 【2.没年より推定して、体力的に40歳前後に取材したとすると、1800年以前の絵図と思われる】	小田切忠近の跋文と自序によると、豊田利忠が構想を思い立ったのは、天保元年～2年（1830～31）で天保3年（1832）ころ取材旅行をしている	江戸時代末ころ

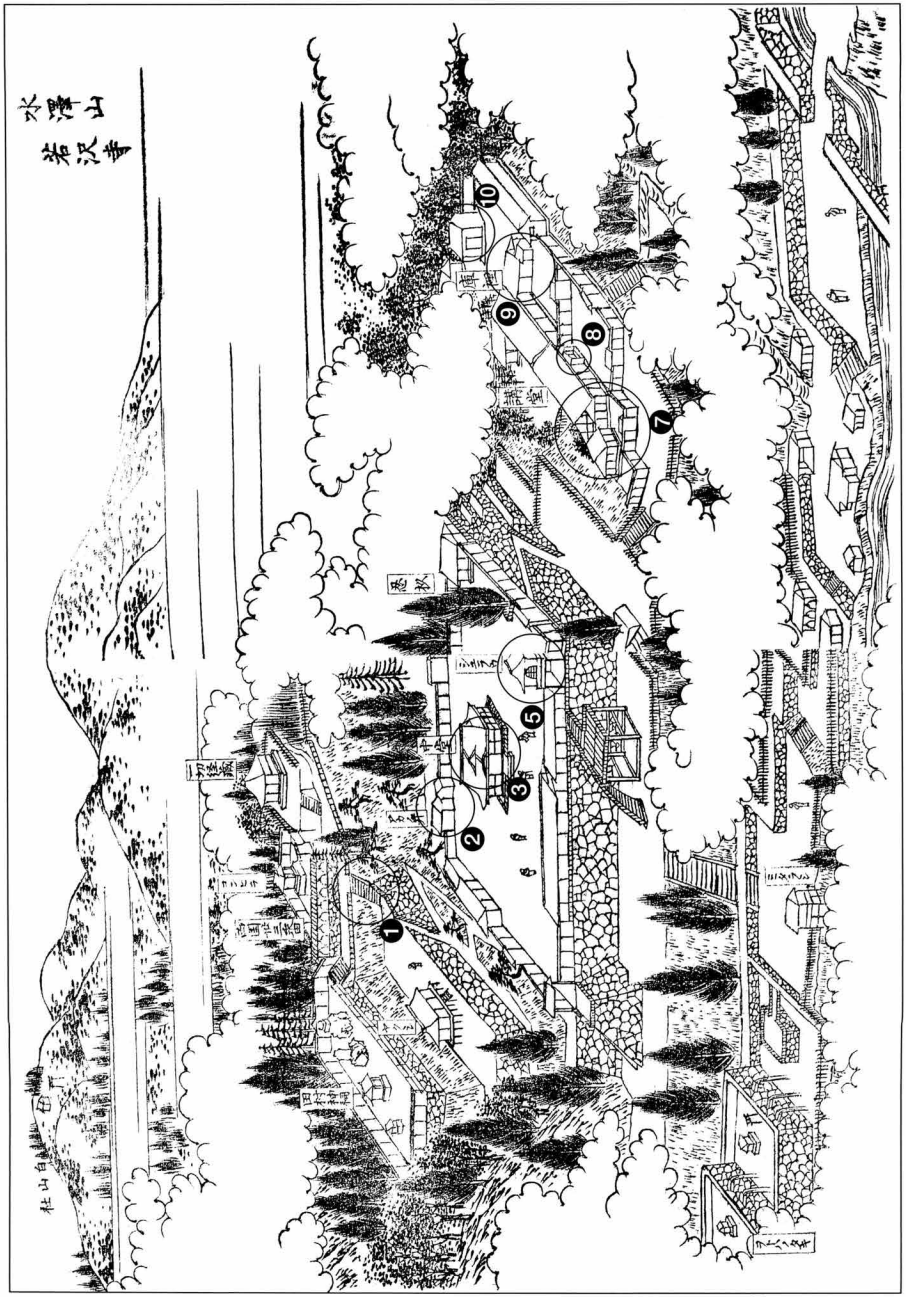
表２　水沢山若澤寺絵図詳細比較

（間口・奥行は明治６年、上波多村戸長ら願出の若澤寺処分願
（　）内は嘉永５年（1852）の水沢真直氏文書の記載
＊：長野県文化財保護協会理事　宮島佳敬氏調査資料引用）

段	名称＊	別称＊	間口・奥行＊	造り・特徴等＊	信濃奇勝録	善光寺道名所図会	若澤寺一山之略絵図
最上段	熊野三社	（三所権現）	3尺×3尺	木祠、妻入	建物有	建物有 「熊野三社」の表示有	建物有 「クマノ三社」の表示有
	田村堂	（厨子）	1間×1間	一重入母屋造、柿葺	建物有 「田村神祠」の表示有	建物有 「田村堂」の表示有	建物有 「田村将軍」の表示有
	造塔供養碑	（経文石）	高さ　幅 120×132cm	文化5年（1808）夏宝篋印塔をたてた供養碑	碑有	碑有	碑有
	宝篋印塔	（宝篋印陀羅尼経塔）			塔有	塔有 「宝篋印塔」の表示有	塔有 「宝篋印塔」の表示有
	西国三十三番札所観音	（札所観音）	高さ　幅 65～80cm	石仏、33体 彫が深い	建物有 「西国卅三番」の表示有	建物有 「三十三所」の表示有	建物有 「西国卅三所観音」の表示有
	金毘羅堂	（コンピラ）	1間×1間	入母屋造、妻入	建物有 「コンヒラ」の表示有	建物有 「コンヒラ」の表示有	建物有 「金ヒラ」の表示有
	一切経堂		2間×2間	宝形造	建物有 「一切経蔵」の表示有	建物有 「一切経蔵」の表示有	建物有 「一切経蔵」の表示有
最上段へ上がる登り階段					東西に登る	南北に登る	南北に登る
金堂へあがる道					坂道	石段に変更か?	一構造
上段	金堂（薬師堂）		3間×2間半	入母屋造、柿葺、平入、三方縁付		建物有 「金堂」の表示有	建物有 「金堂」の表示有
		（薬師堂か）	3間×3間	（薬師堂は2間×9尺とある）明治6年	建物有 「ヤクシ」の表示有		

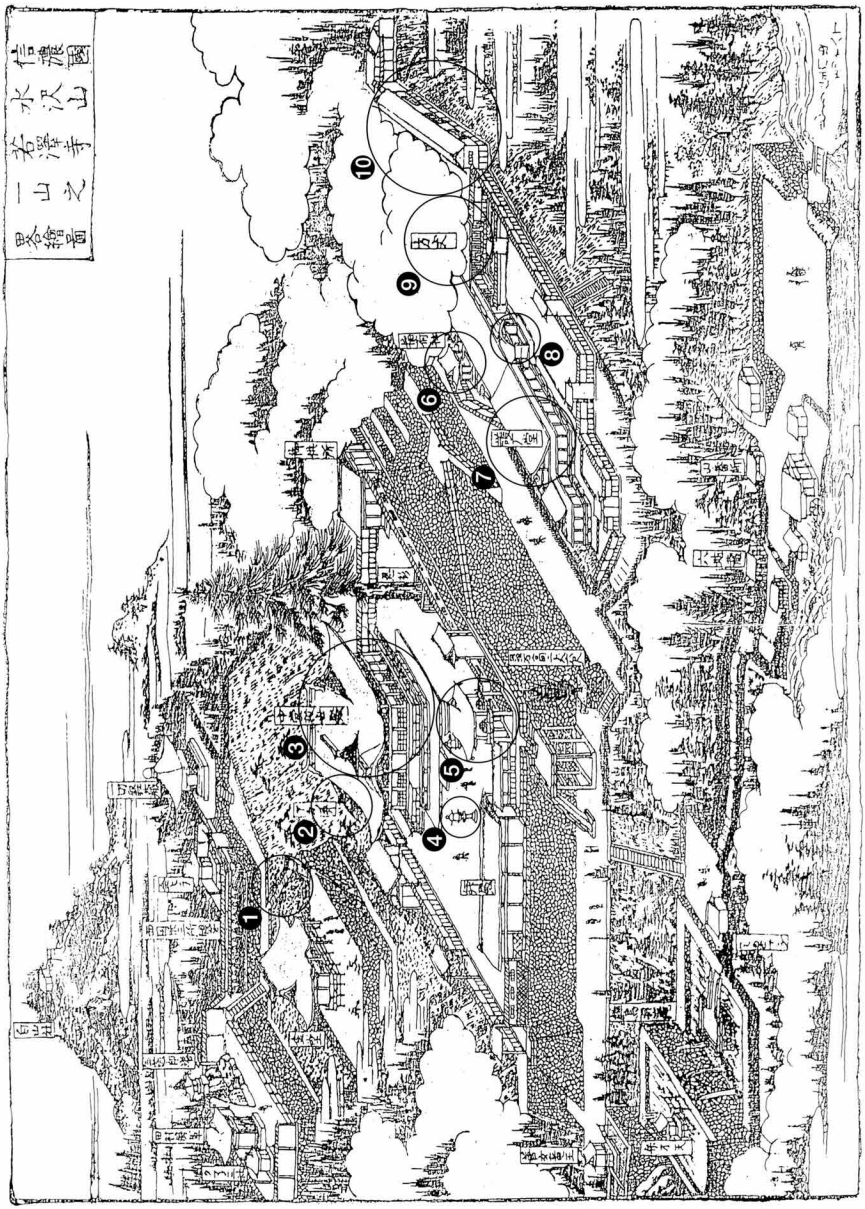
段	名称＊	別称＊	間口・奥行＊	造り・特徴等＊	信濃奇勝録	善光寺道名所図会	若澤寺一山之略絵図
中段	観音堂 （堂）		5間×5間 （7間半×6間）	入母屋造、柿葺。平入、 千鳥破風 唐破風付、四方廻縁	建物有 「中堂」の表示有	建物有 「中堂」の表示有 四方廻縁が増設か?	建物有 「中堂救世殿」の表示有 四方廻縁有
	拝殿		7間×2間半	切妻造、吹放ち	建物有	建物有 「拝殿」の表示有	建物有 「拝殿」の表示有
	鐘楼			桜門式	建物有 「シユラウ」の表示有 屋根峰東西	建物有 「鐘楼」の表示有 屋根峰南北	建物有 屋根峰南北
	御供所		2間×2間1尺		建物有	建物有 「御供所」の表示有	建物有 「御供所」の表示有
	アカノ井			井戸、切妻造の覆屋	建物有 「アカノ井」の表示有 西側塀沿いに建物有	建物有 「アカノ井」の表示有 南側塀沿いに建物有	建物有 「アカノ井」の表示有 南側塀沿いに建物有
	登り櫓		2間×1間	櫓舞台風で階段を登り、 鐘楼前へ登る	建物有	建物有	建物有
	石垣		高さ2丈6尺	2丈6尺＝約7.8m 中ノ段の2方を積む	石垣有	石垣有 「畳石高二丈六尺」 の表示有	石垣有 「畳石高二丈六尺」 の表示有
	忍杉			中堂の脇に立つ巨大杉	大木有 「忍杉」の表示有	大木有 「忍杉」の表示有	大木有 「忍杉」の表示有
	灯籠			中堂前に2基	なし	中堂前に2基有	中堂前に2基有
下段	稲荷社	（講堂）	2間×1間	入母屋造 （庫裏の裏にある）妻入	建物、表示なし	建物有 「イナリ」の表示有	建物有 「稲荷社」の表示有

下段	護摩堂		8間×7間 (10間×8間)	切妻造　不動明王を安置し、護摩供養か	建物有 「講堂」の表示有	建物有 「ゴマ堂」の表示有	建物有 「護摩堂」の表示有
	庫裏 方丈		8間×7間 (12間×7間)	唐破風付玄関、切妻造、平入	建物有 「庫裡」の表示有	なし	なし
		(客殿)	6間×9尺	入母屋造、平入	なし	建物有 「方丈」の表示有	建物有 「方丈」の表示有
	長屋		9間×4間 (9間×2間)	切妻造、平入 三つに仕切られている	建物有	建物有	建物有
	勝手		10間×3間	(場所不明)			
	蔵	3棟 板蔵	3間半×3間	下ノ段の一番奥に並ぶ	建物有 雲に隠れ建物数不明	建物3棟有	建物有 雲に隠れ建物数不明
		3棟 土蔵	3間半×2間				
		3棟 土蔵	2間1尺×2間				
	歴代住職墓碑		高さ 48～156cm	五輪塔:2、無逢塔:3、塔婆:6、宝篋印塔:3			
最下段	下の平場	宿坊跡か					
水沢の谷	善女竜王社		石垣残る	木祠、鳥居	建物有	建物有 「善女竜王」の表示有	建物有 「善女竜王」の表示有
	弁天社		石垣残る	木祠、鳥居、池の中	建物有	建物有 「弁天」の表示有	建物有 「弁天」の表示有
	雄鳥羽ノ滝		石垣残る	三本の滝、池の中に滝見舞台を設ける	「ヲトハノタキ」の表示有 位置は他の図と異なる	「雄鳥羽滝」の表示有	「雄鳥羽滝」の表示有
	竜神石	(水神)		石柱に竜がからみつく像			
	水手洗			水沢の川沿い、切妻造	建物有。「ミタラシ」の表示有	建物有。「ミタラシ」の表示有	建物有。「ミタラシ」の表示有
	道供養碑		高さ 145cm	「長禄2年(1458)平朝臣六翁」銘阿弥陀三尊の梵字			
	六地蔵		高さ 110cm	覆屋付、現在一部は観音堂跡に	建物有	建物有	建物有。「六地蔵」の表示有
	山番所	(山番小屋)	3間×9尺	切妻造	建物有	建物有	建物有。「山番所」の表示有
	(茶屋)			参道、川端に3軒並ぶ	参道、川端に3軒並ぶ	参道、川端に3軒並ぶ	参道、川端に3軒並ぶ
						「是ヨリ二王門まで十八丁」の表示有	「是より仁王門迄下り十八丁」の表示有



絵図　「信濃奇勝録」

絵図　「善光寺道名所図会」



絵図　「若澤寺一山之略絵図」

コラム①　旧若澤寺参道にて「第十一丁目」の印刻が有る台石発見

平成16年12月10日、波田町教育委員会と文化財保護委員、歴史愛好者によって、水沢川沿いの旧若澤寺参道で、遺物調査を行った。

かねてより、林道を造るとき、旧参道沿いにあった石造物などの遺物を、川の中に投げ込んだり、埋め込んだと言われていたためである。

水沢の谷下の道端に建つ第十丁目の丁石附近から、十三丁目の丁石が建つ桂山神社附近まで、石が露出している、川の中を中心に調査を行った。第十丁目よりさかのぼること約200m位の所に、黒っぽい川原石の中に、直径約15cm位頭を出した白っぽい石が、水に洗われているのを発見、周りの土砂を取り除くにしたがい、段々と人工的に作られたと思われる円柱状の石が現れた。

掘り起こして、調べてみると、側面に、第十一丁目の印刻がしてあり、周りには第十一丁目の文字を中心にして、左右２個ずつ蓮華と思われる、彫り込みが有った。

御影石製で、地元産の御影石とは違い、伊那から木曽方面で産出する石と推定された。寸法は上部直径40cm、下部直径30cm、高さ19cmで、重量50kgであった。製作年などを示す表示はない。

この石は、寛永13年（1635）若澤寺参道に建てられた、第十一丁目丁石の脇に置かれた、石造仏を安置する台石（台座）と考えられ、今回の調査の一大発見となった。

台　石

拓　本

若澤寺に見られる様々な信仰

—とくに清水寺信仰と田村麻呂伝承の背景をめぐって—

牛山　佳幸

はじめに

小稿の課題は、波田町の山中に今なお壮大な寺跡を残している、若澤寺の性格と意義を明らかにしつつ、これを信濃国の歴史、さらには日本の宗教史全体の流れの中で考えてみようとすることである。しかし、何分にも関係する文献史料や考古学的な成果も限られたものしかない現状では、新たに明らかにしうる点は極めて少なく、依然として「謎の寺」であるとの感を拭えない。そもそも、若澤寺の寺号が史料上に現れるのは15世紀前半の永享11年（1439）であり、かつ明治の廃仏棄釈で撤去されるまで存在した伽藍が最終的に整備されたのは、近世に入ってからであることが、問題をさらに複雑にしている。すなわち、当寺の起源は背後の山の中腹にある通称「元寺場」地籍に建立された、古代のいわゆる「山寺」にあることはほぼ疑いないところだが、伽藍が里に下りた時期や、その時点で伽藍が造営された場所が近世の若澤寺の寺地と同じであったかどうか、といった点は必ずしもはっきりせず、加えて、中世後半の戦乱期の変遷がほとんど不明であることである。こうした点を解明するには、今後とも、文献史料以外の様々な資料、例えば遺物・遺構はもちろん、地名や周囲の地形や環境なども踏まえた上での、総合的な見地から再検討する必要があるだろう。小稿では、そうした今後の研究のあり方に向けて、一つの素材を提供するという意味で、若澤寺がその長い歴史の過程で外部から受けた影響という点に着目しつつ、現時点で私の考えていることや、気づいた点などを述べてみたい。

①白山信仰と熊野信仰

旧地の元寺場を含めて、若澤寺は長い間に外部からの様々な宗教的影響を受けていた形跡がある。より具体的に言えば、過去において各地から様々な信仰が流入していたということである。歴史の古い寺院はどこも同様であったと言えようが、とりわけ若澤寺にはそのことをうかがわせる要素が多くみられる。元寺場が「白山」という山の中腹に位置しており、近世の絵図によ

れば、その地に白山社が鎮座していたこと、さらに当時の境内には、熊野三社、稲荷社、金比羅社、弁天社などの鎮守社が存在していたことなどがそれである。すなわち、これらは、ある時期に白山信仰、熊野信仰、稲荷信仰、金比羅信仰といったものが当寺にもたらされたことを物語っている。むろん、『信濃奇勝録』や『善光寺道名勝図会』所載の絵図等に描かれた当寺の寺観が、最終的に整備されたのは江戸時代後半とみられるのだが、以上に挙げた境内社はその頃に初めて建立されたのではなく、各々の信仰自体はそれ以前にすでに流入していたとみてさしつかえない。たとえば、稲荷社については寛政11年（1799）に、京都の伏見稲荷大社の別当愛染寺（現在は廃寺）から稲荷大明神安鎮の証書を得たとされている点から、その勧請年次が判明する。しかし、白山信仰や熊野信仰などについては直接的な史料がないため、他の事例と比較しながらおおよその時代を検討する必要があるだろう。

白山は加賀・越前・美濃の３国に堺を接する霊山で、３ケ国の各々の登山口（馬場）に成立した寺院は、いずれも平安後期頃には比叡山延暦寺の末寺化し、周辺に大きな勢力を有する天台宗寺院に成長していた。ここから、次第に各地に白山信仰が流布していくのだが、信濃国に入ってきた時期は鎌倉末期以降ではないかとみられる。すなわち、長野県内には現在、合殿の例も含めると50社ほどの白山神社が現存しているが、その中で成立が最も古いのは木曽郡大桑村大字殿に鎮座する白山神社で、現社殿は棟札銘によると元弘４年（1334）の建造であることがわかる。ただ、神社の社号は長い間に様々な影響で変化することが多く、当社も前記の棟札銘には当時の神名が記されていないから、この時点で白山信仰の影響を受けていたかどうかは実は確証がないのだが、これに次ぐ飯山市桑名川の白山神社の本殿棟札銘には、応永32年（1425）に「白山大権現」の社殿を建立した旨が明記されているから、室町時代頃には確実に信濃にも流入していたことがうかがえるのである。信濃で白山信仰の影響を顕著に受けたことが知られる山は、小県郡の

白山社の石祠

四阿山（現真田町）と伊那郡の風越山（現飯田市）で、いずれも近世までは白山とよばれ、麓には白山神社とともに別当寺の白山寺が明治維新の神仏分離まで存在した。とくに前者は、古代には山家神社と呼ばれていた神社が、白山菊理姫を祭る白山大権現に変えられたものである。若澤寺の旧地とみられる元寺場遺跡の場合も、ここから平安期の遺物が出土している点から、その頃には寺院ができていたことは疑いないが、当地が白山信仰の影響を受けて、「白山」と呼ばれるようになったのは中世以降に下るのではないかと推測されるのである。ちなみに、長野県内に残る古い白山社は、木曽谷や南信に多く分布しており、この例だけからすると距離的には美濃からの影響が強かったことが察せられるが、当地が飛騨を経て北陸へ通じる交通路に位置していた点からすると、加賀ルートからの流入も想定されよう。

熊野信仰は紀伊国の本宮・新宮・那智からなる、いわゆる熊野三山への信仰であるが、信濃国との関係は白山信仰よりも若干早く史料上に現れる。平安末期に安曇郡仁科御厨（にしなのみくりや）の領主、仁科盛遠が熊野参詣に赴いたことがそれで、大町市に鎮座する若一王子（にゃくいちおうじ）神社はその社号から、明らかに仁科氏の熊野信仰による勧請とみられるものである。鎌倉時代に入ると、建治元年（1275）に高井郡の井上氏の女性が新宮に法華経を埋納したり、上野との国境に位置する碓井峠の熊野神社に正応5年（1292）に梵鐘が寄進された事実から、当時信濃国では主として在地領主層によって広範に受容されていたことがうかがわれる。その後も熊野信仰の流入は途絶えることがなく、室町時代には善光寺境内にも熊野三社が勧請されていた。当時は熊野比丘尼の唱導活動が顕著になっていた時期であり、同じ頃、筑摩郡牛伏寺（ごふくじ）の造営にも熊野比丘尼と見られる勧進聖が関わっていたことが知られるので、当地方にもそうした宗教者が活動していたことは確かである。若澤寺が里に下りたのが遅くとも長禄年間頃までとすれば、当寺内への勧請も、熊野を拠点にして唱導や勧請に携わった比丘尼や修験者の関与が想定されるのである。

参道に残る町石（ちょういし）も外部からの影響とみてよい。町石は一丁ごとに置いた目的地までの距離を示す標識で、当寺の場合、仁王門から伽藍までの里程から18基設置されていたと推定されているが、現存するのは9基で、銘文によれば、いずれも寛永12年（1635）に近隣の有力百姓らの寄進により建立されたものである。町石の事例を全国的にみると、最古の遺例は摂津勝尾寺（かつおじ）（大阪府箕面市）の旧参道に残された五輪塔形式のもので、これは鎌倉中期の造立

だが、最も有名な遺品としては鎌倉後期に完成した紀伊高野山の表参道と山上に残るものがある。また、熊野三山の参詣路に祀られた王子社も、町石と同じ目的で設けられたものであった。県内ではかつて戸隠の参道に王子社が勧請されていたことが知られるものの、町石が存在した例は他に確認されておらず、若澤寺の例は全国的にも残存例が少ない点からして極めて重要な遺品である。最初の造立は江戸時代以前に遡りうる可能性もあり、若澤寺がある時期から真言系に属していたことから、直接的には高野山の影響によるところが大きいとみてよいだろう。

こうした情報をもたらしたのは、むろん外部から往来した者とみられるが、当地には天正年間に少なくとも3人の六十六部が納経に訪れたことが、現在も残る供養塔によって判明することは、その点で注目に値しよう。すなわち、天正2年（1574）に来た越前出身の僧道春と同じく越前の「経聖」某、それと翌天正3年に来た紀伊出身の僧高円がそれである。当時、各地の霊場に「法華経」の写本を奉納するのを目的に、諸国を遍歴するこうした回国聖が多数存在していたことが、経塚遺跡に残された遺品等によって知られるが、彼らは単に自分の極楽往生を願うためだけではなく、人々を救済しようとする明確な使命感を持って活動していた。そのことは、上記の高円も、碑文には参道の普請をしたことを示唆する文言があるように、行く先々で善行を行っていたことからもうかがわれ、町石に関わる知識の伝来や造立に至るまでの経緯なども、各地の事情に詳しいこうした宗教者が媒介となっていたことが推察されるのである。

②清水寺信仰と田村麻呂伝承

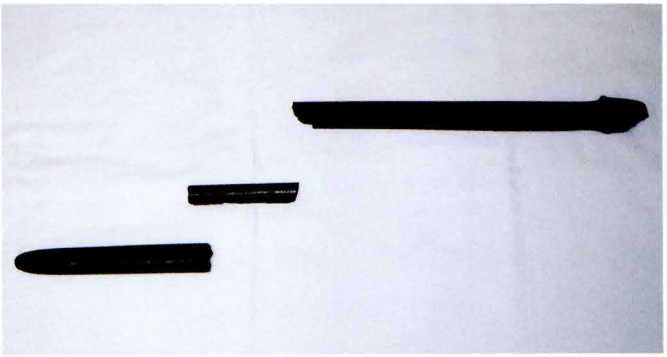
若澤寺について最も興味深いのは、京都の清水寺の影響を色濃く受けていたことがうかがわれる点である。第一には、旧若澤寺の中心伽藍であった中堂救世殿の本尊が清水寺の本尊と同じ千手観音像であったことだが、そもそも寺伝によれば、行基が創建した当寺を中興したのが、京都の清水寺を創建した坂上田村麻呂であったとされていることで、その年代も清水寺の草創年次と同じ大同年間（806～810）であるとの伝承を有していることである。そして、旧若澤寺の遺構のうち唯一、室町時代後期に遡りうる建造物である田村堂は、まさにその田村麻呂伝承の権化であるといってよい建物だが、それがかつて境内全体を見下ろす最上段の敷地に位置していた点である。むろん、

坂上田村麻呂坐像（田村堂安置）

これは当初、別の堂宇に安置されていた厨子と考えられるもので、田村堂と呼ばれるようになったのは、江戸時代に坂上田村麻呂の坐像を安置して独立した堂宇とされてからのようであるが、これが清水寺に現在もある田村堂（開山堂）と同じ名称を付けられたのは、その頃に至ってもなお、清水寺信仰や田村麻呂伝承が関係者の心の中で強く意識されていたことを反映するものとみてよいだろう。さらに、参道をはさんで中堂拝殿の向かい側に人工の滝と弁才天を祭った池が設けられていたが、それが「雄鳥羽滝（おとわのたき）」と名付けられていた事実である。この滝の名称については、従来さほど注目されてこなかったように思われるが、実はこれも清水寺の本堂舞台の脇に位置して、当寺を象徴する遺産の一つとなっている「音羽の滝」を真似たものとみてよい。このほか、坂道を登って境内に至るように敷設されている参道の構造なども含めると、「懸崖造（けんがいづく）りの舞台」の遺構こそ残されていないものの、かつては、全体として京都清水寺をモデルに造営されたのではないかと思わせるのに十分な雰囲気を有していたことがうかがえよう。清水寺は一般的には観音信仰の霊場として知られるが、若澤寺の場合は以上の事例が示すように、ある時期には、単なる観音信仰の寺というより、むしろ「清水寺信仰」の寺とでも言いうるような様相を呈していたことが想定されるのである。

それでは、このような特徴的な寺観を有していた背景にはいかなる事情があったのか。この点を考える際にヒントとなるのは、旧安曇・筑摩両郡に広範に残されている「坂上田村麻呂の八面大王退治」伝承であろう。八面大王とは中房山（有明山）の麓の岩屋に住んでいた、「魏石鬼（ぎしき）」とか「魔道王（まどうおう）」とも呼ばれた鬼で、悪事を働いて周辺の人々を困らせていたが、たまたま田村麻呂が蝦夷征討の途中に信濃を通過した際、退治されたというのがこの伝

承の骨子である。この時に、鬼の剣は3つに折れ、柄の部分は五竜山（穂高町有明）に沈み、中央部分は満願寺（穂高町西穂高）に、そして鋒の部分は若澤寺に各々納められたというが、若澤寺に奉納された部分は後に焼失したとの後日譚がある（ただし、若澤寺の廃寺後に常泉寺に移された寺宝の中に、この伝承に因んだ3つに折れた石製の剣が残されている）。



「八面大王が所持していたとの伝承を有する剣」

以上の伝承は享保9年（1724）に成立した松本藩の地誌『信府統記』に詳しく記されているが、退治された鬼が葬られた場所とされる松本市の筑摩神社の縁起、『信州築魔八幡宮演儀』にも、すでにその祖型が含まれていることが最近の研究で明らかにされている（細川恒「『八面大王伝説』の新文献」『信濃』第51巻1号）。同書には成立年次が明記されていないが、冒頭部分に「大日本国中山道信濃国十二郡」と記されている点が一つの手掛かりとなろう。すなわち、中山道は江戸幕府成立後に整備された五街道の一つであるから、この縁起が最終的に文章化されたのは近世に入ってからとみられるのだが、本来十郡であったはずの信濃国が「十二郡」からなると意識されていたのは、木曽谷を二郡（信濃国分と美濃国分）と数えた戦国期特有の理解に基づくものであり、この縁起の原型ができたのは戦国期であったことを示唆している。したがって、上記の伝承もこの頃までには流布していたことが推定されるのである。

歴史上の人物である坂上田村麻呂（758～811）が蝦夷地平定の任務を帯びて現地に赴いたのは、征東副使として下向した延暦12年（793）、および征夷大将軍として現地経営に当たった延暦16年（797）以降の数年間だが、この往復の行程には東山道を経由したことが推定されており、したがって信濃国を通過した可能性は高い。しかし、長野県内の旧仏教系の寺院に多く残る田村麻呂が創建したとの寺伝は、いずれも後世の付会に過ぎず、ましてや上記のような伝承は到底信じがたいものである。しかし、そうした荒唐無稽な話

がある時期に、ある目的で創作され、広められたことだけは紛れもない事実なのである。

鬼の伝承は我が国ではけっして珍しいものではなく、長野県内でも「鬼女紅葉」を始め各地に残されているが、「八面大王」と名付けられた鬼伝承は、有明山の信仰圏で生まれた安曇・筑摩地方固有のものと考えられている。一方、京都の清水寺や坂上田村麻呂と当地域の関係についてみると、室町時代にできた『清水寺縁起』には承平7年（937）に清水寺の僧慶兼が修行の為に信濃に赴く際に、御坂峠で大蛇に食われそうになったという逸話が見えるし、『仁和寺日次記』には、承久元年（1219）には信濃の或る入道が清水寺で百ケ日間の参籠を遂げたといった話が載せられているから、信濃国が古くから清水寺と関わりを持っていたことは確かだろうが、これらの話が仮に史実だとしても、そのことが直ちに安曇・筑摩地方の「田村麻呂の八面大王退治」伝承の成立につながったとは思われない。

それでは、坂上田村麻呂が当地のオリジナルな八面大王伝承と結び付けられた背景は何かと言えば、これまでも指摘されているように、鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』に所見される記事の影響によるものと考えられる。すなわち、同書には源頼朝が平泉の奥州藤原氏を討伐しての帰途、悪路王（あくろおう）という鬼が要塞を構えたという「田（達）谷窟（たっこくのいわや）」を訪ねたことが記されている。これは田村麻呂が蝦夷最大の族長「阿弖流為（あてるい）」を降伏させたという史実がもとになってできた伝承とみられ、当時すでに成立していたこの伝説をヒントに、悪路王が当地に伝承されていた八面大王に置き換えられたとするのが通説である。ただ、『吾妻鏡』の記事が多くの人々の目に触れるようになるのは、同書が近世になって刊行されて以後のことであり、まだ限られた写本しか存在しなかった時代に、それを典拠とするこうした新たな説話が地方で成立したことは一般的には考えにくいのだが、実は田村麻呂の鬼退治譚は、後に『吾妻鏡』の記事を基にしてできた様々な文芸作品に登場しており、それらが媒介となって、地方にもこれに類似した伝承が流布したことが容易に推察されるのである。

そうした文芸作品の代表的なものは謡曲である。坂上田村麻呂をシテとする謡曲はいくつかあるが、最もよく知られ、かつ成立も古いのは二番目物の「田村」で、この内容は以下の通りである。東国から旅の僧（シテ）が清水寺にやって来る。そこで、一人の花守の童子（前シテ）が清水寺の縁起を語り聞かせ、やがて、童子の姿は田村堂の中に消えていく。後半は坂上田村麻

呂（後シテ）が雄姿を見せ、伊勢の鈴鹿山での鬼神退治の有様が勇壮に示されるが、それとともに、千手観音がその手に大慈の弓を持ち智恵の矢を放つことで、田村麻呂の勝利には仏法の加護があったとするのがモチーフとなっている。田村麻呂が退治したのは、ここでは「伊勢鈴鹿山の鬼神」という設定になっているものの、上記の『吾妻鏡』の記事がこの謡曲の題材となっていることは疑いない。そこで、問題はこの鬼神が八面大王に置き換えられた時期はいつか、そしてその背景はいったい何かということになるが、この点については最近、江戸時代に寺子屋で謡曲が教科書として使用されるようになってから、この作品の内容が庶民レベルにも受容され、現地の八面大王伝承と結びつけられて新たな伝説が作られたのではないかという説が提起されている（郷道哲章「田村麻呂・田村丸・田村利仁」『信濃』第53巻12号）。

この指摘の背景には、そもそも能楽が中世後半に将軍家や守護大名・戦国大名などの支配者層の愛好物として発展したという経緯があり、当時、とりわけ地方の一般民衆の前では演能されていたとは思われないことから、中世以前にはこれが伝承の形成に直接の影響を与えたとは考えがたいといった理解があるようである。しかし、上記の田村麻呂の鬼退治の伝承を取り入れた文芸作品は、謡曲以外にもお伽草子の「田村の草子」（「鈴鹿」とも）、奥浄瑠璃の「田村三代記」など枚挙に遑がなく、遍歴する宗教者やとくに田村語りと呼ばれた芸能者たちによって、中世末期にはその話の内容が在地レベルにも受容されていたことが推定されるし、さらに、上記の「坂上田村麻呂の八面大王退治」説話の創作者が、能を受容した支配者層に属する人々であったとすれば、必ずしもその成立を近世まで引き下げて考える必要はなかろう。現に「坂上田村麻呂の八面大王退治」伝承は、その初出文献である『信州築魔（たくま）八幡宮演義』の検討から、前述のように戦国期頃には流布していたとみられるのである。

そこで、注目されるのは、戦国時代に甲斐から信濃に侵入して当地域を支配した武田氏が、京都の清水寺観音を熱烈に信奉しており、一種の師檀関係を結んでいた事実が知られることである。武田信玄が筑摩・安曇両郡の支配を実現したのは、林城を拠点としていた小笠原氏を駆逐し、新たに深志城を修築した天文19年（1550）以後のことであるが、信玄はそれ以前の信濃計略を企図していた段階から、自らを清水寺観音の脇侍で田村麻呂を助けたと伝承されている北方の守護神、毘沙門天の再来であると自負していたとされて

いる。実際に、京都の清水寺との密接な関係を具体的に物語るのは、その本坊成就院（じょうじゅいん）に所蔵される次のような信玄の書状である。原文は漢文だが、書下し文で引用しておこう。

信州に至りては、出陣に就いてわざわざ使僧に預り、殊に精誠を抽んぜられ、観音の像一幅・巻数・五明・杉原送り賜はり、珍重に候。抑も去ぬる甲辰の年、寺務を奉る願書の趣、決（結）願せしむべく候。信国十二郡の内、今に一郡の分、指して擾う様に候条、平均の上において、進納せらるべく候。此の旨を以ていよいよ武運長久の祈念、御油断あるべからず候。よって、去ぬる秋の一戦の勝利は、偏に仏力の故に候か。これによって黄金十両納め奉る。委細は高白斎の所より申し越すべく候。恐々謹言。

十二月十八日　　晴信（花押）

清水寺

年次は記されていないが、文中に「去甲辰年（天文13年）」という文言がある点から、本文書は同13年（1544）以降のものと推定される。この内容は信濃に出陣中の信玄のもとに、清水寺成就院からの使僧が観音像・巻数（寺院が祈禱のために読誦した経典の名目を列挙して施主に送った文書）・五明（扇子）・杉原紙を土産として届けてきたことに対して礼を述べ、信濃十二郡のうちの残る一郡（水内郡を指す）の平定が成就した暁には、奉加金を進納する旨の約束をして、今後とも武運長久の祈禱を怠りなくするように依頼するとともに、昨年の戦いで勝利を得たことについては清水寺観音の仏力によるものであるから、とりあえず黄金十両を奉納する旨を伝えたものである。

宛て先に清水寺と記されるが、実際には成就院に宛てたものである。成就院は15世紀後半に清水寺に設けられたいわゆる本願所であるが、本願所とは堂塔の造営・修繕とそのための奉加活動を任務とした寺内寺院を意味し、その起源は信濃善光寺の大本願や大勧進の場合と全く同様である。成就院は後には次第に清水寺全体の管理権を有する院坊に成長を遂げていくが、戦国時代には、戦乱で荒廃した伽藍を復興するために、各地の戦国大名や国人層に使僧を派遣して働きかけ、戦勝の祈願を請け負うとともに、武将らが所願通り勝利を納めた際には、その見返りとして奉加金の名目で造営費用の寄附を求めるという方法をとっていた。成就院に残された文書によれば、越前の朝倉氏が代々、成就院の最大の外護者であったことが知られるが、この他にそ

の要請に応じた有力大名としては、駿河の今川氏真、近江の六角義治、安芸の毛利輝元などがいた。武田氏の場合は、信玄のみでなく、その嫡男義信も同様に成就院に黄金一両を届けていたことが知られるから、東国では清水寺にとって最も強力な檀那であったことがうかがわれる。

こうした武田氏の清水寺信仰と信濃の関係を示すもう1通の文書が、上高井郡山ノ内町渋の温泉寺に所蔵されている。やはり書下し文で引用しておこう。

追って、立願の旨あり、黄金三両別して奉納せしめ候。

恒例の如く使僧に預り候。殊に本尊像・巻数・扇子・杉原等并びに綾一端送り給はり候。祝着に候。よって今度、越後衆信州に至って出張候のところ、乗り向ひ一戦を遂げ勝利を得、敵三千餘人討ち捕り候。誠に衆怨悉く退散眼前に候か。よって当年伊奈郡面木郷を寄附し奉る。御入部珎重に候。この外萬疋の地、只今渡し進むべく候と雖も、今に市川・野尻両城に残黨楯籠る様に候。定めて雪消ゆれば、退散致すべく候か。その砌名所を書き立て、わざわざ進め入るべく候。恐々謹言。

十月晦日　　信玄（花押）

成就院

これは永禄4年（1561）に比定されている文書で、北信の温泉寺に伝来した理由ははっきりしないが、宛て先に明記されているように、前者と同じ清水寺の成就院に差し出されたものである。文面に見える戦いは、前月の9月に行われた上杉謙信との4回目の対陣のことで、いわゆる川中島合戦のうちでも最大の激戦となり、弟信繁を戦死させるなど苦戦を強いられたものであったが、敵3千人を討ち取ったと豪語しつつ勝利宣言をしている。そして、この戦いに際しても成就院は使僧を遣わして、先と同様の観音像を始めとする贈り物を届けていたことが知られ、信玄はこの勝利の報謝として、伊那郡の面木郷を清水寺領として寄進する旨が述べられている。面木は表木とも表記され、現在の伊那市西春近に含まれる地であった。そして、水内郡内の城には上杉方の残党がいまだ立て籠もっているので、それを一掃してからとの含みを持たせつつも、今後の勝利いかんによっては、さらに万疋の地を寄進することも吝かではないとの意向を伝えている。

以上に掲げた2通の文書は、武田信玄が信濃制圧の野望を遂げようとしていた過程で、京都清水寺の存在が、その精神的支柱としていかに大きなものであったかをうかがわせるものである。その一方で、信玄は信濃を手中に収

めると、それまで敵方の外護を受けていたはずの領内の寺社も、積極的に保護する政策を推し進めた。前述した「坂上田村麻呂の八面大王退治」伝承を含む縁起を伝えていた筑摩神社（当時は筑摩八幡宮）の場合、かつて小笠原氏の信仰の篤かった神社だが、天文24年（1555）には早くも信玄によって、その社僧（安養寺）の別当職が安堵され、社人たちが武田氏の支配に屈したことが知られることは誠に象徴的と言うべきだろう。

若澤寺もそうした例外でなかったことは、天正５年（1577）２月３日付けの武田勝頼印判状案によって明らかである。これは当寺に10ケ所、都合11貫150文の所領を安堵したものだが、注目されるのは、その内容に「観音堂並びに寺中造営」を疎略なく勤仕し、「御当家御武運長久の丹祈精誠」を凝らすことを命じた文言が記されている点である。この安堵状が出されたのは、信玄が死去して４年後のことで、その死を公表せざるを得なくなった嗣子、勝頼があらためて領内寺社に対して、従来通りの所領を知行することを再確認したものであるから、当寺もすでに信玄の代から、武田氏の祈禱所として重要な役割を果していたことがうかがえよう。そして、この中で「観音堂」を中心とした伽藍の造営が督励されていることは、京都清水寺を模した造営プランが武田氏の意向に沿ったもので、その工事が天正５年当時は、まだ続けられていたことを示唆している。若澤寺は近世に入って度々火災に遭うなどして、大幅に寺観が改修されてしまっており、幕末の絵図に描かれている観音堂（中堂救世殿）も享和２年（1802）に再建されたもののようであるから、武田氏によって整備された若澤寺の全貌は、今日ほとんどうかがうことはできない。しかし、田村堂と通称される厨子は、おそらく、武田氏によって造営が進められた当時の伽藍に安置されていた遺構とみられるし、また、その「田村堂」の名称や「雄鳥羽滝」の存在は近世のものとはいえ、武田氏統治下の若澤寺の名残りを僅かに伝えているもののように思われるのである。

以上のように検討してくると、筑摩・安曇地方に残る「坂上田村麻呂の八面大王退治」伝承は、かねてより京都清水寺を信奉していた武田氏が、小笠原氏を中心とする在地武士を制圧して当地の支配者となった現実を、坂上田村麻呂がこの地方で悪行を行っていた八面大王なる鬼を滅ぼしたという説話と重ね合わせることで、自らの信濃支配の正当性を領内に示すために作らせたものであった可能性が高いのである。つまり、信玄は自らを坂上田村麻呂に見立てたわけであり、したがって、この伝承の創作には武田方の宗教者が

関与していたことはほぼ疑いなく、それが流布した背景には、領内の寺社再建に関わる勧進僧の活動や、成就院が派遣した使僧らによる布教・唱導があったことなども想定できるだろう。このような見方ができるとすれば、「坂上田村麻呂の八面大王退治」伝承が筑摩・安曇地方に広まる上での発信源となった寺社の一つが、まさに若澤寺であったことが推定されるのであり、当寺の歴史的意義は、こうした伝承を管理する上での拠点的な寺院であった点にも求められると言えるのである。

ちなみに、有名なお伽草子「物臭(ものぐさ)太郎」は、筑摩郡出身の怠け者が清水寺観音の縁日に美女に出会ったのを機に出世していく物語だが、この話の原型も、以上のような武田氏による筑摩・安曇両郡の支配と清水寺信仰の関係を背景にしてできたものと筆者は推定している。こうした点に関する詳しい検討は、東北信を含めた旧信濃国内のほぼ全域に残された田村麻呂伝承が、すべてかつての武田氏の信濃支配と関わり合うものかどうかといった点の検証と併せて、別の機会に譲りたいと思う。

コラム2

若澤寺の香炉鉢

波田町教育委員会

平成15年11月2日、中央公民館では波田町生涯学習フェスティバル（波田町文化祭）のフィナーレを飾るべく、若澤寺調査発掘報告会講演会が開催されていた。その際、聴講に訪れた穂高町在住の長岩陽子さんが、若澤寺で使用されたという香炉鉢を持参した。長岩さんは、若澤寺が廃仏毀釈にあった時の、住職の家系を継ぐ、水沢家の長女ふみ江さんの娘であり、昭和5年頃、ふみ江さんが長岩家へ嫁いだ際、水沢家に伝わる若澤寺の遺物として、数点受け継いだ中の一つが、この香炉鉢だと語った。今回、波田町で若澤寺の調査を行なっていることを聞き、町へ寄贈したいとのことだった。

若澤寺に関する遺物、資料が少ない中、このような日常的に使われた物は特にめずらしく、長岩さんへ感謝し、ありがたく寄贈をお受けし、公民館にて常設展示を行なっている。継続している若澤寺総合調査の、大きな成果の一つといえる。

香炉鉢

若澤寺構築物の現在の状況

教育委員会

若澤寺構築物の現在の状況

大きさは明治6年、上波多村戸長ら願出の若澤寺処分願より
【　】内は嘉永5年（1852）の水沢真直氏文書の記載

場所	名　称	大きさ	現在の保存場所
最上段	田村堂	1間×1間	国指定重要文化財 波田町上波田阿弥陀堂前覆屋内
	造塔供養碑	高さ×幅 120×132cm	若澤寺跡に残る
	宝篋印塔		塔は山形村穴観音に移管 若澤寺跡に台石のみ残る
	西国三十三番 札所観音	高さ×幅 65～80cm	波田町盛泉寺参道に移管
	一切経堂	2間×2間	山形村穴観音に移管
上段	金堂（薬師寺）	3間×2間半	松本市今井正覚院（3間×3間の記録もあり）
中段	観音堂	5間×5間 【7間半×6間】	波田町盛泉寺に移築後、改築
	鐘楼		梓川村恭倹寺に上半分移築 三郷村瑠璃光寺に下半分が移築
	石垣	高さ2丈6尺 【約7.8m】	若澤寺跡に残る
下段	庫裏玄関 （唐破風付玄関）	8間×7間 【12間×7間】	松本市今井正覚院
	欄間	9尺×3尺	松本市今井正覚院 （方丈又は玄関に有った物と思われる）
	歴代住職墓碑 五輪の塔:2、無逢塔:3 塔婆:6、宝篋印塔:3	48～156cm	若澤寺跡に残る
水沢の谷	善女竜王社		若澤寺跡に石垣残る
	弁天社		若澤寺跡に石垣残る
	雄鳥羽ノ滝		若澤寺跡に石垣残る
	竜神石	高さ100cm	
	参道供養碑	高さ145cm	若澤寺跡に残る 『長禄2年（1458）平朝臣六翁』銘
	六地蔵	高さ110cm	波田町盛泉寺に移す
場所不明	蓮花型天水鉢 【嘉六2年（1849）神林村出身の豪商白木屋野口庄三郎寄進】		波田町盛泉寺に移築 台座（?）若澤寺跡に残る

金　堂

庫裏玄関

鐘　楼

欄　間

元寺場遺跡出土　古瀬戸瓶子・四耳壷火葬骨の鑑定結果報告について

教育委員会

第１次若澤寺総合調査・元寺場遺跡調査（平成11～13年度実施）において、元寺場遺跡より出土した古瀬戸瓶子、四耳壷の壺内から、火葬骨が発見された。この火葬骨について、鑑定調査を実施した。調査結果については、平成13年度刊行の『元寺場遺跡調査報告書』へ諸事情により掲載できなかったが、今回、改めて茂原教授と調整の上、報告書に掲載することができた。

尚、火葬骨については、鑑定調査終了後、一部を資料として教育委員会に残し、大半については供養をした後に、元寺場遺跡の現地出土地点に埋葬した。

元寺場より発見された古瀬戸瓶子（左）四耳壷

壺内に入っていた火葬骨

● 鑑定遺物

元寺場遺跡より出土した古瀬戸四耳壷、瓶子内の火葬骨

● 鑑 定 人

京都大学霊長類研究所 系統発生分野 茂原信生教授

● 鑑定期間

平成13年１月24日～４月13日

● 鑑定結果

瓶子内から発見された火葬骨は、一般的な人骨の５分の１以下、四耳壷にいたっては、それ以下の量である。

したがって、現存する火葬骨が少量で、得られる情報も少なく、次の程度のことしか分からない結果となった。

①瓶子に入っていたものと、四耳壷に入っていたものは別人であると予測される。２固体である。

②全体的にきゃしゃで小さく、女性の可能性が高い。（瓶子）

③両方とも子どもではないが、若い人である。

④両方とも焼きかたにばらつきがある。

⑤両方とも大きな部分のものがない。特に、口の狭い瓶子に入れる関係があったのか。

鑑定する茂原教授

若澤寺年表

教育委員会

信州筑摩郡波田村水沢山若澤寺一山年表

年　号	時　代	西　暦	記　事
天平勝宝	奈　良	749	白山下大堂に行基菩薩自作の聖観音木像を安置 『水沢若澤寺不動院の記録（平林功氏所蔵文書）』
天平勝宝	奈　良	749	水沢山は天平勝宝年中行基菩薩の開基にして、金堂瑠璃殿正（聖）観音は行基の御作　『十辺舎一九水沢観音利益雑食橋由来』
延暦４年	奈　良	785	魏磯八面大王中房山の下にて近隣の美女を多く取りつかみ、愛し殺す。京都より坂上田村麿利仁将軍当国へ下着し給ひて、古厩に陣を張り、神力不思議の矢をいかけ、鬼神悪魔は死したる。八面の一子くらかけ山へかけ去りしゆえ、官軍上野を通り、水沢山に陣を張り、守り本尊を小枝にかけ祈願、無事鬼の頭を取り、御身は二度水沢に帰陣し給ひて、仮に一宇を建て給ひ、彼の観音を納め奉り、水沢山の峰　四方一円を寄付し給ひてぞ、上洛し給ひぬ　『筑摩安曇古城開基記』
奈良時代後期		750 ～793	銅造菩薩半伽像（若澤寺旧蔵）県宝　『盛泉寺所蔵』
大同１年	平　安	806	大堂より元水沢へ田村将軍御建立これ有り 『水沢根元承知（波多腰太郎氏所蔵文書）』
大同１年	平　安	806	（水沢へ）京都より別当職を下され、即（すなわち）西光寺と号せしとなり、即天台の碩学にして傳教大師の遣身なり 『筑摩安曇古城開基記』 （扨水沢西光寺は今の世にもあらば山里かけて千石の余もあるべき寺とかや、依って奥の院を若澤寺と称し、中院を西光寺と号し、里ノ房を栗田西光寺と号し）
大同１年	平　安	806	慈眼山若澤寺（智積院末寺ナリ、島立与上波田村にあり）当寺は大同元年田村丸建立ト云伝フ、昔ハ今ノ地ヨリ弐拾七八町程山奥ニアリ　『信府統記』
平安末期		1078～	水沢山「元寺場発掘調査」出土品 古銭（中国北宗年号）「元豊通報（1078）」「嘉裕元宝（1057）」「大観通宝（1107）」 平安末期の焼物：青磁椀、白磁椀、土師、須恵、灰柚、緑柚陶磁器、安養（房）？墨書文字の土師器も
鎌倉中期		1270～	「古瀬戸瓶子、四耳壷」水沢山元寺場にて発見 『波田町教育委員会所蔵』

年　号	時　代	西　暦	記　事
鎌倉後期		1300～	銅造伝薬師如来坐像御正体残闕　『盛泉寺所蔵…県宝』
鎌倉末期		1310～	水沢不動明王立造（青不動、火炎光背は江戸時代） 旧若澤寺什物　『盛泉寺所蔵』
元享２年	鎌　倉	1322	木造金剛力士像２躰（仁王尊）…体内銘大檀那源重久、仏師善光寺妙海 『上波田西光寺旧像、波田町教育委員会管理』県宝指定
永徳３年	南北朝	1383	「水沢は三ヶ寺ながら皆戸隠の支配なりけるが、ある時宗論のことありて天台、真言と別れたり委細は別記にあり」 『筑摩安曇古城開基記』
弘和・永徳	南北朝	1381 ～1384	本寺は若澤寺搭頭の寺なれど弘和・永徳の頃天台真言宗論にて七堂は別れ栗田西光寺末寺たりしかど　『西光寺絵図―阿弥陀堂蔵』
至徳４年	南北朝	1387	水沢一山の大檀那波田郡の源豊重と文阿源信盛の父子名で木像地蔵菩薩半跏像造立 寄進取り持ち檀那沙弥見阿　『現在牛伏寺所蔵』
南北朝 室町初期		1368 ～1408	水沢山元寺場発掘により洪武通宝（1368・明代）、永楽通宝（1408・明銭）出土 他に焼物灰柚、天目茶碗出土する　『波田町教育委員会所蔵』
南北朝		1368 ～1408	銅造善光寺三尊（如来）の脇持菩薩像作られる。 若澤寺旧什物　『盛泉寺所蔵』
元中１年	南北朝	1384	源豊重西光寺に地蔵堂建立…西光寺絵図の墨書 『阿弥陀堂所蔵』
室町初期		1394	若澤寺旧蔵　不動明王絵画、掛軸作成さる　『阿弥陀堂所蔵』
応永11年	室　町	1404	（西光寺地蔵堂源信盛が建立）　『阿弥陀堂所蔵　西光寺絵図』
永享11年 ３月晦日	室　町	1439	若澤寺へ大檀那信州波田郷　源信盛　梵鐘寄進 大願主金剛仏子覚音請眷阿闍梨　『安筑史料叢書』『波田町誌』
宝徳２年 ６月１日	室　町	1450	院主宥聖の為　讃岐守信兼　鰐口を施入『善光寺道名所図会』にのる 【註】元は西牧郷の廃寺の古器物を文禄３年（1594）細野氏が刻銘若澤寺に寄進した
長禄２年 ５月28日	室　町	1458	若澤寺参道に平朝臣六翁沙弥盛高　供養碑建立　『若澤寺跡入口』
長禄２年	室　町	1458	施主平朝臣六翁信濃國捧庄畑郷　慈眼山若澤寺へ鰐口奉納 『信濃史料第８巻』
長禄２年	室　町	1458	昔ハ今ノ地ヨリ二拾七八町程山奥ニ有リシガ、長禄二申戌年今ノ地ニ移セリ　『信府統記二十一』
寛正中	室　町	1460 ～1466	櫛木氏畑郷へ再興寺城を築き居館　平城東西50間・南北30間　土手一重から掘　『森井氏写之控＝百瀬武夫氏所蔵文書』
文正１年	室　町	1466	西光寺に阿弥陀堂建立　源政盛『西光寺絵図＝阿弥陀堂所蔵』

年　号	時　代	西　暦	記　事
室町中期		1443～	旧再興寺城跡の発掘調査により大和通宝(安南銭)と元豊通宝(北宗銭)出土
室町中期		1460～	若澤寺に真言祖師空海と興教大師の木像造立『盛泉寺境内水沢観音堂安置』
室町中期		1460～	田村堂（国指定重要文化財）この頃金色の厨子として建造される　『上波田阿弥陀堂境内』
応仁１年	室　町	1467	源長昭無量山再興寺を村上の通字にちなみ、義応山西光寺と改号。西光寺房は神事を兼ね、若澤寺別当で代々村上周防守と称す。周防山安養寺も村上の由縁なり。寛永持高は23石９斗２升７合有り　『百瀬光信氏文書』
応仁１年	室　町	1467	梓川寺は道祐五代目の道適和尚時代に中若手へ移す　『蒲生新栄氏所蔵写本』
文明３年	室　町	1471	蓮如上人の高弟加賀小松の人了珍坊越中より飛騨を越え信州三溝村に真宗の梓川寺を興す　『安養寺所蔵文書』
文明６年	室　町	1473	三溝安養寺に浄土真宗門主実如上人の花押の御文章所持『安養寺所蔵文書』
明応１年	室　町	1492	宗融和尚三溝村へ移り正覚寺を開く　『安養寺所蔵文書』
明応６年	室　町	1497	永忍（称）和尚三溝村に移り円明寺を開く　『安養寺所蔵文書』
明応７年２月	室　町	1498	百瀬助右衛門（乗貞阿闍梨不生位）西光寺住持が葬儀を行う『百瀬氏五百年の歩み』
永正17年	室　町	1520	西光寺墓地に波田源太左衛門信盛と櫛木家臣団の石塔『阿弥陀堂蔵西光寺絵図』
天正２年	安土桃山	1574	水沢赤坂神明前十王堂に石造閻魔王線彫碑建つ。　越前住経聖寄進『大庄屋大池八郎右衛門引継文書』現在阿弥陀堂境内に移す
天正２年	安土桃山	1574	御林中に越前住僧道春聖大乗妙典六十六部納経塚碑建立（淡路山伏塚）『大池文書』　現在上波田観音石広場に移す
天正３年	安土桃山	1575	紀州の高圓馬橋に供養碑を建立する『大池文書』　現在上波田仁王門前に移す
天正５年	安土桃山	1577	若澤寺に武田勝頼が寺領安堵の朱印状　『百瀬守江氏所蔵文書』（信府和田之内観音領650文、同地蔵領１貫文、同寺家屋敷500文、同神林之内地蔵領１貫文、同新村北方500文、同南条500文、同西牧之内500文　、同三溝之内２貫500文、同竹田明清寺分２貫文、同小坂定楽寺分２貫文）
天正10年７月	安土桃山	1582	小笠原貞慶若澤寺門前に３ヶ条の禁制札を掲げる『水沢真直氏所蔵文書』
天正10年８月	安土桃山	1582	小笠原貞慶若澤寺に寺領寄進、門前十軒分の諸役免許状『下波田百瀬守江氏所蔵文書』（和田観音領650文、同地蔵領１貫200文、寺家屋敷500文、神林之内地蔵量１貫文　、新村北方500文、同南条500文、西牧之内500文、三溝之内２貫500文、竹田明清寺分３貫文、小坂定安寺分２貫500文）『百瀬守江氏所蔵文書』

年　号	時　代	西　暦	記　事
天正18年	安土桃山	1590	天正（太閤）検地御朱印地若澤寺領15石、西行（光）寺領５石、浄（盛）泉寺領５石　『両郡御朱印高附帳』
文禄３年４月８日	安土桃山	1594	細野七右衛門が若澤寺へ鰐口寄進　『善光寺道名所図会』 （宝徳２年（1450）の古器物再利用か？院主宥聖は歴代住職血脈に無い）
文禄３年６月13日	安土桃山	1594	若澤寺、元水沢よりつきがね堂場へ引く 『波多腰太朗氏所蔵文書＝嶋立組大庄屋引渡帳面目録写』
文禄３年	安土桃山	1594	旧寺場とは法久山にござ候　『百瀬光信氏所蔵文書』
文禄４年	安土桃山	1595	若澤寺の末寺法久寺中波田原村へ移る　『信府統記』
慶長19年９月26日	江　戸	1614	小笠原秀政若澤寺領10石寄進及び門前屋敷地役免許状 『水沢真直氏所蔵文書』
元和３年	江　戸	1617	松本城主　戸田康長若澤寺領10石寄進。康長の家臣若澤寺へ禁制札を掲ぐ　『平林功氏所蔵文書』
元和４年	江　戸	1618	若澤寺住職隆昌入寂　『水沢観音堂過去帳』
元和４年	江　戸	1618	２月４日、若澤寺住職隆貞入寂　『水沢観音堂過去帳』 ２月９日、隆賀入寂
寛永10年	江　戸	1633	松本城主　松平出羽守直政　若澤寺へ水沢観音免高10石の所寄進　『平林功氏所蔵文書』
寛永12年	江　戸	1635	若澤寺に仁王門を初丁とする18本の丁石が建立される。　『丁石銘文』 寄進者名有り（現存）四丁目：赤松勘衛門　十丁目：百瀬平左衛門 十三丁目：塩原忠左衛門　十四丁目：百瀬弥三左衛門 十五丁目：穂刈伊左衛門　十六丁目：加藤四郎兵衛 七丁目：残欠　外２本
寛永16年	江　戸	1639	松本城主堀田加賀守正盛より若澤寺へ観音領高10石の寄進状　『平林功氏所蔵文書』
寛永年中	江　戸	1618 ～1643	寛永検地棹請高西光寺23石９斗４升７合、水沢５石１斗４升４合、若澤寺引き５石２斗　『百瀬武夫氏所蔵文書＝森井氏控』
正保２年	江　戸	1645	深志の絵師八々叟居士により「西光寺絵図」の元絵できる 『西光寺絵図＝阿弥陀堂所蔵』
慶安１年	江　戸	1648	松本城主水野出羽守忠職より若澤寺へ水沢観音領先例、有り来りのよう寄附する　『平林功氏所蔵文書』
慶安２年	江　戸	1649	徳川家光将軍家より10石の寺領寄附寺中門前竹木諸役免許の朱印状　隆仁代　（大猷院）　『平林功氏所蔵文書』
慶安５年	江　戸	1652	慶安検地帳　水沢若澤寺持分５石２斗４升３合　『森井氏写し控』 阿弥陀堂分下々畑４畝６歩、下畑６畝21歩、 西光寺持分下々畑１反25歩、屋敷１反４畝
承応２年	江　戸	1653	若澤寺本堂建立　『大庄屋大池八郎右衛門引継帳写し』
承応２年	江　戸	1653	住職隆仁代若澤寺御朱印地都合計８反歩、寺中屋敷１ヶ所 『百瀬守江氏所蔵文書』

年　号	時　代	西　暦	記　事
承応３年	江　戸	1654	若澤寺をつき鐘堂場より今の堂場へ引き上げる　『波多腰太朗氏所蔵文書』
承応３年	江　戸	1654	鐘堂より上の段へ引き申し候　『大庄屋大池八郎右衛門引継帳写し』
寛文４年	江　戸	1664	黒川山論絵図に元寺場の所に建物１棟、若澤寺の所に建物２棟有る 『庄屋百瀬善左衛門文書＝町教育委員会保管』
寛文７年	江　戸	1667	若澤寺住職隆憲入寂　『水沢観音堂過去帳』
寛文９年	江　戸	1669	若澤寺住職隆圓入寂　『水沢観音堂過去帳』
延宝１年 １月６日	江　戸	1673	若澤寺焼失する（住職隆憲代）　『波多腰太朗氏所蔵文書』
延宝３年	江　戸	1675	若澤寺新義真言宗智積院の法流を伝える 『嶋立組大庄屋引渡し帳面目録の写し』　『百瀬光信氏所蔵文書』
天和３年 ５月	江　戸	1683	阿弥陀如来坐像造立（仏師渚村二木杢左衛門、本願麻田三郎兵衛、上波多理春八郎兵衛、光西作兵衛）　『百瀬光信氏所蔵文書』
貞享１年	江　戸	1684	若澤寺住職隆仁入寂　『水沢観音堂過去帳』
貞享２年 ６月11日	江　戸	1685	徳川綱吉将軍より若澤寺領10石寄進の御朱印状　住職頼仁代 『平林功氏所蔵文書』
貞享２年	江　戸	1685	３月７日、若澤寺住職隆敞入寂　『水沢観音堂過去帳』
貞享３年	江　戸	1686	３月25日、若澤寺住職頼仁入寂　『水沢観音堂過去帳』
元禄中	江　戸	1688 ～1703	庄屋（百瀬）源右衛門は西光寺を潰し若澤寺預けとなる 『西光寺絵図＝阿弥陀堂所蔵』
元禄８年	江　戸	1695	西光寺地蔵堂より本尊を若澤寺へ移す　『西光寺絵図＝阿弥陀堂所蔵』
元禄11年	江　戸	1698	嶋立組村絵図に仁王門が旧西光寺（寺家町）に見られる　『庄屋善左衛門』
元禄末年	江　戸	1700 ～1703	阿弥陀堂と仁王門、地蔵堂を熊野権現南へ移す 『西光寺絵図』『波田の史蹟』
宝永２年	江　戸	1705	６月22日、若澤寺住職空観入寂　『水沢観音堂過去帳』
宝永５年	江　戸	1708	松本城主水野家臣小嶋九郎右衛門　田村麿座像若澤寺へ寄進する（田村麿子孫なりという）　住職空阿の時代　『平林功氏所蔵文書』
宝永７年	江　戸	1710	光明山の教税法印は周防山梓川寺を訪ね道鏑和尚に従う 『百瀬光信氏所蔵文書』
正徳５年	江　戸	1715	若澤寺住職空阿入寂　『水沢観音堂過去帳』
享保２年 ８月	江　戸	1717	水沢観音初開帳行う（この時京都より金亀多宝塔購入か? 『嶋立組大庄屋引渡し帳面目録の写し』
享保２年	江　戸	1717	西光寺本堂とともに本尊を若澤寺へ移す　『西光寺絵図＝阿弥陀堂所蔵』
享保３年	江　戸	1718	将軍徳川吉宗の御朱印状　住職音隆代　『平林功氏所蔵文書』
享保７年	江　戸	1722	若澤寺住職隆盛入寂　『水沢観音堂過去帳』
享保７年	江　戸	1722	若澤寺の護摩堂普請始まる　『波多腰太朗氏所蔵文書』 水沢客殿建つ　『百瀬武夫氏所蔵文書＝森井氏控』

年　号	時　代	西　暦	記　事
享保８年 ２月	江　戸	1723	客殿建立　住持尊秀代　客殿本尊不動明王（弘法大師御作） 『平林功氏所蔵文書』
享保10年	江　戸	1725	若澤寺住職廣教入寂　『水沢観音堂過去帳』
享保10年 ９月	江　戸	1725	若澤寺跡石造地蔵像の台座銘 『下波多村塩原長右衛門」「中波多村輿兵左衛門」２躰
享保21年 ２月18日	江　戸	1736	中沢の地蔵洞地区の若澤寺裏参道の丁石銘文「十二丁目施主輿孫左衛門」
元文２年	江　戸	1736	若澤寺住職尊秀入寂　『水沢観音堂過去帳』
元文２年	江　戸	1737	若澤寺什物帳作成　『波多腰太朗氏所蔵文書』
元文２年	江　戸	1737	上波田阿弥陀堂立て替え行う大工中波田村犬飼作内 『百瀬武夫氏所蔵文書＝森井氏控』
元文２年	江　戸	1737	「水沢不動院の記録」を平林弥五右衛門が写す　『平林功氏所蔵文書』
元文５年	江　戸	1740	若澤寺住職光栄入寂　『水沢観音堂過去帳』
寛保１年	江　戸	1741	若澤寺の小作米収納25石5斗5升、西光寺屋敷分収納7石8斗5升 合計43石４斗　『波多腰太朗氏所蔵文書』
延享１年 ７月５日	江　戸	1744	若澤寺御開帳する　『波多腰太朗氏所蔵文書』 『嶋立組大庄屋引渡し帳面目録の写し』（百瀬光信氏）
延享４年	江　戸	1747	若澤寺へ徳川家重９代将軍より寺領10石寄進の御朱印状 『平林功氏所蔵文書』
寛延４年	江　戸	1751	水沢上庫裏、下庫裏共に立て替えこれ有り知空法印代 『百瀬武夫氏所蔵文書＝森井氏控』
宝暦３年	江　戸	1753	上波田大火に遭い阿弥陀堂焼失仁王門脇の地蔵堂移転本尊安置　『阿弥陀堂縁起』
宝暦４年 ２月	江　戸	1754	若澤寺住職栄運檀家と地元村人の協力により、信濃国内所化衆（学僧）100人を寺に止宿させ初法談会を成功させる 『波多腰信義氏所蔵文書』
宝暦12年	江　戸	1762	徳川家治10代将軍より若澤寺領10石寄進の朱印状　『平林功氏所蔵文書』
安永２年	江　戸	1773	水沢観音御開帳盛大に行う　栄運代 『百瀬武夫氏所蔵文書＝森井氏控』『波田町誌』
安永２年	江　戸	1773	若澤寺新什物帳作成　『波多腰太朗氏所蔵文書』
安永７年	江　戸	1778	若澤寺住職中興栄運法印入寂　『水沢観音堂過去帳』
安永９年	江　戸	1780	３月　若澤寺住職憲阿入寂　10月　同秀善入寂　『水沢観音堂過去帳』
江戸後期	江　戸	1780～	水沢山若澤寺跡発掘調査の結果（1780～1850）の陶片と寛永通宝多量出土
天明３年	江　戸	1783	若澤寺住職常阿法印入寂　『水沢観音堂過去帳』
天明８年	江　戸	1788	徳川家斎11代将軍より若澤寺領10石寄進の御朱印状、住職栄豊代
天明８年	江　戸	1788	若澤寺と檀家の間で立木伐採をめぐる対立紛争おこる。住職栄豊代　『波田町誌』

年　号	時　代	西　暦	記　事
寛政１年	江　戸	1789	若澤寺住職憲宥法印入寂　『水沢観音堂過去帳』
寛政２年	江　戸	1790	若澤寺住職栄賢法印入寂　『水沢観音堂過去帳』
寛政５年 ～ 寛政７年	江　戸	1793 ～ 1795	若澤寺住職栄豊法印より不如法の儀に付き近隣の同宗寺院を江戸の役寺真福寺へ報告し対立する　『波田町誌』 若澤寺住職より近隣７ヶ寺の失態を江戸役寺へ報告。若澤寺住職の悪行につき岩垂真正寺より寺社奉行宛て糾明方を出訴する　『波田町誌』
寛政６年	江　戸	1794	若澤寺前住職賢芳法印入寂　『水沢観音堂過去帳』
寛政８年	江　戸	1796	上波田村、下波田村役人ら西光寺絵図を深志の絵師南仙に依頼正保２年（1645）の旧図より写させる　『西光寺絵図』
寛政11年	江　戸	1799	若澤寺へ京都愛染寺より稲荷大明神安置の証明書　『波田町誌』
享和１年	江　戸	1801	観音堂普請地形共に始まる。檀家輿一族50両奉加、上中下波田檀中残らず奉加　『波多腰太朗氏所蔵文書』
享和１年	江　戸	1801	水沢観音堂普請始まる　『波田町誌』
享和１年	江　戸	1801	水沢観音堂片付けする『嶋立組大庄屋引渡し帳面目録の写し＝百瀬光信氏文書』
享和２年	江　戸	1802	3月10日　若澤寺里門地突き作業致す　『嶋立組大庄屋引渡し帳面目録の写し』
享和２年	江　戸	1802	3月29日～4月12日　水沢観音堂御開帳する『嶋立組大庄屋引渡し帳面目録の写し』
文化２年	江　戸	1805	３月21日　水沢観音堂の棟上を行う　大工木曽原野松沢藤次郎住職栄豊代　『嶋立組大庄屋引渡し帳面目録の写し』
文化４年	江　戸	1807	若澤寺に宝筐印塔造立される　『若澤寺跡の栄豊碑文』
文化６年	江　戸	1809	若澤寺墓地の塔婆銘に僧栄忍名
文化６年	江　戸	1809	水沢観音入仏御開帳　『嶋立組大庄屋引渡し帳面目録の写し』
文化11年	江　戸	1814	東海道中膝栗毛の作家十辺舎一九松本訪問の途次若澤寺へ三日間逗留する　『高見常庸日記』
文化12年	江　戸	1815	水沢沙門栄豊　惣社雁社池堤畔に供養碑を建立　『碑銘文』
文政２年	江　戸	1819	一九作の読本『信州水沢観音利益―雑食橋由来』江戸で出版され全国に知れ渡る
文政５年 ２月	江　戸	1822	上波田阿弥陀堂焼失、御本尊は取出す。仁王門、地蔵堂焼残る　『善左ヱ門文書』
文政６年	江　戸	1823	水沢の水配分に付いて若澤寺と上波田村民と和解する　『善左ヱ門文書』
天保２年	江　戸	1831	阿弥陀堂年貢畑について若澤寺隠居知空（栄豊）と上波田村役人出入り『善左ヱ門文書』
天保５年	江　戸	1834	井出道貞『信濃奇勝録』に水沢天狗の話と一山の絵図載る『信濃史料叢書』
天保８年	江　戸	1837	11月27日　若澤寺住職栄豊法印（知空坊）入寂『水沢観音堂過去帳＝墓碑銘』
天保８年	江　戸	1837	末寺の神林福応寺より若澤寺へ離末願い書届く　『波田町誌』
天保14年	江　戸	1843	豊田利忠が『善光寺道名所図会』を名古屋で出版若澤寺が絵図入りで全国に紹介される

年　号	時　代	西　暦	記　事
弘化３年	江　戸	1846	若澤寺の中堂救世殿と田村殿の屋根を銅瓦にて葺く。住職尭朝法印代『尭朝遺牌記事』
弘化３年	江　戸	1846	淵東住人若澤寺屋根銅瓦葺き替え奉加合計二百四十匁目『百瀬友宏氏所蔵文書』
弘化年間	江　戸	1844 ～1847	池田町の歌人内山真弓と和田の萩原元貞が若澤寺を訪れ『水沢日記』を著す
嘉永２年	江　戸	1849	８月　神林村出身の豪商白木屋野口庄三郎銘で石の蓮花型天水鉢を若澤寺に寄付　『現在盛泉寺山門に移す』
嘉永６年	江　戸	1853	若澤寺住職尭朝法印代に京都本山智積院より檀林所の寺格を許される　『尭朝遺牌銘文』
万延２年	江　戸	1861	若澤寺住職尭朝法印入寂　『尭朝遺牌銘文』
元治１年	江　戸	1864	若澤寺住職尭全法印（豊純坊）入寂する　『波多腰信義氏所蔵文書』
元治２年 ２月	江　戸	1865	若澤寺後住道朝法印（尭賢坊）本山へ上り住職拝命『波多腰信義氏所蔵文書』
慶応２年	江　戸	1866	道朝法印の住職に反対のため末寺法久寺と四惣代江戸役寺へ訴訟起こす　『波多腰信義氏所蔵文書』
慶応３年	江　戸	1867	12月　若澤寺住職道朝上京して山階宮より祈願所拝命帰寺『波多腰信義氏所蔵文書』
慶応４年	江　戸	1868	末寺神林福応寺の離末を認め離末状出す　『水沢真直氏所蔵文書』
慶応４年	江　戸	1868	王政復古、明治と改元（若澤寺の所持する御朱印・寺㊞提出命令される）
明治１年	近　代	1868	大政官から神仏分離令全国に廃仏毀釈運動起こる
明治２年	近　代	1869	松本藩主の戸田光則自ら廃仏毀釈を行い菩提寺を廃止、領内に徹底するよう求め自らも神葬祭を行う
明治２年	近　代	1869	７月６日　版籍奉還により藩を排し知藩事を置く
明治４年	近　代	1871	７月　廃藩置県により中南信は筑摩県管下となる。県令永山盛輝
明治４年	近　代	1871	社寺所有地すべてを国に上知し、僧侶の還俗と武士の俸禄が廃止される。帰農僧水沢芬々には庫裏、客殿を住居に無償払い下げ、寺有上知の耕地も無代にて払下げる。若澤寺、西光寺、法久寺の仏像、仏具、中堂救世殿は盛泉寺へ預ける。他の建物と什器はすべて競売される。（全売上代金は13貫652匁2分）『浅田信一郎氏所蔵文書』
明治８年	近　代	1871	旧中堂救世殿は盛泉寺住職真木恵光和尚へ筑摩県より水沢観音堂再建の許可下る。
明治６年 ～ 明治11年	近　代	1869 ～ 1894	若澤寺所有地、法久寺、西光寺及び阿弥陀堂などの所有する田畑は、松本藩の士族の還禄授産の為め無償にて払い下げ、宅地は借地人に無償売却される。　『浅田信一郎氏所蔵文書』
明治26年	近　代	1893	旧若澤寺の水沢観音堂を盛泉寺境内の高爽の場へ移転につき寄附金公募許可願いを県に提出する。盛泉寺住職古田梵仙和尚　『百瀬武夫氏所蔵文書』

若澤寺を知るための活動

教育委員会

年度	実施内容	講師・主催者等（敬称略）	実施期日	実施場所
14	○現地調査関係			
	第２次若澤寺総合調査 遺跡範囲の確定・縄張図作成	波田町教育委員会 委託・(株)写真測図研究所	５～８月	若澤寺跡
	第２次若澤寺総合調査　現地調査 下草刈り、表面採取、礎石調査	松本市立菅野小学校教諭 調査指導:原　明芳 波田町教育委員会	８～11月	若澤寺跡
	○講座・講演会・見学等関係			
	公民館文化財講座『町の文化財を知る若澤寺の謎に迫る』（全３回） ①『慈眼山 若澤寺今昔』ビデオ鑑賞 『若澤寺の話』 ②若澤寺・元寺場遺跡の見学会 ③町外に点在する若澤寺遺物の見学	講師:田中昭三（波田町） 講師:波多腰忠行 大月康雄（ともに波田町）	５月17日 ５月25日 ６月15日	情報文化センター 若澤寺、元寺場跡 松本市 正覚院他
	町の歴史・文化財を見学しながらウォーキング大会	10区分館教養部・婦人部	９月８日	若澤寺、盛泉寺等
	上波田文化財・史跡散策会	14区分館主催	10月20日	仁王様、若澤寺等
	公民館研究集会基調講演 地域づくりと文化財（若澤寺）	松本市立菅野小学校教諭 講師:原　明芳	H15年 ２月16日	波田町中央公民館
	中信地区文化財担当者会議 波田町の指定文化財と若澤寺遺産	長野県文化財保護協会理事 講師:宮島佳敬	H15年 ２月21日	波田町中央公民館
15	○現地調査関係			
	若澤寺現地発掘調査・地鎮式	波田町教育委員会	６月13日	若澤寺跡
	若澤寺現地発掘調査	松本市立菅野小学校教諭 発掘調査指導:原　明芳	６～８月	
	若澤寺発掘現場一般見学会 （一般参加約60名）	波田町教育委員会 松本市立菅野小学校教諭 発掘調査指導:原　明芳	８月23日	若澤寺跡
	若澤寺参道調査 仁王門からの参道調査・距離測定	波田町教育委員会	９月30日	若澤寺参道

年度	実施内容	講師・主催者等（敬称略）	実施期日	実施場所
15	若澤寺・元寺場巡察	波田町教育委員会 文化財保護委員他	10月８日	若澤寺・元寺場跡
	若澤寺トレンチ発掘調査あと埋め戻し	波田町教育委員会	12月４日	若澤寺跡
	若澤寺参道・堂平（ドウダイラ）調査	波田町教育委員会	12月11日	若澤寺参道近辺
	○講座・講演会・見学会関係			
	公民館講座　波田町を知る 「新緑の自然の中、水沢まで歩き 山菜の天ぷらや鍋を楽しもう」	波田町中央公民館 講師:清沢由之（朝日村） 波多腰忠行（波田町）	５月11日	仁王門～水沢
	公民館講座　波田町探検隊 若澤寺へ発掘に行こう（小学生）	波田町中央公民館 松本市立菅野小学校教諭 発掘調査指導:原　明芳	７月５日	若澤寺跡
	上波田文化財・史跡散策会	14区分館主催	７月24日	仁王様、若澤寺他
	安曇村生涯学習講座　お隣へ行こう 幻の若澤寺を追って	安曇村教育委員会	９月28日	若澤寺他
	まほろばウォーク　文化財コースの設定	波田町教育委員会	10月５日	若澤寺他
	波田小学校２年３組 親子親睦会 若澤寺見学	ＰＴＡ学級長	10月18日	若澤寺他
	波田町文化祭　若澤寺遺跡調査速報展 『ここまでわかった若澤寺』	波田町教育委員会	11月1,2日	波田町中央公民館
	若澤寺調査発掘報告講演会 『ここまでわかった若澤寺』	松本市立菅野小学校教諭 講師：原　明芳	11月２日	波田町中央公民館
	塩尻市吉田公民館・若澤寺見学	塩尻市吉田公民館	11月30日	若澤寺他
	○その他、調査等			
	古文書資料・波多腰信義氏より借用 （文献調査始まる）		H16年 １月13日	
	元無量山・若澤寺塔頭　後・儀応山・ 西光寺絵図　波田町有形文化財に指定	波田町教育委員会	H16年 ３月１日	
	▼宮島佳敬先生 若澤寺関係調査 ・波田町の文化財案内 ・波田町文化財講座（文化財探訪） ・若澤寺参道の丁石（菩提心の展開） ・旧若澤寺の丁石 ・儀應山西光寺絵図 ・丁石（町石）について ・水澤山若澤寺資料 ・波田町の文化財と若澤寺	長野県文化財保護協会理事 資料作成：宮島佳敬		各資料を公民館に提供していただき公民館に展示

年度	実施内容	講師・主催者等（敬称略）	実施期日	実施場所
16	○現地調査関係			
	若澤寺及び堂平（ドウダイラ）調査	松本市立菅野小学校教諭 発掘調査指導：原 明芳 波田町教育委員会	4月30日	若澤寺参道近辺
	若澤寺発掘調査	松本市立菅野小学校教諭 発掘調査指導：原 明芳 波田町教育委員会	6月16日 ～ 8月	若澤寺跡
	若澤寺トレンチ発掘調査・埋め戻し	波田町教育委員会	11月18日	若澤寺跡 造塔供養碑 （栄豊記）拓本 指導・古畑繁實
	水沢の川沿い若澤寺遺物調査 （第11丁目印刻が有る台石発見）	波田町教育委員会	12月10日	水沢
	波田町若澤寺遺跡総合調査出土遺物 整理・分析の実施	長野県埋蔵文化センター 調査研究員：市川隆之	H17年 1月～	
	○講座・講演会・見学等関係			
	公民館講座　波田町を知る 自然体験《若澤寺編》（山菜採り）	公民館講座 講師：清沢由之(朝日村) 波多腰忠行(波田町)	5月9日	若澤寺跡近辺
	西光寺絵図について意見聴取のため 東京芸術大学へ	波田町教育委員会	6月4日	東京芸術大学
	塩尻市体育協会来場 若澤寺、歴史の遊歩道散策案内	波田町教育委員会	8月1日	若澤寺跡及び 歴史の遊歩道
	松本市菅野小学校職員研修	松本市立菅野小学校	8月11日	若澤寺跡
	公民館講座　波田町周辺に残る若澤寺 ゆかりの文化財を見に行こう	公民館講座	9月4日	松本市今井、山形村、梓川村、三郷村
	文化財講座　歴史ロマンの旅若澤寺を語る 『ここまでわかった！ ここがわからない!? 若澤寺』	松本市立菅野小学校教諭 講師：原 明芳	9月18日	波田町中央公民館
	公民館講座　波田町を知る 自然体験《若澤寺編》（きのこ採り）	公民館講座 講師：清沢由之(朝日村) 波多腰忠行(波田町)	10月2日	仁王門～水沢
	寛文黒川山論裁許絵図の修復・裏打ち	依頼先・樋口表具店	10月	
	波田町文化祭　若澤寺発掘速報展	波田町教育委員会	10月30,31日	波田町中央公民館
	文化財講演「若澤寺文献資料集1」発刊記念『江戸時代の文書から見た若澤寺の様子』	波田町文化財保護委員会委員長 講師：百瀬光信	12月15日	波田町中央公民館

公民館講座 波田町探検隊（H15.7.5）

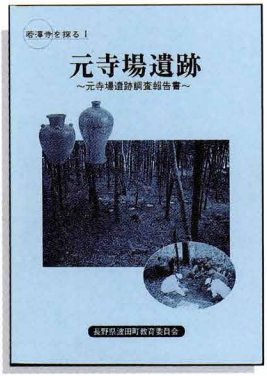
若澤寺調査発掘報告講演会（H15.11.2）

◆若澤寺関連資料・出版物紹介

（平成14年３月～17年３月に発刊、掲載されたものです。）

①若澤寺を探るⅠ『元寺場遺跡』　～元寺場遺跡調査報告書～

平成14年３月発刊
執　筆　市川　隆之、横内　文人、
　　松田　行雄、笹本　正治他
編　集　波田町教育委員会　☆残部なし



①若澤寺を探るⅠ『元寺場遺跡』

②『若澤寺一山之略絵図』下敷き

平成14年３月作成　１枚300円にて販売中
残りわずか

③波田町はっけん　～歴史ロマンの薫り～『絵はがき』(A)

平成14年４月作成　若澤寺関連遺物を中心に、６枚１組で販売中
１セット300円

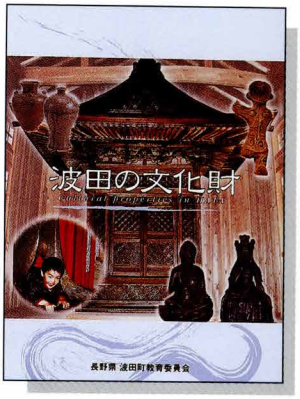
②『若澤寺一山之略絵図』下敷き

③波田町はっけん～歴史ロマンの薫り～
『はがき』(A)

④館報はたまち　特集『若澤寺を行く』
平成14年８月号
編　集　波田町公民館報編集委員

⑤『文化財信濃』第30巻
第４号へ『田村堂』原稿を投稿
平成16年３月31日発刊　投稿者　波多腰英文

⑥『波田の文化財』
平成16年３月31日発刊
執筆者　宮島　佳敬、原　　明芳、
　　百瀬　光信、波多腰英文他
編　集　波田町教育委員会
町内文化財の紹介本　１部500円にて販売中



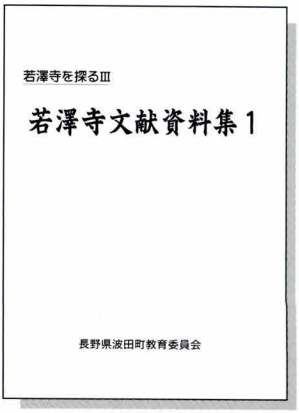
⑥『波田の文化財』

⑦波田町はっけん～歴史ロマンの薫り～『絵はがき』(B)
平成16年４月作成　町文化財関係を中心に
６枚１組で販売中　１セット300円

⑧若澤寺を探るⅢ『若澤寺文献資料集１』
平成16年10月30日発刊
執筆者　百瀬　光信、波多腰英文
編　集　波田町教育委員会

⑨『文化財信濃』第31巻
第３号へ『波田町の文化財とその問題点』原稿を投稿
平成16年12月31日発刊　投稿者　波多腰英文

⑩若澤寺を探るⅣ『若澤寺文献資料集２』
平成17年３月発刊
執筆者　百瀬　光信、波多腰英文
編　集　波田町教育委員会



⑧若澤寺を探るⅢ
『若澤寺文献資料集１』

⑪若澤寺を探るⅡ『若澤寺跡』　～若澤寺跡調査報告書～
平成17年３月発刊
執筆者　原　　明芳、市川　隆之、牛山　佳幸他
編　集　波田町教育委員会

若澤寺を探るⅡ　若澤寺跡

～若澤寺跡調査報告書～

— 平成17年　3月31日　発行 —

◎編集・発行
長野県波田町教育委員会
〒390-1492　長野県東筑摩郡波田町4417-1

◎印刷・製本
カシヨ株式会社
長野県長野市西和田286

～文化財は昨日、今日でできるものではない。
地域の歴史が凝縮された、代わりのきかない地域の宝。
そして、ふるさとの誇り～

にゃくたくじ

Nyakutakuji

長野県波田町教育委員会